

二〇一四年(平成二十六年)三月

東京阿部家資料

文書編(4)

福山市教育委員会

目次

凡例

享和元年と同三年初り迄日記書抜部分

「享和元年と同三年初り迄日記書抜部分」について

諸伺済之部（伺済） 1

旅行之部（旅行） 41

御普請出火其外ニ而公辺江御届伺之部

（御普請之部 公辺江御届伺） 52

諸達諸届之部（享和元年 諸達諸届） 73

御供一件之部（御供一件） 107

凡 例

- 一 本書は、「東京阿部家資料」文書編(4)として、旧福山藩主阿部家(東京阿部家)から福山市にご寄付いただいた資料の内、解読の済んだ「享和元年方同三年初り迄日記書抜部分」を収録した。
 - 一 文書の収録については、原則として原文の形にそっようにつとめたが、読者の便を図るため、つぎの点に留意した。
 - 1 漢字の字体については、原則として新字体を用いた。異字・あて字等はつとめて通行の表記に統一したが、そのまま用いたものもある。
 - 2 変体仮名は、原則として、ひらがなに改めたが、つぎの助詞は小活字で示した。
 - 一 而(て)・江(え)・者(は)・与(と)・茂(も)・尔(に)・而已(のみ)
 - 3 合字の方(より)はそのまま示した。
 - 一 桑田直美があたった。
 - 4 読点(・)あるいは並列点(・)を付けた。
 - 一 本書の発行は、福山市教育委員会があたった。
 - 5 平出・欠字は省略した。
 - 一 本書の編集は、福山市教育委員会文化課 まなびの館ローズコム 歴史資料室の 鐘尾光世・小林英行・
 - 6 誤字や当て字は原則原文のまま記し、行間に()で適切な文字を記した。脱字と思われる場合には(○脱力)、不要な文字や意味の通らない文字は(ママ)と記した。
 - 一 石井清彦 太田玲子 折田恵子 正田勝幸
 - 7 判読できなかった文字は□とし、判読に疑念が残る文字は行間に(カ)、あるいは(○カ)とした。
 - 一 林多恵子 山本明子

「享和元年より同三年初り迄日記書抜部分」について

本資料は、藩の公的な事務手続きに関する範例記録から抜き書きされたもので、享和元年（一八〇一年）～同三年（一八〇三年）は、福山藩では藩主が阿部家四代正倫から五代正精に代わる時期に当る。「若殿様」として出てくるのは正精のことである。

目次には「諸伺済之部」・「旅行之部」・「御普請・出火其外二而公辺江御届伺之部」・「諸達諸届之部」・「御供一件之部」・「被仰出之部」の六部が列記されているが、この冊子は「御供一件之部」で終わっており、「被仰出之部」の記載はない。

資料中藩士たちは、公私にわたり細かな動静に至るまで藩に許可を願ひ出ている。願書を差し出す際は定法に適っているからといってすぐに提出するのではなく、大抵は上司や縁者を通じてあらかじめ年寄中の内慮を伺い、許しが出て後に願書提出の運びとなる。それらはその都度前例を

紐解き、定法に照らして取り計らわれているが、特に家の存続にかかわるような事案では老衆で慎重に評議された様子が窺える。よく名前が登場する軍記は三浦軍記、治左衛門は山岡治左衛門、平助は町野平助のことで、いずれも享和当時江戸に在勤していた年寄である。

内容は、出仕・致仕・病休・忌引・出張・拝借金・長寿賞美等の伺いや届け、警固・火消の勤務割り、道路・下水道普請の段取り等々、現代にも通ずる項目が多くある。一方、「改方」の書式（44頁）や、藩主供連れ心得の子細な記述（107頁）からは、この時代特有の制度が読み取れる。正倫が藩の財政改革を推し進めていた時世であることから「時節柄……」との文言が所々に見られ、また、浦賀の番所へ役人を派遣する場面（41頁）では「外聞も如何敷」・「虎口」と記され、日本近海に外国船が来航するようになった当時の世相も垣間見える。

体制のしきたりに則り、時代を生きた藩士たちの有様の一端がわかる資料である。

享和元年方同三年初り迄日記書抜部分

一 諸伺濟之部 一 旅行之部

一 (御普請 出火) 其外ニ而公辺江御届伺之部

一 諸達諸届之部

一 御供一件之部

一 被仰出之部

伺濟

享和元年二月二日

一 左之通当人問合、明和九年二月細井藤右衛門悴藤兵衛例
 茂有之、其上去申年十一月部部住無足之者無拋節、鑓為
 持不苦候儀伺相濟、且此度之儀も未被召出無之、全ク之
 無足与申ニも有之間敷、右藤兵衛例ニ見合旁苦ケ間敷其
 彼ヲ以相伺候処、先格茂有之候者其通取計候様被仰聞候
 高橋源四郎悴大八儀、実父小林与兵衛大病ニ付罷越度
 願之通被仰付候間、今日出立為致候ニ付外聞ニも相成

福山藩
藤田蔵

候間、道中鑓為持苦ケ間敷哉

但、右ニ付御閑所通手形等不相願候事

同年同月十五日

一 左之通表御医師玄益方問合、御家中縁談之儀ニ付去辰年
 四月被仰出も有之候得とも、御医師者兼而無格無席与被
 仰候付給人無足之次第ハ御立被置候得共、御家中諸士之
 場与者意味も違ひ、跡式も無之先其身一代限ニ被召仕候
 者之儀故苦ケ間敷、且去辰年十二月渡辺仙庵悴了沢儀、
 在ニ罷在候町医師方妻縁談申合度問合、御役方御内々
 伺之上願上為差出候類例も有之、其上此度者郷士たり共
 内縁も有之儀旁苦ケ間敷哉伺候処、御役手申合之通、御
 医師之儀ハ御家中諸士之場共違ひ候儀、且類例并内縁も
 有之候者猶更不苦、治左衛門殿被仰聞候

岡西栄玄、総州相馬郡稻村ニ在在候郷土海老原七郎治
 与申者内縁も御座候ニ付、同人娘私妻ニ再縁談申合度、
 不苦哉問合

享和元年二月廿二日

一 左之通御番頭方問合、寛政十年六月赤尾孫七悴小四郎出

奔之節、同人妻病氣ニ付里方江差遣置候処、其節相勝不

申駕籠ニ而も難罷帰旨ニ付、伺之上先方ニ慎罷在、并去

申年七月長坂儀兵衛御咎ニ付、同人悴東助妻同断ニ付、

伺之上右之通取計、是等之例ヲ以軍記殿へ相伺候処、無

拋儀先例も有之候者其通与被仰聞候

森戸兵橋妹儀、先達而方他之親類共方江逗留ニ差遣置

候処、御咎被仰付候間早速呼戻シ可申候処、此節至而

大病ニ付駕籠ニ而も難引取、其俣差置苦ケ間敷哉

但、兵橋御咎ニ付此妹意味有之候得共、外之例同様

二者相成間敷候得共、御役方申合候儀も有之候ニ付

右之通

同年同月廿九日

一 左之趣御奥家老九十郎方問合、先例相吟候処、三月朔日

御祝儀無之候共願書差出候例も無之候得共、廿八日御祝

儀無之月者都而願書差出候ニ付、右ニ准シ苦ケ間敷哉と

今日相伺候処、御一席被仰合之上先例も無之候者廿八日

共違候間無用ニ致候様、乍去実々難差延儀者其節相伺候

様被仰聞候

三月朔日御祝儀無之ニ付、都而之願書差出不苦候哉

享和元年三月五日

一 川越林右衛門実方兄不所存者、当時行衛不相知候ニ付此

節実母久離いたし、公儀御帳附之儀相願度所存ニ候得共、

末子中川健太当時浪人ニ罷在候ニ付而者、何卒林右衛門

方御帳附之儀相願具候様実母申聞候由、右体之願可相成

哉申合具候様御番頭被申聞候、然ル処久離御帳附願之主

他ニ罷在、御家中親類共方相願候先例も不見当、林右衛

門方者久離御帳附与申儀も目上之事故難相成候得共、万

一御名等も出候儀難計候ニ付実母申聞候趣ヲ以為相願、

以御憐愍御聞届被成下可然哉与此間御年寄中江委細申達

相伺候処、是迄先例茂無之御届之処難被成、林右衛門壹

人通路御差留之処者御聞濟被下候趣ニ候得共、伺之趣ニ

而者諸親類之場も有之候ニ付、何レニも実方ニ而相願候

様被仰聞候

川越林右衛門実方兄岩井八十次郎儀、諏訪新之丞様ニ相勤罷在候処、寛政十年八月十四日退身仕、当時行衛相知不申平日不所存者ニ而往々難見届、実母初諸親類久離仕度奉存候得共、実方弟中川鍵吉当時浪人ニ罷在右願難仕御座候ニ付、私方公儀御帳附之儀相願具候様実母儀申聞候、依之何卒以御威光公儀御帳ニ御載被下置候様、内伺差出候而茂苦ケ間敷哉之旨問合

同年同月八日伺済

一左之趣兼而申合置候処、昨日被仰出も有之候ニ付尚又申合相伺候処、以来伺之通相心得候様、乍併上草履御用不被成候御廊下之儀者、是迄之通御座敷同様ニ相心得候様被仰聞候

各様方御座敷内御通行之節、何茂手を突罷在御会釈被下候得者、御時宜仕候御廊下御通行之節も是迄右之通之心得ニ罷在候得共、御座敷同様之心得ニ而も如何敷奉存候間、以来途中之通相心得扣罷在候而可然哉伺

享和元年三月十一日

一去七日御家中諸士御年寄中江対シ、御席者勿論途中会釈之儀被仰渡候御書付之内、宝永三年被仰出候御ケ条有之候段相見候処、一向御役場旧記等ニも不見当、若其頃宇都宮表計被仰出候ニ而者無之哉諸向方問合も御座候節、挨拶等も御座候ニ付今日相伺候処、左之通御書留為御見被成候

宝永三戌年三月朔日、被仰出候左之通

覚

一御家老中江対シ礼儀正敷被致候者御役儀を重し而之儀
ニ候得者、実者御上を被奉敬上候条、此旨を可被存候事

一御家老中御用之儀被仰渡候砌、何レニも先被得其意御役筋ニ付存寄被申度旨候者、追而内達ニ可被申候、人多中ニ而其理をあらそひ被申間敷候

但、内談之節心底不残幾えニも可被申事

一御家老中江もの被申候節者手をつき応対可有之事、并座配等もしつゝ被申様子ヲ以礼法厚可被致事

一他所者と御家老中与御出合之節其座ニ被罷在候者、尚以崇敬之体ニ可被致候、他所之風聞も有之者ニ候間、其心得可有之事

一於途中出合之節、他所者又者所之もの等迄も見渡候儀
ニ候得者、御家老中を被見掛候者立止り急度時宜有之、御家老中通過キ被成候後可被通、横道ニ而出合之節行先を横ぎり通候様之事なく脇ニひかへ、被申時宜有之
後可被通事

但、急用之節者其断を被致可被通事

一御門ノ御番所ニ被詰候衆も、御家老中被見掛候者、敷居際迄被出時宜可有之事

一右之通ニ候得共、若間違之心得有之礼法違候衆中者、御家老中より以来可被慎由御申通可有之候間、可被得其

意候事

右者三浦作右衛門殿江被仰出候得者、各江可申談之旨私共奉蒙御意趣ニ御座候、御同役尤御支配中江も御申通可有之候、已上

戌三月朔日

享和元年三月十七日

一左之通当人問合、先格も有之、御役方承濟勝手次第与申談、一卜通軍記殿江申達置候

岡西栄玄同苗養亭儀、久腰勝之痛相勝不申候ニ付、養亭養方之兄出自東雲方江為保養、折々罷越止宿仕苦ケ間敷哉

同年同月廿五日

一左之通御小性頭方問合ニ付、平日之御日柄杯共違、殊ニ未御出棺前之事故相同候処、平日共違候得共病氣無拋事故願書為差出候様被仰聞候

飯塚宗助当月上旬方疾瘡相煩引込罷在候処、此節薬湯江罷越候者快も可相成旨医師申聞候間、薬湯願書差出候而も苦ケ間敷哉

但、於姫様恵教院様御中陰也

同年三月廿六日

一服部九十郎御新葬御供之節駕籠御免相願候事、尤願達之

部ニ有之候間爰ニ略ス

享和元年同月廿七日

一 例年諸向方差出候下冷又者足痛所ニ付、夏足袋願当月廿日迄ニ御役方ニ而取集候上此節御席江差出候処、御中陰之内者見合可申哉、去ル寛政十一年三月御中陰之内為相願右足痛願、伺之上諸向方為相願、御役方ニ而取集候上差出候例も有之候間、此節差出候而茂苦ケ間敷哉与相同候処、不苦候間差出候様被仰聞候

同

一 清水権蔵、親山口平馬組清水為右衛門方ニ是迄同居罷在候処、此度病死ニ付丸山ニ而御長屋拝借被仰付候

但、本文之通親為左衛門病死ニ付跡番代被申付候、依之去已十一月御坊主桂碩同様御長屋内願差出申度旨御附御小性頭方問合、親為左衛門病死ニ付而者全桂碩同様ニも有之問敷、是迄ケ様之例も無之、組拔同様上方拝借被仰付候者ニも可有之哉先達而相同候処、今日右之通被仰付候、尤母并兄弟共ニ権蔵厄介ニ無之、組方

人別もの也

一 前条ニ付、以来組方御雇無之、被召出候子共并小役人等組入之節悴共被召出居候者、其節御長屋拝借又は暫之内同居仕罷在度旨為相願、尤御長屋内願致候共御長屋無之節者、同居被仰付可然者と申合置候

享和元四月二日

一 左之通各申合之上相同候処、其通相心得候様被仰聞候

殿様御中陰之内者、御足輕共御鉄砲筒弘火業之事故見合置候ニ付、若殿様御中陰ニも同様見合置候様可申哉

同日

一 左之通各申合之上相同候処、其通相心得取計候様被仰聞候

若殿様御中陰之内、都而神文前書罰文計為統聞、血判者御忌明之上取納候事ニ去未年三月伺相濟候、然ル処諸願書之儀も殿様御中陰之通、療用其外実々難延置儀ニ候者格別、不差急儀者差留可申哉
但、療用等ニも其節伺之上取計可申事

同年同月十二日

一 忌引并産穢引御免之者御役神文取納之儀、忌丈不相立内者前書罰文計為読聞、追而忌明之上血判取納候儀も有之、又忌丈不相立候共血判迄も取納候例も有之、左之通区々二相見申候、乍併去寛政十一年十一月十四日、川村仙太郎病氣神文忌引御免被仰付候者其当日取納可然、各申合相極候例二見合候得共、御役神文之儀者尚更、忌丈ケ不相立候共忌引御免二候者血判迄も取納可然哉、乍去是迄被仰出且同等も不見、当御役方申合而已之儀、兼而服穢有之者、御役神文・病氣神文共血判迄取納御構無之旨被仰出有之候得共、忌と服穢与者違も可有之哉、向後如何相心得可申哉、尚亦此度申合昨日相伺候処、被仰合之上御内尊被成御伺候処、忌引・血忌引共御免被仰付候上者忌并産穢共消候尊意二候間、以来忌丈不相立候共御役神文・病氣神文共血判迄茂取納不苦候間、其段相心得取計候様被仰聞候

安永六年十二月廿一日塩田糺妻出産、同廿二日血忌引

御免、同日押合役被仰付、同廿四日神文血判迄御取納有之候例

天明元年十一月廿九日関喜右衛門実母病死、十二月三日忌引御免、同廿六日丸山御禱屋頭取被仰付、同日神文血判迄取納候例

寛政元年六月六日渡辺藤五郎御用御疊表納方掛リ被仰付、未神文取納無之内養父長左衛門病死、同廿五日忌引御免、同廿七日忌丈不相立候二付神文前書罰文計為読聞置、閏六月九日血判取納候例

寛政十二年三月八日高橋平次郎親長次郎病死、四月朔日忌引御免、同十日御料理人頭見習被仰付、同日神文血判迄取納候例

享和元年四月十七日 五月十一日二も有之

一 左之通御供番頭方問合、去ル申年十月十九日槍劍御覽之節同様之例も有之、此節御出も無之二付罷出候而も不苦哉与相伺候処、其通与被仰聞候

中西庄藏・手嶋七兵衛・久保田銀平明日当番二付頼合、

馬術御覽ニ可罷出心得ニ罷在候処、仲ケ間共方も御覽
ニ罷出、且若殿様御供加番・御新造様火用御供心得等
ニ而繰合出来兼、当番方罷出苦ケ間敷哉

享和元年
同年同月廿五日

一左之通相願候而も苦ケ間敷哉先達而当人方内談、然ル処
ケ様之先格も無之候得共、寛政六年十一月被仰出も有之、
旁皿地之儀故苦ケ間敷各申合相伺候処、不苦為相願候様
治左衛門殿被仰聞候

服部半助内願之通、岩崎未内諸屋敷拜領被仰付、右ニ
付仮形ニ家作仕候処、内外難渋ニ付何卒相応之拝借金
被仰付被下候様願

但、願書付別帳ニ有之

同年五月三日

一左之通当人内々問合、趣意之趣至極尤ニ候得とも、嫡子
鍵太郎未拾七才ニも不相成、ケ様之例も不見当、且縦令
拾七才以上ニ而も嫡子御目見前ニ親隠居願差出例も不見
当、旁隠居願差出及間敷旨申談可然、併寸志申出候儀御

役方限及挨拶候而も如何ニ付、昨日相伺候処御聞置、御
役方申合之通願差出ニ不及候間、其趣程宜及挨拶候様被
仰聞候

佐久間林右衛門追々老衰仕、御番合等緩力ニ任七仮成
ニ勤仕罷在重々奉恐入候、依之嫡子鍵太郎儀未拾七才
ニ不相成旁奉恐入候得共、隠居願等差出候而も苦ケ間
敷哉内々問合

同年同月九日

一左之通昨夜問合、飛脚之外止宿容易不相成候得共、病体
無摠趣相聞及深更候間差掛候儀御役方承濟、明早朝今日
之日附ニ而願書差出候様各申合之上被申談之旨、今朝持
出ニ付軍記殿江申達置候

吉田昌保妻之甥小林鉄次郎儀、罷越候処持病之積氣差
発、養生為仕候処押而も難罷出体ニ御座候、最早御門
刻限過ニ茂相成候ニ付、何卒今晚止宿為仕苦ケ間敷哉
享和元年五月十三日

一左之趣奥御医師方問合、ケ様之先例不見当、何れ被右出

候砌早速及御達候歟、又者御役方迄可申届置候処、無其儀不埒之事ニ候得共、是迄市中暮之者右様之儀心附行届間敷、病体実々無拋趣ニ相聞候ニ付、右不行届場者御勘弁可被成候哉、何分御年寄中御内存相伺遣可然申合、今日平助殿江委細申達相伺候処、御聞置暫過被仰聞候者、御評議被成候処御定法も有之候得共、御家唯今者殊俗仕与違ひ外ニ移ニも相成間敷、依而此度之儀者御勘弁被成候処、願書為差出候様

笹山道伯悴道悦儀、外科為執行兼而駿府表江差遣置候、先達而私儀被召出候ニ付、其砌早速呼戻シ差遣候処、積氣(積)其上痔疾ニ而旅中無覚束難罷歸旨申越候ニ付、猶亦少々も快候者如何様ニも仕罷歸候様申遣候処、此節迄ニ者如何様ニも仕可罷歸旨申越候、然ル処又々同扁ニ付此上暫之内罷在保養仕度旨申越候、先頃方再応及懸合候節、其段御達不申上旁奉恐入候得共、何卒任其意差置養生為仕度願書等差出候様可相成哉、何分及差

凶具候様

一前条ニ付差扣同等問合も候者、如何及挨拶哉与相伺候処、前書之通御勘弁被下候事故、寸志同等ニ不及旨被仰聞候享和元年五月十九日

一左之通奥御医師問合、各申合候処奥表御医師へ御預与申名目ニも無之、拾五才迄七話仕遣候様被仰付置候者之事故、勝手次第出席為仕候而不苦哉ニ候得共、一卜通相伺候処、勝手次第与被仰聞候

加藤三折儀、奥表御医師江拾五才迄七話仕遣候様被仰付置候、此度於通部屋山田玄瑞会頭ニ而医術申合仕候、右之席江三折儀も出席為仕候而も不苦候哉、出席帳江名面も書載候事故問合之旨

享和元年五月廿一日
一御広間御飾附之御弓、休弦ニ致置候様被仰出候処、此度左之通御元々江も及内談候上相伺候処、御役方伺之通以来張置折々引替候様、御元々江茂申談候様被仰聞候ニ付、左候者以来其節ニ御元々申合取計可申哉与申達候処、其通与被仰聞候

御広間御飾附之御弓、張置候而者損勝ニ相成候ニ付、
休張ニ致置候様天明九年正月被仰出候得共、右様之御
弓休置候もの二者有之間敷、一体火分も如何敷、且
久々休置候得者自然与夜も出火急之御用意ニ不相成、
依而前々之通張置、折々引替候者却而惣御弓之為ニも
宜有御座候伺

同年同月廿四日

一左之通当人問合、然ル処寛政九年三月、秋元万蔵他ニ而
柔術世話取濟候ニ付、自己与して門弟相招稽古仕度、依
而何レ成共御稽古場拝借仕度旨御元々方問合之節、他之
者茂入交候儀者有之ニ付、自己与して稽古世話取之儀、
他之者入怪我等も有之節恐入候儀ニ付、他之者入候儀者
御役場限差留候趣申伝、稽古場拝借之儀者取濟候、此度
之儀者従上稽古并稽古場之儀も被仰付置趣意も違候事故
不苦、各申合今日相伺候処、勝手次第可申談旨被仰聞候
三浦音人、脇坂淡路守様御家来一兩輩、流儀之劍術為
稽古罷越候処、差掛り雨天之節杯遠方罷越其俣差戻候

も残念、且稽古出精之折ニも相成候ニ付、先達而稽古
場拝借之儀も被仰付置候事故、両術明キ日雨天之節、
差掛り罷越候者稽古場江召連稽古仕度奉存候、他者入
交候儀如何可有之間合候旨

享和元年
同年六月六日

一左之通達有之候間、其節兩御役下立合差出候様軍記殿被
仰聞候処、此者儀者山口平馬組実父方ニ同居ニ付、立合
ニ不及旨申達候

御咎中飯米願

高松林八

同年同月九日

一是迄閉門ニ相当候咎者御宅御用ニ候間、御密書役部ヲ以
内々相伺候処、押込与申名目者何レニ相当候共、以来者
御宅御用ニ者無之旨被仰合相濟候旨

同日

一左之通御元々方問合、安年八年六月高嶋郡八御咎中之例
も有之、左之通及挨拶軍記殿江も申達置、其段兩御役下
御門方江も申移候

御元々方問合

中沢清次郎女房、当月臨月ニ付先達而御役方方切手申
受候処、御咎被仰付候ニ付、若シ虫氣附候者如何取計
可申哉

御役方方挨拶

中沢清次郎御咎中女房虫氣病中ニ候ハ、矢張御役方方
遣置候切手ニ而、隣家又ハ相支配之者方醫師并取掲姥
迎遣候、尤昼夜共立合差出候様差懸之事故、向寄之御
役下江相支配之内方其段直ニ申達候様

一前条跡ニ而其段被及御達、御役方江も被申届候様御元々
江是又申談置候

同年同月十二日

一左之通御小性頭問合、部屋住無足之者鑓為持候儀、去十
一月伺も相濟、当時小助儀も病氣引込中供ニも難立儀ニ
候得者、無抛趣相聞候ニ付勝手次第与及挨拶、一卜通申
達候

阿部登祢太、父之実方伯父山口蘭奥斎葬送之節、親小

助儀引込中故供ニ立候処、鑓為持候而も不苦哉

享和元年六月廿日

一左之通立合候旨兩御役下申達候

中沢清次郎御咎中女房虫氣附立合之儀、今曉子刻隣并
相支配之場ニ而小倉才次申達候ニ付、同人立合取掲姥
無滯出入為致候旨

同年同月廿六日

一左之通御奥家老問合之処、小役人之者方へ丸山三組之内
方養子養女与縁組致候儀者先格も有之不苦候得共、江戸
組之儀者何ケ年相勤候共其年々一記限之御抱ニ而、丸山
組御足輕与ハ趣意も相違いたし、一体不宜心得候得共尚
此度申合之上、小役之者方江江戸組方養子取組候儀不相
成候趣、今日及挨拶候

小役人之者方江江戸組御足輕共之内方養子取組候儀、
可相成儀ニも候哉問合之旨

但、享和二年二月十一日不苦与伺濟有之

同年同月廿九日

一 真野郡左衛門次男才次、願之通御徒士江被召出御宛介並之通被成下候、右之通郡左衛門江可被申談候、以上

一 前条御書付之趣ニ而者、郡左衛門願濟被仰渡候趣ニ相見候得共、御役方ニ而ケ様之儀取扱候節ハ、次男才次麻上下着用為致郡左衛門召連罷越候様申遣、罷出候節当人江御書付之趣申渡候心得ニ候得共、去寛政十一年七月御徒士被召出方御改以後、御役方ニ而取扱候儀新例同様ニ御座候間、如何心得可申談哉与相伺候処、矢張郡左衛門願濟之趣ニ心得、郡左衛門計召呼申渡候様平助殿被仰聞候同年七月三日

一 福田清藏養子伺書差出候処、給人以上養子願文ニ実子或者男子無御座候与認来申候事ニ有之候、清藏儀無足之事故願文ニ准シ伺書等も一卜通ニ而可然哉、御役方限此間平助殿江相伺候処、御役方存寄之通給人以上者格別、清藏無足之事故一卜通伺書為差出可申旨被仰聞

伺書別帳ニ有之

享和元年七月三日

一 左之通帳改方伺出候、先達而加番等相勤候者ハ、一日見習御番入為致候例者有之、左も無之者一日見習番入不宣候得共、此節人少無拋儀ニ付、以後之形ニ者不相成候得共、各申合勝手次第番入為致候様

小泉幸吉昨今見習明日方番入候処、新役同士代合相成且亦病人も御座候ニ付、相成候事ニ御座候ハ、今日方番入為致度旨

同年同月十一日

一 湯治願再願、此上式廻リ罷在保養仕度旨申処、入湯仕度与相認候様昨日軍記殿被仰聞候ニ付、右之通文言ニ相成候、是迄之先格者保養与認候得共、以来入湯与認可申哉相伺候処、其通与被仰聞候

一 左之通御元メ問合ニ付、平日之御日柄共違御法事中之事故相伺候処、療用無拋趣ニ付願書為差出候様被仰聞候

山崎庄次郎草津温泉入湯相願罷越候処、明日ニ而三廻リ相濟未睨与不仕候間、此上式廻リ相願度飛脚ヲ以申越候、然ル処西閣院様御法事御建夜ニ付、願書差出苦

ケ間敷哉

同年同月廿一日

一左之通当人問合、無拋趣且先格も有之候ニ付各申合相同候処、其通申談候様被仰聞候

木村吉右衛門、丸山御屋敷御手馬稽古是迄隔日ニ定有之処、其節之出席無之ニ付而ハ稽古場等閑之趣も相聞候ニ付、以来稽古日三八ニ相定、当番たり共出席仕苦

ケ間敷哉^(四)宜合

同年同月廿四日

一出火之節御馬方火元見者何れ差出シ、御足輕火元見并中途見共御人支之砌故相止メ、乍去方角ニ而見計差出可申哉与寛政八年九月伺濟候、然ル処方角ニ寄御位牌除又ハ御近親様江御見廻等、毎度及遅刻候儀も有之旁ニ付、以来左之通方角出火者遠近之無差別、是非中途見差出具候様御用人弥一左衛門被申聞候間、平助殿江申達置、御者頭江も心得申談、十人目付江も与得申談候

但、御上屋敷ニ限候事

御曲輪内外 浅草辺 本所辺 下谷辺

谷中辺 小石川辺^(カ) 芝辺 青山辺

享和元年七月廿五日

一左之通帳改伺出候処、先格も無之候得共無拋趣ニ相聞候間、此度限各申合之上其通与申談候

青沼右吉今明日見習御番入之処、甚無覺束奉存候ニ付、何卒先格無御座候得共三日見習、来廿八日方番入仕度伺

同年八月五日

一左之通御供番頭方問合、先格も有之旁各申合、忌明当朝可取納候間、其段被心得候様及挨拶候

小林金次郎病氣ニ而引込、当六月四日ニ而及廿日、神文差延之儀及御達置候処、同月廿二日父十歳病死ニ付引続忌引ニ相成、来十三日忌明尔御座候、依而是迄差延置候神文之儀、出勤も仕候ハ、如何心得可申哉

但 当時殿様御引込中御出も無之事故、忌明当朝取納、御

出勤中ニ候得者御出之有無ニ無拘、未明之代合故帰番

一之上可取納事、忌明当朝御日柄ニ候得者是亦同断之事
同年同月廿日

一馬屋原玄益悴周山、医術修行之為相願召連罷出候ニ付、
何卒御目見相願度問合有之、各申合例も不見当候間相同
候処、去十一月其節日記之通無用与被仰渡候、其後尚亦
御役方申合候処先例も無之候得共、芸術ニ付同様出府之
者御目見被仰付例ニ引当候得者、当人者勿論一統之励ニ
も可相成候ニ付、何卒御目見被仰付被下候者、誠ニ医術
之本意ニ達候程ニも可奉存候間、何分御役方ニ而相願候
旨、申合之上此間申達置候御聞置、今日被仰聞候者先
格も無之候得共、御役方申合之趣尤ニ被成御評議候間、
左之通御役方ニ而取計召遣候様被仰聞候間、其段当人江
申談候

悴周山儀、御目見願ケ様之先格者無之候間、馬屋原玄
益先内願為差出候様

但、内願書付別帳ニ廿二日ニ有之

享和元年八月廿四日

一左之趣各申合之上、此間御掛リ平助殿江委細申達候処、
無扱趣御承知被成候ニ付、書付ヲ以相達候様被仰聞候ニ
付、尚亦申合左之書付差出候処、御承知御移可被成旨被
仰聞候

覺

四ヶ所御屋敷御役下御役長屋、御年限中者都而手前修
復仕候様去午年四月被仰出候、然ル処小身之者共ニ御
座候得者難儀仕、且転役等仕候節持退ニ茂難仕、其俣
差置候儀ニ御座候間、何分御勘弁被成下候様其砌相願
候処、御聞濟難被成旨被仰渡候、御時節柄再応奉恐入
候得共、何卒御役宅庇とも雨漏御修復之儀者被成下候
様仕度、於御役場ニ奉願候、以上

八月

大御目付共

同年同月廿八日

一高束喜内拝借屋敷裏之方、別紙絵図面朱引之通御用ニも
無之候者拝借仕度旨問合、然ル処同人儀寛政四年三月新
屋敷拝領、引続御小納戸纏手合地面拝借、其後同八年九

月御添地相願候処拜領被仰付、再三之儀不宣候得共申合之上先見分差遣候処、一向御不用地之段申達、并御小納戸纏江及懸合候処、當時御山内入口も無之不苦旨挨拶ニ付、右之趣ヲ以相伺候処御聞添、暫過差構茂無之候者其通取計候様被仰聞候

但、願書付別紙ニ有之

享和元年九月朔日

一左之通当人問合、然ル処ケ様之類例先格等ハ無之、且去十一月被仰出も有之、縦小児たり共跡式無相違被成下候得共、当人安堵可仕事ニ候得共、悴斎左衛門存命中宗左衛門老衰、其上病身ニ而勤内願御役場迄問合候内悴病死、其後引続斎左衛門願置候養子金次郎、無拋病氣ニ付離縁、旁不仕合中々以小児盛立候氣力茂無之、併跡式無相違相成候者兎角ニ申上候筋無之候得共、御重恩之儀孫成長而已ニも不限、幾々人柄且ハ相応之御用ニ茂可相立哉与心掛候社本意ニも有之、左候得者当人長寿致し候共右生立之七話中々難行届、殊ニ御屋敷内者勿論他所ニ而も七話

仕候親類迎も無之ニ付、無拋悴斎左衛門妻子を養女ニ致し、相応之者養子ニ仕、二才之孫順養子仕、幾々可奉報御重恩者ニ生立候者此上之本望ニも可存候、依之此処何分御勘弁被成下候様各申合之上、御中座ヲ以先御役方限何レ内伺書為差出候様、其上ニて御評議可被成与被仰聞候

中川宗左衛門儀、及老年勤仕無覺束候ニ付勤奉願、悴斎左衛門如何様ニも被召仕被下置候様内伺仕候内斎左衛門病死、右悴奉願候養子金次郎儀も離縁、當時二才ニ罷成候孫老之外家内者勿論親類も無御座、追々老衰仕孫成長之取立も難届候ニ付、斎左衛門後妻養女ニ仕、相応之者養子仕、孫儀順養子ニ仕、往々御用立候様取立奉報御厚恩度奉存候、此段可相成筋ニも可有之哉、何分宜取計差図具候様

但、伺書別帳ニ有之

享和元年九月十日

一前条中川宗左衛門伺書差出置候処、今日被仰聞候者、一

体ケ様之儀者孫久藏儀早速嫡子可相願筋、勿論去十一月
厚被仰出旁決而不相成事ニ候得共、宗左衛門儀此度之始
未無拋趣、以後迎もケ様打続難儀之趣者有之間敷哉、且
御役場方申達候趣も尤ニ御評議被成候間、格段之御憐愍

ヲ以同之通御聞濟被成候間、此上御用立候者相撰養子ニ
可仕様可申談旨被仰聞候間、則申談候

同年同月十四日

一左之通御供番頭方問合、各申合候処一体病氣引込及百日
候得者勤願可差出御定法、殊ニ去五月格別之以御憐愍助
流方百日目之日取ニ而勤願被差出候様被仰出、旁以恐入
候事ニ候、乍去是方二廻リ再願も仕候得者出勤も可相成
趣ニ付、是迄類例も有之、其上実々無拋趣相聞候間苦ケ
間敷哉与平助殿江相伺候処、病症無拋趣ニ付而者御聞濟
も可被成候間、仮形出勤茂相成候者再願差出候様可取計
旨被仰聞候

青木勘之丞疾瘡ニ而引込罷在、先達而藥湯三廻リ相願、
来十六日ニ而三廻リ相濟、段々快方御座候得共未暇与

不仕候ニ付、此上ニ廻リ罷越候者出勤も可相成候得共、
来廿四日ニ而助流より日数及百日候間、二廻リ再願差
出候而も苦ケ間敷哉宜差函具候様

享和元年九月十六日

一松田良右衛門屋敷内願先達而当人問合、相對替ニ候者格
別差向屋敷地面無之候ニ付、被見合候様申談候処、只官^(管)
内願無拋趣ニ相聞候間各申合、其砌御年寄中江御内々相
伺候処、御評議之上御役方申合之通、屋敷地面無之候得
共実々無拋趣ニ候得者内願為差出候様、地面之儀者御評
議可被成旨平助殿被仰聞候

但、願書付別帳ニ有之

一同廿四日、前条地面御山内御納戸纏持之處、拝領被
仰付候

同年同月十八日

一馬屋原玄益悴、御目見内願之趣者不被及御沙汰候、乍去
玄益儀当春中方御子様方へ御藥茂差上、御惣客様御目見
も仕候ニ付、格段ヲ以同人帰郷之御目見之節、其席江周

山召連差出置御目見被仰付候旨

一前条ニ付周山儀、御目見被仰付候而申ニ茂無之候得共、

初而御目通江罷出候事故、服之儀如何相心得可申哉与軍

記殿江相同候処、初而御目通仕候事故十德着用為致候様

被仰聞候

但、玄益儀着服之儀者、差向御医師帰郷之御目見服之

儀不見当候得共、惣体帰郷之御目見ハ平服之事故右ニ

准シ、平服之儀ハ勿論之事与相心得候旨軍記殿へ申上

候処、其通与被仰聞候

同年十月廿八日

一喜齋頭瘡ニ而薬湯願書差出候、是迄薬湯願書ニ者都而月

代仕、何処薬湯江与有之候へ共、全頭瘡之場難儀之趣御

附御小性頭八郎方問合ニ付、先格無之候得共療用無扱趣、

幸団次殿大手見廻リ詰合ニ付御相談一卜通伺之上為差出

候事、依而月代仕候与申文言無之事

同年同月十四日

一左之通御供番頭方問合、先格も有之申合之上、支配頭方

御用向之節者部屋目付方案内被致、且当人方之御用之節

隣家方為申届候様、其節而御役下立合可差出旨及挨拶、

御年寄中江申達置候

三木田今助、一己慎御用向相勤候様被仰聞候処、親又

平押込被仰付置、同居之事ニ付、御用ニ付呼出候節并

当人方罷出候節、出入立合之儀如何相心得可申哉差函

具候様

一前条今助儀、原掛下役兼候者故慎中心得ニ不及候段、掛

之場ニ而御役下江申談候

但、差懸リ御成ニ而原出役有之節ハ、御人少之事故兩

御役下立合出入被致、原御成為相勤候様御役下へ申談

候

享和元年十一月七日

一左之通当人問合、寛政九年六月三日、長病之者悴御奉公

内願并御目見願不苦旨伺相济居候得共、ケ様之例者不見

当、乍然右伺済准シ病体無扱儀ニ相聞候間、苦ケ間敷哉

与申合之上相同候処、御役方申合之通無扱儀随分不苦候

間、定例通取計遣候様

高木和十郎悴金次郎儀、当年拾五才ニ罷成候ニ付袖留

差遣度奉存候、然ル処病氣引込中当時快氣之程も難計

候間、袖留差遣苦ケ間敷哉

同年同月九日

一左之通同役河合八郎右衛門ヲ以內々間合有之候処、寛政

四年九月・同八年七月・同十年十二月、楯岡半内・海塩

再蔵・渡辺仙庵例も有之、各申合今日勝手次第与八郎右

衛門江申談、平助殿江申達置候

松田良右衛門病氣引込中ニ者候得共、先達而奉願候養

子醇ニ、為看病引取申度苦ケ間敷哉

享和元年十一月十四日

一明十五日、於達様御鉄漿初御祝儀并式日之御祝儀有之候

ニ付、式日之御祝儀平服ニ而申上相濟麻上下着用可仕哉

与先格も有之、軍記殿江相伺候処其通与被仰聞候間、定

居当番之御勝手役江申談候、尤御年寄中ニ者麻上下ニ而

御出席、式日御祝儀被仰上引続御鉄漿御祝儀被仰上候、

御用人御勝手役ニ者右之通相心得候様御同人被仰聞候間、

御小性頭江も相咄候

享和元年十一月廿六日

一三町御人数被罷出候御留守居剛八、罷帰左之通申聞候、

近例増御人数被差出候儀も候得共、一体御人数高等兼而

御定も有之、殊ニ大手御勤中旁以及其儀間敷哉ニ候得共、

御留守居之場并御元_ノ兼役ニ而海塩庄兵衛江申合候処、

其通往々例ニも相成候間難差出、乍去無扱趣ニ付此度限

増人与申名目ニ而、御手木之者并御中間少々差出可申旨

被申聞候

三町御人数出場限、稲葉丹後守様前迄罷出出候処、火

事場廻り之御方様御差_ノ而御人数振分ケ、所之火之

手江御掛被成候ニ付、此上増御人数差出申度旨

一前条之趣一卜通御小性ヲ以申上、治左衛門殿江も申達候

同年同月廿九日

一丸山御屋敷御馬方御用持日不相分、火元見等之節差支、

同所御役下難儀致候趣申達候ニ付申合、以来日々御用持

名面申達置候様可罷申談旨御元々江申談候処、何卒以後
者御厩小頭江申談呉候様、左候者御用持之御馬方江御馬
為率遣候旨被申聞候ニ付、差支無之様能々被申談置候様
及挨拶候間、其段同所御役下江申談候

同年十二月四日

一萩原浜右衛門、名慶助与相改度願書差出候処、寛政八年
二月御触達有之、御家中触も有之通

大納言様御名乗与御同字、乍去無用与申儀被仰出も無
之候得共、銘々心得可有之、御役方ハ如何存候哉平助
殿御尋、拙者儀一覽致候処一向心附不申候、御尤ニ奉
存候、御在所ニハ横井慶蔵杯其俣罷在、江戸表ニ而田
中貞三杯者其砌改名仕候、何レニも遠慮いたし可然も
のと申述候処、左候者願書差戻候様被仰聞御渡被成候
間、御供番頭泰蔵相招委細申談願書差戻候事、以後見
当ニ認候

享和元十二月五日

一左之通御小性頭方問合ニ付軍記殿江相伺候処、左之通御

差図、其段及挨拶候

但、昨年故障之筋不申達甚不束之儀、以後之押移ニも
相成不宜候得共、改而御尋有之候者、当人者勿論支配
頭之場も一ト通ニ而者不相濟、返々奉恐入候儀ニ付、
委細御役場方御内達之上本文之趣問合有之

御小性頭方問合

去二日、飯嶋新吾悴亀吉当年拾六歳ニ而袖留達之儀、
去十一月被仰出も有之、旁其以前故障之趣可及御達之
処、其節不心得差付及御達候段、当人者勿論於御役場
も心附不行届奉恐入、依而差扣伺差出可申哉問合

御差図

飯嶋新吾悴袖留達不念之儀、従上急度可被為御沙汰、
御宥免ヲ以先此度者其俣被差置候、依而伺等差出ニ不
及、以来当人者勿論支配頭之場ニ而も急度心付候様

同年同月十六日

一入牢・吟味等除日之儀、爰許ニ而被仰出も無之、寛政三
年二月御在城中左之通被仰出候間、爰元ニ而も以来御書

付之通相心得可申哉与平助殿江相同候処、其通相心得候様被仰聞候

毎月御精進日之節吟味心得之覺

八日 十日 十二日 十七日 廿日 廿七日

右之御日柄之儀も一卜通之吟味不苦候得とも、入牢・手鎖・繩懸ケ之儀者決而無用之事

但、右之外之御日柄も入牢者決而無用、手鎖・繩懸ケ之儀も先者無用ニ候、吟味之筋ニ寄無拋繩懸ケ・手鎖申付度節者、右吟味懸リ之御年寄江伺之上可取計事

一御祝儀日或者御法事等之節者吟味筋相除可申事

亥

正月

町奉行

郡奉行

江

大目付

享和元年十二月廿一日

一森戸兵橋妹、御鳥見磯田弥三郎与申者方江養女ニ差遣申度伺差出候処、即日勝手次第与願書差出候様

但、此伺濟御定法之日合も可有処、無拋詛合ヲ以年内

願書差出度内談有之候間、申合之上取計遣候事

同年同月廿三日

一左之通当人問合、無拋筋ニ相聞候間今日相伺候処、無拋儀少々も快相成候迄其通与被仰聞候間、則当人御取次へ申談候

管谷^(管)弥兵衛同役兩人引込ニ付御番詰切ニ相成候処、此間中方痔疾差発致難儀候ニ付、夜分時半廻リ之儀立場代、右詰切中計被仰付被下置候様問合

同年同月廿四日

一左之趣吟味役相願候処、御役場方急度相願候儀も恐入、何分御役方勘弁宜取計呉候様御元々方頼、是迄ケ様之例不見当、譬落命候共其俣差置可申者ニ候得共、病症無拋趣ニ相聞候間申合之上先両御役下見分差遣候処、病体相違も無之趣此節殊之外相勝不申旨申達候ニ付、尚又申合今朝持出少々も快方迄御宥免可被成下哉与相伺候処御聞置、暫過申達候通相違も無之候ハ、快方迄差免置、勿論番人等急度附置候様可申談旨被仰聞候間、御元々江申談

兩御役下罷越、手鎖免遣候様申談候

御中間長次郎病氣以外不相勝、其上此節以前肩打身有之候処是又差発痛強難儀仕候ニ付、奉恐入候得共何卒少々も快方まで手鎖御免被成下度旨

享和元年十二月廿六日

一 去廿八日^(三)戻し候趣ニ而尚亦問合候処、引続之事故無抛趣ニ相聞候間平助殿江申達相伺候処、難儀之趣尤ニ候者其通取計候様被仰聞候間、当人立場代之者江申談候

菅谷弥兵衛兩人引込故詰切、且痔疾ニ而爰元夜分時半廻り儀御宥免被仰付置候処、悌助出勤ニ付以前之通可被仰付候得共、未半助引込ニ而続番勝ニ相成且痔疾も同篇ニ而難儀仕候間、当御当番中計続番之節者、夜分之處一夜ツ、立場代江火用廻り被仰付被下候様仕度問合

同年同月廿八日

一 左之通御元々問合有之候処、部屋住無足之もの差上ニ不及旨天明七年十二月同済、吉村玄碩次男村上養碩御宛介

被下置候寛政五年十二月相伺候処、是又差上不及旨被仰渡候、右養碩ニ准し道順儀も差上及間敷哉、勿論養碩儀も無足申合之上平助殿江相伺候処、其通り差上ニ不及段被仰聞候

表御医師並ニ屠蘇

御元々支配無足

差上可申哉

村士道順

享和二年正月八日

一 阿部登弥太藥湯願書差出候処、正月十一日前都而願書等之儀見合候事ニ候得共、去申年正月飯田平蔵例も有之、病症無抛趣ニも相聞候間、伺之上為差出候事

同月十一日

一 左之通当人問合、御祝儀ニ付出組被居候ニ付申合候処、近例去年正月十一日、辻栄治御広間御給人方御使番被仰付候節、元日御札残居候ニ付矢張青銅百疋之目錄ヲ以御礼申上候、勿論席之儀者頭役打込御小書院ニ而申上候、譬何御役儀被仰付候共、元日ニ可申上御礼ニ候得者格式之無差別、郷助儀於御小書院火繩ヲ以申上候様、一卜通

平助殿江申達左之通及挨拶候、勿論之事ニ候得共見当ニ認候

御広間番無足方高山郷助、当元日大手当番ニ付御年頭相残居今日御使番被仰付候ニ付、太刀折懸ヲ以御礼可

申上哉、又者元日残之事故火繩ヲ以御礼可申上哉問合
享和二壬戌年正月十四日

一左之通縁者平野文之進方問合、御定法之年齡有之候得共、
実子病死後再養子迄致候処不熟ニ付離縁、去寅年六月石
田角蔵末期ニ至養子不相成候例も有之候処、源四郎儀者
一代切之者尔も無之当人給人ニ御取立被成候得共、徳輪
院様御代方被召仕勤切、且養子取組願濟居候事故末期判
元改ニ及間敷哉、是迄ケ様之例不見当、御役方限ニも難
及挨拶候間、何分ニも御憐愍之儀治左衛門殿江御中座ヲ
以相伺候処御聞置、暫過被仰聞候者、御評儀被成候処御
役方申達候通、石田角蔵同様ニ者無之、養子取組伺も濟
候間末期判元等ニ不為、御日柄ニ候得共無拋儀勝手次第、
願書差出候様被仰聞候

高橋源四郎此間中方持病之疝積(癰)差発、其上余寒ニ相障
以之外相勝不申、迺も本復之程難計奉存候、養子取組
伺濟候得共、此上願書差出候儀如何可有御座候哉問合
享和二壬戌年正月十八日

一左之通当人寸志問合、御意書ヲ以遠慮方伺之通遠慮迄伯
父甥之続伺等ニ不及旨、寛政五年二月被仰出候得共、御
役方之事御役方切難及挨拶相伺候処、伺等ニ不及旨被仰
聞候

斎藤貞兵衛実方甥手嶋清次郎儀、御意書遠慮被仰付、
忌掛り者無御座其上被仰出茂御座候得共、御役方之儀
実々伺等差出可申哉之旨

同月廿日

一左之趣内々御番頭方問合候処、後日之差支ニ相成候事茂
無之候間苦ケ間敷候へ共、御役方切難及挨拶一卜通伺之
上其通取計候様申談候

斎木定右衛門(カ)寝番・佐久間藤八御広間加番繰替被仰付
候ニ付、代之者呼出相引明日方御番入可被致候処、今

日兩人共当番ニ付直ニ繰替御番入被致苦ケ間敷哉問合
同月廿一日

一三丁御人数之内龍吐水為御持被成候儀、寛政四年二月從
公儀被仰出、其砌上下御屋敷并石原御屋敷共及御達候処、
御留守居庄兵衛申聞候者、先当時上下御屋敷計ニ而石原
御屋敷者追々被仰付可然旨被申聞候ニ付、其通及御達置
候処、石原御近辺御小家之御方様ニ而も当時追々為御持
被成候趣ニ付、尚亦此度申合も有之候者相廻度旨御元
江及懸合候処、御余計有之候旨被申聞候ニ付今日申達候
処、左候者御元江申合早々相廻候様被仰聞候ニ付、其段
御元江申談御留守居江も相咄置候

但、以來引替物帳ニ而申達候間、其段被相心得候様御
元江申談候

同年二月十一日

一左之趣去酉年六月服部九十郎方問合、丸山組共違一季切
之者故不宣趣致挨拶候、其後又々申合候処、御家中若党
小役人方江内縁有之養子罷越候例ニ引競候得者、壹季切

拘之処者同様之事、返而又者ニ無之間内縁も有之候者隨
分苦ケ間敷、乍去例も無之候間相伺候処、御役方申合之
通不苦旨被仰聞候間、右之趣九十郎へ及挨拶候

小役人之方江江戸組御足輕共之内方養子取組之儀、可
相成儀ニ候哉問合

享和二年二月十九日

一御意書申渡、例之通封印状ヲ以御用番中江相廻可申候、
藤右衛門殿大手見廻り、貞兵衛殿御用番ニ候処、手嶋清
次郎儀當時忌掛リニ者無之候得共、実方甥之続御用召御
礼等之節、父子之外者召連不苦旨去申年正月伺濟候得共、
御意書申渡候者右召連共違、譬御免たり共如何敷、勿論
近例古例等も差向不見当、今日御内代ニ付藤右衛門殿引
取手間取候得共、過番之上申渡苦ケ間敷哉与右之ヲ以相
伺候処、被仰合之上伯父甥之続ニ而申渡候儀不宣候間、
伺之通取計候様

但、蔀殿ニ者見合中故右之通取計候事

同年三月十日

一 御家中并組方迄隠居厄介男女八拾歳之者御吟ニ付、左之
年齢書御附御小性頭方被差出候、然ル処右年齢御吟全隠
居厄介ニも不可限、勤仕之者ニ而も尚亦御賞美被下候而
可然、既ニ左之者者去月迄相勤候処、八拾歳之砌御吟落
ニも候哉何之御沙汰も無之、先年高橋和十郎寛政二年七
月五拾年勤、其上年来ニも相成候ニ付御褒美被成下、同
五年四月願之通隠居被仰付候其節八拾歳ニ罷成、年来相
勤候ニ付御紋附・御小袖被成下候、同年同月八拾歳之者
御吟ニ付、右和右衛門年齢書可差出哉与相伺候処、隠居
之節御褒美被成下候ニ付書出ニ不及旨被仰渡候、翌年同
断御吟之節尚亦相伺候処、先ッ差出候様被仰聞候間則差
出候処、御受取切ニ而御賞美之御沙汰無之、左之者去月
御宛介差上御奉公御免願之通被仰付候節、格式并勤仕之
年来も無之故歟御賞美御沙汰無之、ケ様之先例不見当、
何レ勤仕之内御賞美御座候而可然哉之趣今日軍記殿江相
伺候処、勤仕之者者七拾才之節御賞美有之候故、其余年
来ニ而者勤仕之内御賞美無之事与心得候様、尤御在所ニ

而大野茂助抔者格別長寿ニ付其節之御賞美有之候得共、
是者別段之事ニ心得候様被仰聞候

但、勤仕之者者吟之儀被仰渡無之、御密書役ニ而吟候
事

寛政二年七月年来ニも

弁右衛門養父

罷成候ニ付、金百疋被成下候

御園生喜左衛門

当戌八十三才

享和二年三月十四日

一 左之通内々問合候処去卯年被仰出も有之、不成容易儀ニ
付可差戻候処御役方限難及挨拶、先内々相伺候而可然与
各申合、今日平助殿江御中座ニ而相伺候処、御聞置候旨
被仰聞候

山口平馬悴、出生之砌方癩癩之症ニ而時々差発、療仕
候共一体之病症生涯難治之由医師共申聞候、左候得者
成長ニ而も御奉公可為相勤体ニ無御座候、依之先達而
被仰出も御座候ニ付、奉恐入候得共右之仕合故虚弱御
達之儀内々問合御座候、御役方申合候処病症往々御用
立無御座候得共、右問合之通去ル卯年被仰出候御趣意

も御座候間、不成容易儀殊ニ去十二月出生仕療用等不
 届之分ヲも紛敷、其上平馬儀老年ニも無御座、旁以与
 得療治差加へ頃立候迄見届、弥生涯弥難治病ニ而其砌
 無是非以及御達候者、御法を相守場ニ相当銘々本意ニ
 歟奉存候、夫彼ヲ以先當時者見合置候様差留可然筋ニ
 申合候得共、御役方切ニも難及挨拶、何分御内々相同
 御差回数次第仕度、譬虚弱御達別段を以御聴届被成下候
 得共、容易ニ御聴届被成候筋ニ者不奉存候、右体当才
 之内虚弱御達之儀共候哉、本腹妾腹之続ニ而万一不心
 得之儀共候哉、押移も難計哉ニ奉存候、是等之儀者其
 節風聞等御吟も可有御座儀与奉存候、実々虚弱ニ相違
 無御座難治病ニ候共、幾重ニも御吟重リ及御達候者、
 先御聴置御医師共之内被差遣睨与御糾之上、是以医案
 同様之趣ニ候共右達之儀者御聴届、何才位ニ罷成尚亦
 申達置候様被仰渡候者、却而御憐愍之儀ニ相当候儀も
 可有御座哉ニ奉存候、此段先奉伺候、以上

三月

大御目付共

享和二年三月十八日

一都而神文相願候儀、本役者勿論仮役加番等ニ而も勤先役
 支配方申達候、然ル処左之勤場者本役加番共人支配か、
 尚亦寛政六年十月伺相濟候本役人支配者御元々、扱外支
 配之者加番ニ罷出候節、勤先江不抱人支配方神文及御達
 候儀如何敷候間、本役者勿論加番等ニ而も役支配之心得
 ニ而矢張御元々方申達候、然而兼而申合置幸今日三好安
 藏神文右之趣委細軍記殿江申達候処、今日御壺人ニ者候
 得共御役方申達候趣尤ニ候間、以来其通り加番ニ而も神
 文願御元々取計候様被仰聞候間、其段御元々へ相咄置、
 神文掛り御役下江も申談候

寛政六年十月伺濟

一御年寄物書

一御用人物書

一御留守居物書

右者本役加番共人支配ニ而取計候事

一前条勤先江掛り、差扣同等是又加番ニ而も御元々取計候
 事

同月廿三日

一左之通当人問合ニ付、申合之上勝手次第与申談候事

五節句御祝儀可罷出処、彼

小川町御附

方様ニ而も御祝儀有之由也

赤尾孫七

不罷出候間、宜断ニ仕度旨

享和二年三月廿六日

一上方様御法事、年々御家中参詣触有之候程之儀者銘々承知仕居候得共、輕御法事御回向者御触出シ無之候、御家中為年々其年之分御諸々御触出有之候者、銘々祝儀事等之節心得ニも可相成哉申合之上、此間平助殿江相伺置候処今日被仰聞候者、御役方申合之通夫々心得申談置可然、併御席方被仰渡候趣ニ無之御役方限年々心得ニ申談置可然、依而当年之分則御年回書付ニいたし、御役下ヲ以夫々江心得申談候

但、当年者右之通取計置、来年方ハ御役名触ニ而触出

シ可申旨申合置候事

同年四月三日

一左之通相願度旨、先達而御当人方被問合候間申合候間申

合候処、嫡子願書者都而親方相願、部屋住ニ而屋敷拝領

与申儀先格不見当、乍去当時三間之御長屋住居御用之御

差支ニも可相成、差向外ニ御長屋無之、其上与一兵衛方

兼々内願之趣も相聞候ニ付、此間御中座ニ而相伺候処被

仰聞候者、成程部屋住ニ而屋敷拝領之例も有之間敷、且

同苗与一兵衛儀外上方様御附相勤居候間、同人方相願候

筋も有之間敷候得共、御役方申合之通御長屋手狭ニ而万

一御用之御差支ニも相成候者相成間敷、左候者此度之儀

格段無拋儀ニ付、先内願書差出候様被仰聞候間、則御当

人江申談候処左之内願書付被差出候間、各一読之上今日

平助殿江差出候処、御受取置候旨御答ニ候

此度当御役被仰付候処、

大御目付被仰付候ニ付

御長屋手狭ニ付御用之

藤田 蒨

御差支ニ茂可相成難儀仕

候ニ付、何卒屋敷地面拝領仕度内願

享和二年四月七日

一前条地面拝領仕度内願被仰付候処、地面拝領之事故拝借
金等相願候者、親与一兵衛方願書差出候様平助殿被仰聞
候

同月十三日

一天源右衛門手足不相叶去三日方引込、日数無之候得共葉
湯江罷越申度、何卒御聽届可被成下哉御年寄中江相伺候
処、無抛趣ニ付勝手次第相願候様被仰聞候間、御用人弥

一左衛門江申聞候

同月十五日

一戌刻過御元々半五郎入来、村土道順実母武州葛飾幸手村
ニ罷在候処、此節九死一生相煩候ニ付罷越存生之内対面
仕度、願書今日式日ニ者候得者差出度旨問合相考候処、
式日之処者最早夜陰ニも相成候間苦ケ間敷候得共、夜中
願書差出候例差向不見当、乍去実々無抛筋差留候も如何
ニ付、夫彼治左衛門殿江相伺候処、成程無余儀事ニ候間
為差出候様、尤以後之形ニ者不相成候旨被仰聞候ニ付、
其段半五郎へ申談候

同月廿三日

一左之趣内々問合、去月十四日御役方限相伺其節御聞置、
今日平助殿被仰聞候者、出生間も無之、平馬儀も老年与
申儀ニも無之、御役方申達候趣意尤ニ思召候、依而急々
御評決難被成候間、左之通相心得候様被仰聞候

山口平馬悴病症難治虚弱御達之儀ニ付、被仰出も有之
内々問合

同月廿一日

一上下御屋敷御役下一統申合、左之通書付差出候処申合候
処、往古者定札与申銘々札相渡置候処、段々人数も相増
候間後年ニ至吟等も行届間敷、依而近来久々実体ニ御出
入仕候者者定札並与為相唱、夜中御門刻限前迄も出入為
致候処、是以際限も無之竟ニ者猥ニ可相成間、書付之趣
至極尤之筋ニ付、其通以来取計候様御役下へ申談候

覚

定札並ニ而御出入町人共、人高是迄幾人と申御定無之、
畢竟数年来御出入致候上定札並之儀願出候得者、其者

人柄ニ寄差許来候得共、左候而者後年ニ至際限も無之、殊ニ心得も薄く相成終ニ者、籠略ニ相成候間、今度左之通奉伺候

定札並町人、上下御屋敷ニ而以来共人高ニ相定置其、余者不相成候、尤右高之内之者病死或者商内替等致、悴又者外人江讓度旨相願候者、其代リ人柄ニ寄為讓渡可申候、跡讓渡もの無之節者跡明キ置可申候

但、右人高之外数年御出入致、何角之御用ニ相立人柄宜無拋者有之候者、其者一代限り定札並申付、勿論悴たり共跡讓リ渡候者無之跡明キ有之候者、其内江相加へ可申候、以上

四月

但、上下御屋敷ニ而當時式拾人御座候

享和二年四月十七日

一左之通当人問合有之、病氣引込中ニ者候得共少々快方之由、養方祖母之儀重キ事故申合之上承濟候旨

山口平馬積氣^(續)ニ而引込罷在候処少々快方、月代致祖母

葬送之節供ニ立不苦哉問合

同月廿一日

一左之通同役ヲ以奥詰之場ニ而御小性頭ヲ以相伺候処、御元々重之事故右御役場当番者相勤不苦候段被仰出候間、承知呉候様被申届候

御目通差扣被仰付

候得共、一役場相勤候へ者

御元々ニ而奥詰

頼合等不致先格相勤候得共、

滝 半五郎

奥詰之儀も御座候ニ付当番如何可仕哉

同月廿八日

一長坂東助父儀兵衛、持病之痔疾ニ而箱根湿泉江入湯仕度旨先達而奉願上候処、其砌より病氣ニ付追而出立為仕度御小性頭方問合候所先例不見当、勤仕候者ニ候者又々追而相願候歟、隠居之儀ニ付苦ケ間敷各申合之上平助殿江相伺候処、其通与被仰聞候ニ付、御役方方一卜通及御達候事

但、届書別帳ニ有之

享和二年五月二日

一左之通問合、爰元引移別段御達ニ者及間敷、御役方切承
濟勝手次第申談可然申合候得共、右様之例不見当候ニ付
相伺候処、御役方存寄之通別段達ニ不及旨被仰聞候間、
其段及挨拶候

悴龜太郎儀、御目見

相濟出仕等之御届相濟

神谷長治

居候得共、爰元ニ而者別段月次出仕之御達入可申哉、
又者其俣御届無之御帳為附可申哉問合

同月三日

一左之通御徒士組頭立場代問合候所、親或は兄差扣中勤仕
ニ付而之出入者先格御役方承濟、殊ニ寛政十二年三月廿
八日弥賀近例も有之ニ付、当番之節立合ニ不及猥無之出
入勝手次第与申談候

兄与一郎差扣被仰付候処、

私当番之節御徒目付

青山三十郎

立合之儀及御達可申哉問合

享和二年五月八日

一去四日伺濟候御ヶ条之内養女之儀、諸向為承知触申度
左之通談文ヲ以相伺候処、其通談置候様被仰聞候間、
寄々申談候

御家中之面々実子無之者、養女致置往々賀養子相願候
存意之者此迄者其通被仰付候得共、以来右体之養女願
無用ニ候、乍併血脈之女子年頃ニ相成外ニ血脈之男子
無之、右女子を養女ニ相願賀養子致度候者、大目付ヲ
以內伺之上可任差凶事

但、嫡子病死後嫁を養女ニ相願、并無拋諷ニ方養女
致外方嫁させ候類者、是迄之通可心得事

右之趣被仰出候間、寄々申談候様御年寄中被仰渡候

五月

享和二年五月十三日

一左之通十人目付申達候所実々無拋趣相聞、其上外ニ勤之
事御普請小奉行杯足袋相用候へ者欠乏等も相成候趣ニ付、
御殿内并御先弘等之節者足袋不相成、其外者相用候様承

濟、其段申渡候

但、以後之形ニ者不相成候事

足痛所御座候間難儀

仕、何卒少々快方迄足

袋相同申度願

十人目付

田嶋吉藏

同月廿四日

一左之通御者頭悌助問合、忌引中破損所修復之儀者、御役

下見分之上実々難捨置候得者修復為致候近例有之、左之

修復共違其品堀^(掘)出候迄之事無抛儀ニ相聞、承濟遣候跡修

復等之儀者不相成旨申談候

菅谷弥兵衛忌引中ニ者罷在候処、此節之霖雨ニ而穴藏

具へ候処入置候物有之、物静ニ為堀^(掘)出度候旨

同月廿五日

一左之趣問合有之候処、江戸表ニ而者芸術御覽之節師範之

者業入御覽候例無之候ニ付、如何挨拶ニ可及哉与相伺候

処、於御在所師範之者も罷出遣イ来候ニ付、爰許ニ而不

相成候段申渡候者御在所之差支ニも可相成候間、矢張勝

手次第罷出入御覽候様被仰聞候間、其段及挨拶候

三浦音人此度劍術世話取被仰付候処、明日門弟之面々

劍術御覽被遊候ニ付、其節私儀も御覽ニ罷出候旨伺

享和二年六月五日

一左之内願之趣先達而表御医師方問合有之、病氣ニ付一卜

通御暇願書本願書ヲ以相願候得共ケ様之旧例近例不見当、

依而申合之上内願書ニ而差出可然哉此間相伺候処、其通

取計候様被仰聞候間、委細申談候処則為差出候間今日差

出候

結構被召仕難有仕合

奉存候、然ル処及老年

多病罷成勤仕無覺束、重々奉恐入候得共御宛介奉差上

度、何卒以御憐愍是迄之通御家来ニ而被差置被下置候

様内願

但、公儀御陰中ニ候得共儀も有之候間差出候事

同月十四日

一一代給人之悴小兒ニ而跡式被仰付候節、拾七才ニ罷成候

節及御達候様同濟

但、此ヶ条願之部ニ有之

同年七月五日

一 藤坂道恕先達而内願之趣ニ付、御宛介御預被置尤出仕等

ニ不及旨被仰渡候ニ付、以来全表御医師之場江附候者ニ

も有御座間敷、御元々持ニ仰付可然哉、例も無之候間此

間申達候処、御評議之上矢張表御医師之場ニ被差置候間、

是迄之通心得候様被仰聞候間、表御医師江一卜通申談候

同月十五日

一 左之通奥御醫師方問合、盆中之儀者寛政十一年七月十三

日伺之上差出候例有之候得共、先平助殿江相伺候処、療

用与者乍申盆中与申候而も今日限り且者御礼無之共式日

之事、旁以今日者見合纒之一日之事故明日為差出候様御

差図ニ付、其段申談候

吉村玄碩血症ニ而引込、少々快方ニ者候得共耽与不仕

逆上強候間、月代薬湯願書今日差出候而も苦ヶ間敷哉

享和二年八月二日

一 左之通御番頭方問合、縁談先柄之儀ニ付寛政八年被仰付

候有之、同心杯江之縁組不宜候得共母之里方続合も有之、

且娘等縁談共違ひ母再縁之儀苦ヶ間敷実々無拋趣相聞、

申合之上今日平助殿江御中座ヲ以相伺候処、御聞置被成

候旨

中村新太郎母方之伯父土岐宗意与申者從弟、水野長左

衛門様御組同心遠山常五郎与申者江、母年若ニ付再縁

談親類共申聞候、母儀も任其意度旨申聞候、且亦私儀

も成長迄罷越申度、縁談先柄之儀被仰出も御座候ニ付

先内々問合

但、同月廿一日無拋趣ニ付勝手次第伺書差出候様

同月三日

一 左之通被申届候処上下格添役是迄無之、当前之御長柄之

者御貸可被成哉、御留主居之場江被差出候事故矢張御足

輕ニ而可然哉、既ニ御者頭御役方立場代下座格以下方被

差出候節、供人其俣振向被差遣候儀も有之、夫彼ヲ以例

も無之事故申達候処、御留主居之場江被差出候共御者頭

御役方立場代共違、御足輕供不相成御長柄も在番少々事
故、作若党御貸被成候間、御移を以御元々当人江も申談
候様平助殿被仰聞候間則申談候

上下御屋敷ニ而供若党

上下格

御留主居添役

兩人ツ、拝借仕度旨

海塩七藏

同四日

一前条作若党拝借可被仰付旨被仰渡候処、於供先御奉書并
其外共為持候事も有之ニ付、作若党ニ而者甚不安心ニも
御座候間、在番御長柄之者御貸被下候様御留主居剛八被
申届候処、平御使者共違御場所柄ニ而不行届儀も有之候
而ハ御外聞ニも相拘候事、旁以無拋趣相聞候間申合治左
衛門殿江申達候処、可被仰合旨御答候

享和二年八月六日

一前条被仰合候所、平御使者共違無拋趣ニ付左之通御貸被
成候間、申談候様治左衛門殿被仰聞候間、御元々御留主

居江申談候

一供若党御長柄之者

一人ツ、御貸被成候旨

海塩七藏

但、丸山近所出火ニ而三丁ニ罷出候節、爰元々御長
柄之者相廻候而者間ニ合不申候間、其節ハ作若党兩
人差出候様御元々喜内被申聞候間、其段剛八へ相咄
候

同月廿一日

一左之通御元々御徒士頭方問合、寛政八年二月小嶋俊藏続
合有之再縁談之儀伺相濟候例有之、左之者儀者続合者無
之候得共、何レニも御家人之分者苦ケ間敷哉与右俊藏伺
濟之節、相伺候趣も有之ニ付各申合之上今日相伺候処、
御聞置被成候旨

石崎弥八娘、原田只藏方江縁談申合度候、然ル処先達
而御用長屋相勤罷在候ニ付、願書差出候而も苦ケ間敷
哉

前条同断趣原田只藏問合

同月廿五日

一前条御役方申合之通勝手次第、願書差出候様平助殿被仰

聞候

同廿八日

一吉田宇左衛門侍座出座ニ而在番中出情相勤候ニ付、御時節柄ニ者候得共為御褒美金貳百疋被成下候

一前条御通掛之者在番之節、御褒美侍座出座ニ而被下候例不見当、当四月朔日鈴木文藏五拾年来勤、御褒美侍座出座ニ而被下候得共、御通掛御雇之者二季御褒美侍座無之ニ付相伺候処、都而表向御褒美御通掛之者江も侍座出座ニ而以來被成下候旨、此度御改被成候段、治左衛門殿被仰聞候

享和二年九月朔日

一左之通宜申合具候様先達而御元ハ方問合、才十郎儀其節及危急候程之趣ニ相聞、御定法も有之無用与申談、何れ不宜候間可差戻之処、只官勘弁之上取計具候様被申聞候書ニ付、各申合之趣無拋左之趣并御元ハ方指越候例書添、先頃平助殿江御中座ヲ以相伺候処、今日御同人被仰聞候者、御役方申合候通御法ニ抱不宜例も有之候得共、当時

御取用ニ難相成候間無用ニ致候様被仰聞候間、其段及捺

搦候

松倉才次事

小倉才次

右者小倉才十郎病氣頼合之内、兼而致契約候子分相談相聞候ニ付願書差出候其節木戸小助受取之御役方江及相談候処、病氣ニ付致無用追而差出可申旨被申聞候得共、引込ニ無之当病ニ而兩三日頼合居候ニ付、是非与申候処何分御役方不承知ニ付、任其意彼是致候内才十郎致病死候得共、一旦支配頭取納候願書致破談候様ニ者難申渡、御役方之意者其通ニ立置其段及御内達候而、才次儀小倉与相改度段奉願當時小倉与相名乗候、全体親子之契約取結候上願書差出候事ニ候得共、當時才十郎後家儀者養母ニ当り候、畢竟給人ニ無之故願書取納候而も服忌受候様ニ者申渡無之、場ニ而無足人以下之差別者相立居矢張親子ニ相違者無之、既ニ親子ニ取結候訳ヲ以内縁も有之候ニ付、後家儀引取厄介仕度旨奉願候、表向者親子ニ不相立

候故後家儀御扶持方致頂戴候段、一旦親子之契約致願書
取納候場ニ者親子之間ニ而、養母江御憐愍扶持頂戴之儀
者養育孝心之志不行届、第一御扶持方頂戴立場茂奉恐入
候、依之右之訳ヲ以小倉才次儀、才十郎後家者養母之忌
服受候心得ニ可罷在申度奉存候、此段及御達度奉存候間、
宜御評議可被下候、已上

七月

安永三年例書

口上之覚

松崎佐七儀、厄介仕置候甥宗祝儀、兼而子分仕度段親
類共申合等仕、願書可差出処病氣彼是取紛不奉願中病
死仕候、佐七病死仕候依之右子分之儀私奉願候、此段
不苦思召候者御年寄御衆中迄宜被仰達可被下候、以上

二月廿七日

高橋用右衛門

御元ノ衆中

口上之覚

私儀伯父松崎佐七方ニ厄介ニ罷越居候処、兼而子分ニ

仕度段親類共申合等茂仕、願書可差出奉存候処、佐七
儀病氣罷在不奉願中病死仕候、依之佐七願望之趣此度
高橋用右衛門儀奉願候ニ付、私儀佐七願望之通子分ニ
罷成申度奉願候、此段不苦思召候者御小性頭御衆中迄
宜被仰達可被下候、以上

二月廿七日

宗悦

佐久間順斎才殿

但、三月六日願意之通被仰付候、佐七儀ハ用右衛門弟
ニ而荒物方小役勤之者也

御役方申合御達ニ而伺

別紙例書添御元ノ方問合、寛政二年九月、小倉才十郎
病氣頼合之内兼而契約致置候子分願之願書、木戸小助
勤役中差出候処、病氣及危急候程之趣ニ相聞、無足人
以下御定法も有之見合可然旨、御役方当番長坂儀兵衛
申談候、然ル処支配頭迄願書取納候間難差戻由、一卜
通者尤之様ニ候得共、譬及破談候共御法之趣申談候者、
他方取組ニ候共兎向有之間敷、況御家中内方取組ニ候

間銘々其儀相弁可罷在候、併無足人以下たり共家之存亡ニおよひ候程之事ニ候得共、御法ニ抱不得止事差留候儀ニ而御役意ニ而相心得不申候、然ル処右之通契約致置候ニ付、其後及御内達候上相願小倉与相名乗候由、此儀同四年十月松倉名跡相続人有之、依而本苗小倉与相改申度願其通被仰付候、右之訳合ヲ以変苗致候事ニ者曾而御役方不相心得候、嘸銘々場ニ而ハ不成本意事ニ可存哉ニ候得共、養父之忌服不受之今更養母之忌服受候而者、父計母計之養子ニも相当り如何敷候、然らハ立戻り才十郎忌服受可然哉ニ候得共、是以不成容易儀ニ而養母名目不相願候共、内縁有之相願厄介ニ致置候上者、存分ニ養育孝心之場ニ可相届候事ニ候、然ル処同六年無足人以下子分契約致置候ハ、病中相願候而も不苦候段被仰出も有之、依而右問合之趣厚申合候処、是以寛病者格別、及危急候而者未願相当り、其節一卜通り相同當時逆も矢張差留候心得ニ罷在候、才十郎後家御扶持方寸志之儀も御座候得共、右之趣ヲ以申合且

亦支配頭迄願書取納与申儀も、其品ニ寄可申儀ニ而此等之処も頭々勘弁もの歟ニ奉存候、此段御内々相同申候、別紙例書之儀も其頃一向御評議等無御座、願意之通被仰付候様ニ相見、是以取用ニ相成候例ニ不奉存候、然共寛政六年之被仰出ニて、無足人以下茂御取扱等重ク相成候様ニ候得共、此度之問合御役方宜筋ニ不奉存候得共、御差図次第挨拶仕度奉存候間、御評議被成下度伺

享和二年九月廿三日

一左之通奥御医師方問合、各申合候処差向例も不見当、内願書等為差出可申哉、又者口達ニ而宜可有之哉、此間御内々平助殿江相同候処、勤番等被仰付候者共違候間口達ニ而可然旨被仰聞候間、尚又申合之上今日御同人江申達候処、御聞置被成候旨
吉村養碩當時出勤者仕候得共、大病後兎角耽与不仕当番押而相勤罷在候、大手出役并同役御供之儀甚難儀仕候間、恐入候得共何卒両様供御免被成下候様口達候

同月廿四日

一御家中給人以上病氣及危急候処、嫡子無御座幼年之弟を養子ニ相願苦ケ間敷哉、乍然末期養子之儀者一卜通之養子与違ひ、早速御用立可申者を相願候筋ニ可有御座候得共、幼年ニ而家督跡式養子之儀ニ付一昨年被仰出も御座候間、血筋を差置外方養子致候而者不成本意事故、右弟を養子ニ相願、不苦奉存候得共、右体之末期養子は迄無御座候間兼而心得罷在度、先達而平助殿江伺候処御聞置被成候、然ル処今日御番頭兵橘入来、左之通問合ニ付右之趣ヲ以及御催促候処、先達而伺之趣者追而御挨拶被成候得共、進儀大病ニ付差向候事も可有之候間、勝手次第為相願可申旨被仰聞候

中嶋進儀当七月方大病相煩候処、此節以之外相勝不申、未嫡子無之弟虎三郎儀当年拾五才ニ罷成申候、快氣も無御座候者十七才ニ不滿候得共、末期養子ニ相願候而苦ケ間敷哉問合

同月廿九日

一久川所助通療治五廻リ罷越候得共、同扁(篇)ニ而日限方出勤

難仕直ニ引込罷在候処、又候三廻リ通療治仕度願例も無之由ニ而御元々方問合、薬湯日限方引込又候薬湯相願候近例有之、通療治之儀者天明三年中田喜右衛門通療治再々願、日限無之暫与願書を以相願候例も有之、薬湯与違全ク先方江罷越療治受候事ニ候間旁苦ケ間敷、乍然日限無之而者心得等閑ニ相成不宜、夫彼以申合治左衛門殿江伺候処、無抛儀勝手次第為相願候様被仰聞候間、其段及挨拶今日願書差出候事

享和二年十月十日

一左之通御附御小性頭方問合候処、外様共違御末家様之事并源八儀も大身者ニも無之旁苦ケ間敷哉、各申合之上一日平助殿江伺候処、御役方申合之通勝手次第願書差出候様被仰聞候

伊沢源八、阿部甚三郎様御家老中村茂右衛門与申者娘、妻ニ縁談申合度問合

同年十一月廿五日

一左之通問合之処、御医師之儀者定而外様へも罷出候得共、是迄ケ様之間合無之、且御目見被仰付候共違候事故、苦ケ間敷申合之上廿一日治左衛門殿江相伺候処、御目見被仰付候ニも無之候間勝手次第可然旨、乍然此方様御差支ニ不相成様先様江断置候様、且亦御目見等被仰付候節者急度相伺候様、是又可申談旨今日七郎右衛門殿被仰聞候

笹山道伯、丸毛甚三郎様兼而御懇意ニ付、御取持ニ而一ツ橋御館入仕候而も不苦哉、御目見ニ仰付候ニ者無之、御家中療治罷越候旨

同月十七日

一御広間詰之面々忝役忝人御呼出之節、当時ハ助仕埋有之候間矢張並之通御呼出可然与兼而申合置、今日治左衛門殿江相伺候処其通取計候様被仰聞候

同月廿九日

一左之者共年来不如意之処、当暮極難渋来春取続無覚束候ニ付、何卒御憐愍願当人并御役下安兵衛申達候間各申合

候処、極難渋一統之儀ニ候得共分而難渋相違も無之相聞候間、七郎右衛門殿江昨日御中座ニ而委細申上候処御聞置、今日被仰聞候者無拋趣相聞候間、別段ヲ以左之通拝借被仰付候間申談候様被仰聞候間、御役方ニおゐても難有旨申達候

三拾両壹分之御金壹両
三拾兩壹分之御金壹兩
拝借被仰付候

触流 佐和有蔵
定飯役

右同断式分拝借被仰付候

井上庄三郎

一前条ニ付庄三郎儀人支配御徒士頭江可及通用処、御役方限ニ致不及通用候

享和二年十二月晦日

一左之通御役下幸助申達候処、左候者親半五郎江為見、相違無之候者一札ヲ取引渡遣候様申談候

御山内江捨有之候品々御納戸纏手合方受取候処、滝武助今日当番之由ニ而如何取計可申哉

享和三癸亥年正月七日

一左之通内々彈之進方頼、寛政九年六月真中源吾出奔之砌、

御長屋手前家作之分、石原御屋敷御門前町人江弘遣代料も取候由ニ而、欠所之節町人共願出候処証拠も無之、欠所ニ被仰付候上者不相成段、同所御役下方為申聞候例も有之、銘々勘弁致損失者ニ候得共、此度之儀者品柄ニ寄御役方勘弁取計遣可然各申合、今日平助殿江御中座ニ而御内々相伺候処御聞置、暫過被仰聞候者、一体欠所之上者損失ものニ候得共、品柄ニ寄候事故伺之通取計遣候様被仰聞候

柴山彈之進、山中左男路跡欠所被仰付候、然ル処柏之木壹本・楓之木壹本・椿之木壹本先達而貰受、聊之事ニ者候得共旧臘代料も遣置候、御役方勘弁之上内々渡呉候様相成間敷哉頼

同月九日

一左之通御供番頭方内談有之、例年双方ニ而惣高拾三人之処拾式人ニ而御問合可申哉、先御小性頭江及懸合候処、右御役場ニ而も急度挨拶難及、何分御人無之趣御席方御移も有之候者、御近習之内方成共差出可申旨被聞候間、

左候者御簾番方壹人差出候方可然、此儀も兼而申合置候間、御移ヲ以御簾番方壹人差出候様御供番頭江申談候
来十一日御加番御広間御給人衆御人少ニ付、例年定高之内方式人増シ八人差出候様被仰渡候処、御供番之方も平之者病人多ニ付如何様ニ繰合候共八人者難差出、
七人差出候間宜取計呉候様内談有之

同日

一左之通御供番頭方被申届候間、御礼不申上候而不苦与申儀も如何ニ付七郎右衛門殿江相同候処、其外ニ取計方も有之間敷候間、壹人不足之趣御小性頭江相断候之間則申談候

来十一日御給仕加番不足之所江御簾番方壹人差出候様被仰渡候ニ付、丸山ニ而申渡候処、病氣或者痛所ニ而難罷出候間、爰元江罷出定居并当番之者江申渡候処、是又痛所等ニて難罷出候間、元方御礼不申上候者十一日ニ御礼不申上候而宜候者、壹人繰合出来候間如何可仕哉

享和三年閏正月二日

一左之通問合、部屋住ニ而も給人以上ニ候得者、悴御目見願并御奉公内願差出候得共、無足ニ而者兩様共不相成事

二候、然ル処惣給人中村半兵衛嫡子信右衛門惣無足ニ而、悴桑次郎、祖父半兵衛願ニ而寛政四年五月御徒士江被召出候、御徒士頭様小室勝右衛門嫡子久次郎無足御供番格

ニ罷在、悴惣吉御目見願者勿論御奉公内願者不差出候処、惣吉儀寛政八年十二月御雇形与申儀ニも無之御扶持方も

不被成下、御勘定方見習被召出候、祖父之格式有之惣無足与伺相濟候、内願之儀不相見、全ク其節御人少ニ付被

召出候哉、又ハ久次郎支配頭之場ニ而内願等有之被召出候事ニも候哉、其儀御役方筆記ニ無之此度之問合、忠太

平格式も有之半兵衛内願ニも不当、右惣吉の例ニ候得共内願等ニ而不被召出候間、何分御人御入用之節、右之合

ヲ以被召出可被下置哉、又者不相成儀ニ可及挨拶哉、夫彼今日委細申達相伺候処御聞置之旨

荒木忠太平嫡子林平悴十次郎儀、御目見願并御奉公内

願差出苦ケ間敷哉

但、忠太平奥勤上下格、林平者御供番無足也

同日

一左之趣組頭共相伺候処、御役場ニ而存寄者無之候得共御

長屋之儀者御役方持、宜取計具候様御元ノ庄兵衛被申聞左之書付被差出候間、各申合之上御役方ニ而も存寄無之、

以来書面之通可被仰付哉、今日相伺候処御聞置之旨

覚

御長屋住居之者引越被仰付候儀、其人ニ寄度々引越亦

者御屋敷内ニ而御長屋替被仰付候者御座候、四ヶ所御屋敷引越被仰付候者江者、近来以御憐愍無足以下引越

料被成下候処、下家無之御長屋相渡候得者是悲庇雪隠之造作仕、又者庇有之候御長屋へ引越候得者相對ニ而

買受、度々御長屋替被仰付候者甚難渋仕、其中二者(計五)纔年之庇掛候旨

享和三年正月三日

一左之通御者頭方問合、稽古之儀勝手次第与被仰聞候

三ツ道具遣方心得候者

十人目付

山本久五郎

去月廿七日御吟、此者少々

其心掛罷在、併申達候程之儀無之何卒稽古仕度相願候
処、當時御役方江差出置候者之儀苦ケ間敷哉

同年同月八日

一左之通縁者余田十五郎内々問合、喜間太儀重御咎嫡子迄
退身被仰付候上、三男嫡子可相願儀ニ候得共御憐愍之儀
も可有御座哉、才助儀も年来ニ付如何相心得可申哉、先
達而御役方心得平助殿江相伺候処、其儀御席ニ而も先頃
方薄々御評議有之、何分可被仰合旨御聞置被成候、然ル
処此度問合ニ付尚又各申合、一昨日治左衛門殿江相伺候
処御聞置今日被仰聞候者、御席ニ而も厚御評議被成候得
共喜間多儀度々御咎被仰付、殊ニ其刻御憐愍之被仰出も
有之御家中一統承知之事ニ候処、無間も又候不埒之儀有
之候ニ付其節永之御暇可被仰付候処、以御憐愍右之通重
キ御咎被仰付候、未年数も不相立候得共中々御憐愍之儀
相願候筋ニ無之、依而三男嫡子願勝手次第為差出候様被

仰聞候間、其段及挨拶候

中村才助当春方痔疾ニ而引込罷在候処、此節至而大切
難治、譬快氣致候共手間取可申旨御手医師共申聞候、

然ル処嫡子喜間多儀去秋中重キ御咎被仰付候ニ付、三

男儀嫡子可相願哉、又者喜間大儀矢張嫡子与相心得可

罷在哉、万一之儀も御座候者此上御憐愍之儀相願候筋

ニ可有御座哉、親類共一同甚案心不仕候ニ付内々問合

享和三年閏正月十三日

一山中左男路跡屋敷、御用ニも無御座候者拝借仕度旨、奥
御医師吉田昌保被申聞候間、其身一代之者江者御貸金不
被成下候御定法之旨同人江為申聞候処、右御貸金不被成
下候共拝領仕度旨昌保被申聞候ニ付、各申合之上去ル十
一日七郎右衛門殿へ申達置候処、勝手次第内願書付為差
出候様平助殿被仰聞候間、則当人江申談候

同月十七日

一左之通御役方勘弁之上宜取計呉候様御使番被申聞候、然
ル処是迄済来候儀、御時節柄旁ニ付勘弁被致候様可申談

候処、実々無余儀事ニ相聞、内勤与違他勤之儀外勤之押移ニも相成間敷、依而各申合之上去十一日委細申達候処御聞置今日被仰聞候者、御役方申達候趣無拋儀ニ付、外勤与違以前之通壱人出ニ致候様御広間詰江も申談且御移ヲ以送り、人之儀御元 \times 江申談候様被仰聞ニ付、御元 \times 御使番御広間詰江申談候

御使番去辰年 \square 当番之節挾箱御広間詰組合ニ被仰付候、然ル処他之勤雨天之節杯相厄シ罷出候節、着替等無御座候而者不相成、余慶持参仕候而者組合挾箱張難儀仕候、御時節柄之儀是迄者仮形ニ間を合セ候得共、何卒相成候者以前之通壱人出ニ仕度旨

同月廿八日

一左之通御役方ニ而者如何相心得候哉御尋ニ付、寛政十二年十一月御家中四拾才以下養子不相成旨被仰出、尤給人無足之訳被仰出者無之候得共、同十年八月無足人以下子分養子与唱候様被仰出、遺跡相続之養子同様ニ忌服も御改被成候事故、給人ニ准シ無足人逆も同様之心得ニ罷在

候旨、今日及御挨拶候

御家中四拾才以下養子不相成旨被仰出有之候処、無足人以下も同様之心得ニ罷在候哉

享和三年二月廿三日

一左之通何分勘弁之上宜差 \square 候様御元 \times 庄兵衛内談、御中陰并御法事中療用無拋願書老人先者不相成、殊ニ今日ニ到リ心底難見届事ニも有之間敷、兼而之儀譬願書差出候とも直ニ御帳附御届も有之間敷、左候得者願書不差出も同様之儀、万 \square 御名出候事出来候とも、御年寄中願書御預置ニ而者御名出シ不出之表向足シニも不相成、心附候儀ヲ申達置候迄之事、永キ御法事ニも無之見合可然、夫彼ヲ以相同候処見合置候様被仰聞候間、其趣ヲ以及挨拶候

長田林蔵弟藤本小助儀、先達而久離差許御帳消相願候処、兎角心底難見届又候久離致候、依之再応御帳願奉恐入候得共願書差出度、此節御法事ニ候得共御名出候儀難計ニ付、願書差出苦ケ間敷哉内々問合

旅行

享和元年二月十四日

一此度浦賀御番所江御役下^一人^二被差遣候^三処、ケ様之旗御用
近例無之候^二付、何卒虎口^一兩様^二申合置度、御役下^一左
之書付^一ヲ以申達候^二付承置申合候^三処、御府内を放候得者
既^二岩付^一淨国寺出役^二而茂御謁有之、左候得者遠近之無
差別旗御用兩様者有之間敷哉^二候得共、遠近之差別^二而
休引も不為致事故、以來書面之通勝手次第、乍去遠近虎
口兩様不落合候様可申合旨御役方限申合濟、其段御役下
江申談候

覚

御役方旅虎口之儀、大坂・福山其外御用向^二而遠国江
被遣候虎口之儀者是迄之通、三十里以下御用^二而被遣
候節者、別虎口書^一ヲ以被仰付被下候様、於御役場御定
被置被下度奉存候、是迄近国杯江被遣候虎口^一耽与難相
分候間、左之通仕度奉存候、以上

二月

御徒目付

享和元年二月十七日

一此度浦賀御番所江御役下被差遣候^一処、都而旅御用之節若
党御貸不被成候御法^二候得共、地廻リ^二而囚人等差添御
番江被差出候節者刀持之ため^一一人^二拜借被仰付候、此度之
儀も御先柄御外聞も如何敷存候^二付、刀持一人^一拜借被仰
付被下度各申合御役下^一も同断願出、并持人御中間之儀
も申達候間、今日左之通申達候^一御評議可被成旨被仰聞
候

覚

右之者此度浦賀御番所江被差遣候^一処、都而旅御用之節
若党御貸不被成下候御法^二候得共、御先柄御外聞も如
何敷奉存候^二付、此度限刀持一人^一拜借被仰付被下候様
仕度奉存候、并持人御中間罷出候様被仰移被下度奉存
候、此段御達申上候、以上

林 安兵衛

二月十七日

大御目付共

同十八日

一前条御外聞も如何敷候ニ付、達之通拝借被仰付候

同年六月八日

一御長柄之者拾壹人福山表江被差立候ニ付、木曾路相願候

ニ付、碓氷御関所通証文被相渡候様

但、木曾路旅行之儀ニ付去十一年九月被仰出候御書付、

去六月御役方江御移之趣有之候ニ付、道中御奉行様江

御届之処如何ニ可有之哉之段治左衛門殿江申達候処、

一己立旅行ニ而先触無之候者不苦候段、御留守居衆此

間申達候ニ付、以来左様相心得候様被仰聞候

享和元年八月十日

一御朱印差添道中心得之儀伺有之候処、御朱印一件帳之処

ニ委し、爰ニ略畢

享和元年八月廿二日

一御在所方芸術等之儀ニ付相願出府致候者、逗留中出仕致

候様被仰出候

但、委細被仰出之部ニ有之

同年九月八日

一在番表御医師道中人数少ニ付、以来御勘定組頭在番之者

与一諸ニ旅行致候様被仰出候

同年十月十二日

一木曾路旅行先触無之分者格別、其外者去ル寛政十一年九

月被仰出有之ニ付是迄之通御届可有之処、信州御中間御

用先触之儀ハ例年之儀是迄済来候処、是以已来同様道中

御奉行様江御届被成候間、出立余程以前先触書付為差出

候様可申談旨、軍記殿被仰聞候

但、従公儀被仰出候御書付者寛政十二年六月也

同年十一月廿五日

一久保田伴右衛門信州御中間抱御用相济帰着ニ付、明日御

謁被成候旨被仰渡御元々江申談候処、此節吟味役引込等

ニ而御人少、殊ニ御広間向御修復旁以御用多ニ付、何卒

今日之御謁ニ相成候者御用向直ニ為相勤度旨内々問合、

然処即日御謁与申儀無之、近来大坂・福山御用济帰之者

之外無之、併無抛趣ニ相聞候間御内々相伺候処、被仰合

之上無抛儀ニ付此度限御謁可被成旨被仰聞候、其旨及挨

搦候

享和二千年正月十三日

一左之通当人問合、日光表ニ限り御番引等先格も無之頼合
等も如何ニ付、御謁も相濟候ニ付問合之通為相引可申哉
伺候処、其通与被仰聞候

堀口彦三郎昨今当番明後十五日日光表へ出立、少々者
用意も御座候ニ付、最早御謁も相濟候間、御番明ケ引
候而も苦ケ間敷哉

同年三月六日

一左之通問合ニ付先例相吟候処、明和子年八月藤田与兵衛
米津大和守様御附之節、御同人様御知行所へ為見分被差
遣度旨、御願被成候上御聞濟被成候、寛政八年十一月岩
付淨国寺江為御代番加茂清左衛門被遣候節、出立・帰着
^(體)
之御達計、同九年巳九月鞞負様御上京ニ付右同人御供被
仰付候節者、其段御役方江相届候ニ付御役方及御達候、
左之問合者夫共違ひ、与一兵衛例ニ見合、鞞負様江被成
御頼候もの歟、与一兵衛儀者御知行所見分ニ被遣候得者

又誤合も違ひ表立候儀、此度御代参者御内々之事故前広
ニ其旨及御達置可然哉、夫彼申合右之趣ヲ以相伺候処御
一席被仰合、与一兵衛例共違御代参被仰付候段、前広ニ
申達置并出立帰着之節及御達候様被仰聞候間、其段及挨
搦候

加茂清左衛門、鞞負様方御内々相州大山不動へ御代参
被仰付候、其段及御達置可申哉、又者出立・帰着御達
計ニ而相濟可申哉問合

享和二二年八月廿六日

一山岡久之進・本間勝藏・浅川李輔鎗術の儀ニ付奉願上出
府仕、御伝受相濟申候ニ付、明後廿八日出立可仕候、道
中不案内之儀ニも御座候間、来ル廿九日御医師并御勘定
組頭・在番交代之者一緒ニ出立仕度伺、無據趣ニ付其通
リ与被仰付候

但、伺書別帳ニ有之

一右三人一日日延之儀是迄ケ様之例無之、爰元より引越之
者扨当人并家内之者等病氣ニ而日数差延候儀者御達書ニ

而相濟、且亦御用向ニ而出府或者右様之出府ニ而他国江
又者罷越度願、并爰元ニ親類杯用事等有之曰數延候儀、
何も願書ヲ以相願候得共、夫共違ひ候事故平助殿江伺之
上、右之通伺書為差出候事

享和二年五月廿六日

一 御家中之面々、福山表江引越被仰付候者有之節、髮改等
都而御役方ニ而取扱之儀、先頃平助殿御尋尚亦先格相吟
候処、或者二重ニ相成候儀も有之候ニ付、以後之処左之
通相定今日書付ヲ以差出候、勿論是迄之振合少々ツ、相
改候儀も申達置、尤御規定之処ニ拘候儀ニも無之候事

一本御目見以上福山表江引越被仰付候者、左之通同役支
配頭ヲ以及御達御役方江も被申届、左之髮改・疵改人
別書御役方江差出候間、一覽候而洩候儀も無御座候得
者、御役方江差出人別書者一卜通懸御目候上、御元々

江差遣候儀ニ御座候

一 御目見以上髮改・疵改案文

口上之覚

私儀福山表江引越被仰付候ニ付、家内召連来ル幾日出立
仕度奉存候、依之箱根・今切両御閑所御手判頂戴仕度
奉存候、此段宜御申達可被下候、以上

月 日

何之誰

但、粘入半切認、上包半紙折懸、上二名計髮改書付

覚

妻

一 髮厚薄、中挾延立長短、後毛左右鬢切有無、前髮切
有無、指櫛ニ懸不懸之儀、尤髮常体ニ御座候

乗物

忝挺

但、丸持角持、引戸之訳

娘

小女

当何々幾歳

此娘何才ニ候共書面之通相認、鉄附居候候得者鉄附
小女与相認、眉毛も取候得者娘与計相認申候

一 右同断

同断

壹挺

月日

何之誰 印

但同断

娘

但、同紙上包、同紙同断、上ニ髮改書付下ニ何之誰疵改書付

小女

覚

当何々幾歳

妻

此娘七歳以下ニ候得者髮相改不申、七才以上者並之通相改、依而乗物之有無も相認不申候、年附計

母

一右同断、詰髮等之訳

同断

壹挺

一髮之内、釣はけ・釣秣・櫛摺・小枕摺・出来物之跡・灸之跡・疵等之有無、面部額頬腮杯、出来物之跡・疱瘡之跡・灸之跡・疵等、或者ほくろ杯之有無、襟都而乳方上見渡候処右同断有無

但同断

厄介

一右同断

娘

女

小女

一右同断

娘

同断

壹挺

小女

但同断

当何々幾歳

右之通相改候処相違無御座候、以上

此娘七才以下ニ候得者年附計

一右同断

母

何之誰

一右同断

厄介

同断

女

娘

右之通相改候処相違無御座候、以上

名

月 日

何之誰

同断

疵改書付ニ者印形無之事

母

但、同紙ニ認、上紙同紙、上ニ疵改書付下何之誰

厄介

人別書

女

覺

一格録ニ而御貸人高并手前人高、右之通人別ニ而御座

何之誰

候、以上

妻

月 日

悴

但、龜半切認、上包なし

何之誰

悴共娘者年附いたし候事

当何々幾歳

一左之通同役支配頭ヲ以御役方江差出、御足輕拝借之儀

此悴被召出罷在候得者当人方差出、親人別書江相認不

者、及御達候得者御移ヲ以御者頭へ申談候様被仰聞、

申候

則誰へ申談御受申達、其余御貸人者直々御元へ江差遣

次男

候儀ニ御座候

覚

一御足輕

何人

右者福山江引越被仰付候ニ付、道中御貸人之儀被仰
移可被下候、以上

月 日

何之誰

但同紙認

覚

一何御中間

忝人

一右同断

忝人

右者同文言

月 日

何之誰

但同断

一妻懷妊ニ罷在候得者五ヶ月以上何ヶ月と申儀を疵改書

付末江相認申候

以上

大目付

一御通掛以下小役人等同断引越被仰付候節、左之通支配

頭方及御達御役方江も申届候間、人別書者一卜通懸御

目候上御元々江差遣申候、髮改之儀先格之通相改候様

書付被成、御渡候間兩御役下差遣相改申候

口上之覚

何之誰

右之者、福山表江引越被仰付候ニ付、家内召連来ル幾

日出立仕度、依之箱根・今切御関所御手判頂戴仕度

旨相願候間、此段御達申上候、以上

月 日

御役名

但籠半切認

覚

妻

女房

乗物

忝挺

但、丸棒角棒引戸之訳

娘

小女

右同断

壹挺

母

但同断

母

一御宛介高二而御貸人高右之通人別二而御座候、已上

右同断

壹挺

月日

但同断

但龜半切

右之通髮改被仰付被下候様仕度奉存候、此段宜被仰

一右御貸人拝借之儀、夫々方御役方江差出候間前書

達可被下候、以上

同様取計申候

月日

何之誰

一前条両御役下罷越、相改左之通書付差出候間、一

但、白保半切認、上包半紙上名計

覽仕候間差出候儀ニ御座候

覚

覚

何之誰

何之誰

妻

妻

悴

女房

女房

何之誰

一髮改方、前二同し

当何々幾歳

右同人

娘名

娘

同断

小女

当何々幾歳

一右同断

母

一右同断

右之通相改候処相違無御座候、以上

月 日

御徒目付名 印

十人目付忝人

但、粘入半切認、上包半紙折懸、上何之誰妻髮改書

付下ニ御徒目付名計

覚

何之誰

妻

女房

一疵改方、前ニ同し

右同人

娘

小女

一右同断

母

一右同断

右之通相改候処相違無御座候、以上

月 日

御徒目付名 印

十人目付忝人

但、同紙認、上包半紙、上ニ何之誰妻疵改書付下ニ

御徒目付名計

十人目付者名面不相認、書面之通役名忝人与相認候

一召仕候者髮改之儀、同役支配頭方及御達御役方江も申

届候儀ニ御座候、先格之通相改候様書付御渡被成候間、

両御役下差遣相改申候

覚

下女

忝人

名

右者髮改之儀、宜_{御申達被仰置}可被下候、已上

但、粘入半切認、上包半紙折懸、上二名計

此御達先格之髮改明細ニ認、印形いたし差出候処ニ

重ニ相成如何敷候間、此度書面^(カ)之通相極申候

一前条兩御役下罷越相改書付差出候間、一覽仕候而差出

候儀ニ御座候

覺

月 日

御徒目付名印

十人目付忝人

覺

何之誰

下女

名

何之誰

下女

名

一疵改方、前ニ同し

右之通相改候処相違無御座候、以上

月 日

御徒目付名

十人目付忝人

一髮改方、前ニ同し

右之通相改候処相違無御座候、以上

月 日

御徒目付名印

計

但、同断、上ニ何之誰下女疵改書付下ニ御徒目付名

十人目付忝人

一妻懷妊ニ罷在候得者五ヶ月以上何ヶ月与申儀を疵改書

但、粘入半切認、上包等同断、上ニ何之誰下女髮改

付末江相認申候

下ニ御徒目付名計

一無足人以下其身御関所御留主通手形之儀、別段支配頭

一髮改方、前ニ同し

ヲ以申達候事ニ御座候

右之通相改候処相違無御座候、已上

同年九月八日

一御朱印一件有之、御朱印一件之所ニ在ル

享和二年九月廿一日

一劍持梅次郎・石崎定八、信州御中間抱御用被仰付候処、木曾路旅行之儀ニ付寛政十一年九月御触迎之趣も有之、人馬相雇候者公儀御届入候間、其段申達候様御移ヲ以御元々江申談候様平助殿被仰聞候間申談候処、左之書付被差出候間平助殿江差出候

但、是迄行違御届無之候ニ付、昨年十月軍記殿被仰渡候趣も候得共、以後本文之通手続ニ心得候様被仰聞候

覚

一駕籠人足式人

一軽尻馬 壹疋

一本馬 壹疋

劍持梅次郎

石崎定八

右者来月中旬信州江出立仕候ニ付相雇申度奉存候、以

上

九月廿一日

劍持梅次郎

一前条御届濟ニ而勝手次第与被仰渡候間、其節並之通先触

書付差出候様平助殿被仰聞候

享和二年十二月八日

一從公儀被仰出候御書付之写左之通

一諸家參勤交代其外道中継人馬之儀、御壳高も有之候処い
つとなく多人馬為繼立候儀ニ至リ、助郷其外宿方難儀も
不少事ニ候、然共近在之事ニも無之候得共、一概相改候
而者諸家差支も可有之儀ニ候、左候得者迎是迄之通ニ而
ハ助郷其外難儀も相増候事ニ付、銘々程能減方之勘弁も
可有之儀候間、先其旨相心得候而寄々申通可被置候事
一五街道人馬先触之儀、三ヶ月程ツ、溜置道中奉行江被差
出候様宝曆年中相達置候処、近来不被差出向も多ク候、
向後參勤御暇之節者勿論家中往来共不洩様可被差出候、
尤家中往来ニ而も多人馬被繼立候節者前広被仰合候様可
被致候

一諸家中往来之節、先触差出候面々泊附無之趣相見候、右
ニ付旅行之日割難相分候ニ付、先触差出候日限を目当ニ
いたし宿々人馬寄置候由之処、右日限之通旅行無之日々

人馬差支候分も可有之哉二候、以来先触江泊附書入可被差出候、其上川支等有之日割相違候者猶追先触可被差出候、都而役人共又者馬士人足不束之儀も有之節者其段道中奉行江可被申聞候

十二月

享和三癸亥年正月三日

一長坂東助勢州為御代参来六日出立二付、道中川支等有之節者、去十二月八日公儀方被仰出候趣も有之候二付、追先触之儀認振合取計候様御元々中・御留主居中江被問合、当人江申談被置候様御小性頭江申談、問合有之候者委細被相咄候様御元々・御留主居江申談候

御普請之部 公辺江御届伺

享和元年五月五日

一去ル二日申達出候捨子病死一件、御用頼御目付様江今日御届相濟候間、御組合中江為御承知申通候様御留主居剛

八被申聞候@

但、ケ様之儀申達出候御並も一向無之、依而内々御出入御徒目付衆江本分之趣問合候処病死ハ其通り、変死ハたとへ貰主江遣置候共其段及御届候得者、早速檢使ニ被差遣候御規定之由、依而右之通之取計ニ相濟候旨
剛八被申聞候

同年六月十日

一天神橋御普請小屋、御役人様方十間川御屋敷預萩原仙助迄左之通紙面ヲ以申来候旨、同所御役下七右衛門方申越候旨申達候間、御留主居剛八江御届之儀及懸合候処、公儀御役人方左様御差図有之候得者、仮合日數懸リ候御修復ニ候共御届ニハ及不申候旨、同人被申聞候間、其段委細治左衛門殿江申達、早々取掛リ之儀、御元々江申談候十間川通御普請此節掘方致出来、両川縁杭箒取懸是又追々出来致候二付、近出来栄見分ニも相成候間、御屋敷前物場之儀早々御取掛リ有之候様致度、此段御達申候、以上

六月九日

一前条揚場潰之儀、十一月廿七日及御届候処勝手次第与被仰渡候

享和元年六月十三日

一十間川御屋敷前通揚場左右駒寄之儀、去十日及御達御届等之儀取計置候処、又候昨夕同所御役下方絵図ヲ以申達候者、一体道幅逼(狭)キ場所故夜中往来之者、怪我等之儀も難計候間三方江駒寄仕度旨、且此度新規之事故御届仕候間、公儀御役人・川浚御役人、左之仁江御屋敷預リ萩原仙助方及掛合候処、新規ニ候共畢竟揚場江附候物故、決而御届二者及不申候趣被申聞候段、是亦申越候旨申達候間、御留主居剛八江及相談候処、公儀御役人方御差図□有之候得者、矢張揚場雁木御修復之通御届入不申候旨被申聞候間、御元々江も及内談、平助殿江絵図面ヲ以委細及御達候処、左候者御元々申合早々取掛候様、并御留主居江も御届之儀談届シ可申旨被仰聞候間、則兩様共御移ヲ以御留主居剛八・御元々庄兵衛江相談候

同月廿六日

一小川町広小路御組合場所出来ニ付、公儀御役人御見分有之候処、砂利敷之儀其以前敷候而者却而御見分之処不宜ニ付、当朝ニ至リ敷候積リニ心得、今朝御普請ニ而其通取計候処、砂利敷之儀者何程ニ而も其俣打寄置、一体之地面并砂利何合与申御見分受候上ニ而敷教候様、尤最早今日之処者相济候ニ付以後心得候様、公儀御役人五左衛門殿被申聞候段、御役下安兵衛申達候事御元々江も相咄可申事

同年七月七日

一石原御屋敷新規下水柵出来ニ付、御届入可申哉御屋敷守岩崎東内場ニ而御並承合候処、御郡代附役人方御達之上、右下水出来之事ニ候間御届等ニ不及旨申越候間、一卜通申達置御留主居江も右之趣相咄置候事
享和元年八月六日

一左之通及御達候旨、御留主居剛八被申届、平助殿方御移も有之候間、一卜通御元々江咄置候

御井樓場所替之儀、永々之儀者御届入、御修復中之儀

二 候得者御届等入不申候旨御並之由

同年同月廿三日

一 二月・八月右両月御当番御目付中様、大手御番所御持場

御見廻被成候御達有之候処、此方様々様之御先格も無之

二 付、御相番真田豊後守様へ問合候処、御同所様二而も

半下座仕候趣二付、此方様二而も御同様相心得候旨及御

達呉候様大手御番頭兵橋被申届候二付及御達候、勤番之

御役下江も心得申談候

但、御番頭二者其節雨落下砂利外迄為御挨拶罷出候事

一 太田撰津守様当時雁之間席江万端被仰合相济候間、御番

所二而下座之儀、雁之間御席之通半下座仕候様伺濟

享和元年九月四日

一 十間川御屋敷前通り新規下水、此度公儀御普請二而出来、

右二付御門入口之処橋之儀、永々之事故石橋二被仰付候

者可然旨御役下七右衛門方も申達、御届等二者及不申候

旨御郡代附御役人上條源次郎殿被申聞候由、是又申達候

間御留主居江も相咄今日申達候処、伺之通石橋二被仰付

候間、御元々申合取計候様被仰聞候

一 左之書付、御役下七右衛門差出候間平助殿江差出候処、

御移可被成旨被仰聞候

覺

此度御屋敷前通り新規下水従公儀被仰付候二付、御茶

屋・御泉水江掛り樋損申候間、往来堀割御修復御座候

様御達申上候、以上

九月

十間川
御徒目付

一 前条樋御修復往来堀割之儀、例御届入候得共此度者右下

水被仰付候二付御修復被成候事故御届二及間敷哉之旨、

御郡代附上條源次郎殿江問合候処、随分其通此度者御届

二不及候旨被申聞候由、御役下七右衛門申達候間、御留

主居剛八江相咄其段申達候

一 左之通御目付松平田宮様御尋二付、左之通御留主居方御

答書差出候間承知置候様被仰聞候

大手御門番

御名

右出火之節御城内江人数繰入候節、主人持鎗為持入候心得候哉、尤古来者武器迄も為持入候儀も有之候哉

但、持鎗為持候者二本道具其俣二本為持候哉、又者

一本者詰場ニ残シ壹本入候哉

右之通巨細ニ相認差出可申候事

八月晦日

松平田宮

松平田宮様方御尋御座候

大手御門番

御名

右出火之節御城内江人数繰込候節、主人持鎗為持入候心得ニ候哉、尤古来者武器迄も為持入候儀茂有之候哉

但、持鎗為持候者二本道具ハ其俣二本為持入候哉、

又者壹本ハ詰場ニ残壹本入候哉

右者明和九年二月廿九日出火之節、御名大手御門非番

ニ而人数召連下馬江相詰候処、御差図ニ而大手御門内

江人数召連相詰候節、持鎗式本右場所迄入置申候、依

之若シ御城江人数繰入候様御差図御座候節者、先格之

通持鎗者入候段申上候心得ニ御座候、先年誰様江伺御

差図与申儀者旧記等致焼失相分不申候、右之外近頃御

城内江人数繰入候儀無御座候

九月三日

御名家来

今川剛八

一前条之趣御留主居剛八ニも被申届、且亦武器之儀御表書

ニ認不申候ニ付御尋有之候得者、先年為持不申候段及御

答候旨被申聞候、乍去此儀者其節出火之模様、大手方・

桜田方御勤中別段御行列之通御幕・御弓・御鉄炮長持江

入、組御長柄鎗者渋紙包ニ而被差出候心得ニ罷在候旨、

御留主居同人江相咄候

但、御持鎗、大手方・桜田方并紅葉山・吹上火之御番

御勤中、御城入之節者御直鎗之方為御持被成候御先格

之事

享和二年正月廿一日

一御馬印式本共御番所江御詰被遊候節為御持被遊候処、以

来諸向御坊等御城内江御繰込も有之候程之儀ニ候者、格

別左も無之節先見合置候様被仰出候

一前条ニ有之御持鍵御先格之事故、諸向承知之事ニハ候得共、猶亦御番頭・御者頭・御供頭へも心得申談置候様被

仰聞候

享和元年九月八日

一大手勤番之面々支度引米之儀、一統御借米有之内者右引米御用捨被仰付候旨被仰出候

但、勿論之事ニ者候得共、在番御足輕者是迄之通と平助殿被仰聞候、御者頭江一通申談、丸山組者一昨未年

御用捨被仰付候事

同年十月二日

一御預原御成并同所脇通御・御成之節前夕廻之儀、寛政七年十二月廿八日御留主居申合之上相止、然ル処同所御成并脇通御・御成之節六時之御供揃ニ候得者、当朝見廻候而者未明之事故掃除等其外不行届ニ付、猶亦御留主居申合左之通相極、今日軍記殿江申達御留主剛八江其段申談候

原御成、六時御供揃之節者前夕見廻之事

但、六半時方之御供揃ニ候者は迄之通当朝見廻可申事同所脇通御・御成之節、同断御供揃ニ候者前夕見廻并還

御前

但、六半時方之御供揃ニ候者は迄之通当朝見廻り可申

還御前同断

一前条掛り之場ニ而御役下江申談候

同年同月十九日

一飯田町中板下出火ニ付、大手御非番中ニ付御詰場江御詰被遊候処、京極備中守様御差図ニ而平川口御門方御人数

御城内江繰入候事

但、大手御門御勤之事故、御持鍵并御馬印共不殘御城

内江も為御持被成候事

享和元年十月廿四日

一左之通去ル廿四日暁出火之節、御人数御城内江御繰入之儀ニ付、御用番安藤对馬守様江御伺書被差出候処、右御挨拶之趣以書付御同所御用人申聞候趣承知置候様治左衛

門殿被仰聞、兩通為御見被成候

口上之覺

昨廿日曉就出火ニ付、私儀大手御門非番中ニ付下馬江相詰可申候処、病氣ニつき為名代同氏主計頭下馬江相詰候処、御城内五拾三間通風筋不宜候ニ付人数繰入可申旨京極備中守差図之由、御目付松平伊織方以御徒目付申聞候、然ル処何レ御手前様方御差図茂可有之儀与見合罷在候処、再応人数繰入之儀催促申越候間、先人数之内分候而右場所江差遣申候処、大手之方弥氣遣敷儀無之ニ付、相番真田豊後守江申談同所を引取、惣人数召連罷越候儀ニ御座候、以後右体若年寄中方差図有之候節ハ御手前様方御差図無之候共、任其差図ニ候心得ニ罷在候而可然哉、此段御内慮奉伺候、以上

十月廿一日

御名

御差図

去ル廿日火事之節、人数繰入之儀ハ素方自分共及差図候事ニ而候、以来も出馬之若年寄臨期^(儀)応変申達候儀者、自

分共差図与可被相心得候事

享和元年十月廿七日

一此御差図濟之儀、大手御勤中之事故御番頭・御者頭江申談候様被仰聞候間則申談候

享和元年三月廿八日

一近例ケ様成御成御道筋無之ニ付而ハ小川町辺御見通ニも相成間敷、依而御並之処尚亦今朝御留主居ヲ以被承候処、内藤様衆方出役人留等無之、尤飯田町辺辻番所方申次第人留等致候趣ニ付、小川町辺辻番所江承合候処御道番御徒衆御達も無之、まな板橋ニ而人留候段申来候ニ付、依而還御之節、田安御門通御ニ付例之通出役可致先引取候様剛八申聞候ニ付則引取、其段及御達候、以後半藏御門方右江、御堀端田安御門外御薬園御通筋之節者、辻番所ハ勿論原出役等無之事

同年五月十三日

一御預原木戸鉚評損候旨、右者御届物ニ候得共大したる事ニも無之、去々年四月同様之節御留主居申合之上、似寄

之品ニ而内々取繕置候例も有之、不目立様取計可申哉与
御留主居江も及内談候処其通ニ而可然被申聞候ニ付、依
而其段平助殿江申達、左書付差出候処御移可被成旨被仰
聞候、書付略ス

但、取繕所御普請方見分等有之候而者目ニ懸リ不宜候
間、似寄之品を大工ニ持セ御役下部屋江被差出候様御
元々庄兵衛江懸合置候事

享和元年十月廿九日

一御預原木戸袖板式枚致紛候ニ付前条之通取計申候事

此達書付別帳ニ有之

同年十一月七日

一石原御屋敷此方様埋樋江最上様前通下水掃落候様被成度、
御修復之節者御出銀可被成旨御屋敷守方達候処、其通被
仰出候間御元々御留主居申合取計候様平助殿被仰聞候

但、右場所以来御出銀等之儀も有之候間、以後之為仙
助場迄最上様衆方一札取置、可然御留主居申合之上、
其通被取計候様申遣候

享和元年十一月九日

一左之通御目付中様方御尋御留主居方達有之、御旧記御吟
被成候間御役方ニ而も相吟候様、并御番頭江も其頃之手
扣等有之候者相吟申達候様可申談旨平助殿被仰聞、御役
方左之通旧記書拔御同人江差出候

明和九辰年大手御非番中二月廿九日目黒行人坂方出火、
御人数被差出、何之誰様御差図ニ而御城中江御人数御
繰込有之候哉、御目付小長谷和泉守様方御小人目付下
山惣左衛門を以御尋之事

御役方日記書拔

水野壱岐守様御差図ニ而二ノ御丸江御人数御繰込

水野出羽守様御差図ニ而御舞台江右同断

御目付水野要人様御差図ニ而二ノ御丸御人数引揚、外
腰掛江

一前条之趣被入御聴候処、御前御覚被遊候者左之通御意之
由平助殿被仰聞候

松平右近将監様御差図、御目付水野要人様御達ニ而御

舞台江御人数御繰込并大手御橋風筋不宜、御目付河野
吉十郎様御留主居江御直々御達有之、御手廻之者共ニ
而為御坊被遊候由

一 火之元之儀者御家ニ而も兼而被仰付置候、然ル処此度左
之通ニ御沙汰書有之、勿論御触達無之事ニも候得共、御
給人外廻リ之儀、臨時増廻リ被仰付可然哉与此間軍記殿
被仰聞候処、右御給人廻リ之儀者御一町組被仰合之事故
御銘々限ニも相成間敷、何分御留主居可申合旨及御答置、
御留主居庄兵衛江及対談候処、左之通達防頭取と有之、
右之御役名者何之儀ニ候哉御用頼御目付松平田宮様御用
人中迄問合候処、右頭取与申者御旗本様御組合辻番頭取
之事ニ候間、申来万石以上之御方ニ者御構無之矢張是迄
之廻リ方ニ而宜旨挨拶、左候者丸山・石原・十間川御屋
敷辻番御組合、此方様御頭取ニ付此等者如何与相尋候処、
是以御組合者御頭取ニ候共、御沙汰書御達過而ハ御旗本
様方限ニ被仰合候事故、是又御構無之旨被申聞候得共、
右両御屋敷・十間川共火用外廻リ与申儀無之、両御役下

見廻計ニ而別段ニ廻リニ及申間敷哉と申候処、随分其通
可然由被申聞候由、今日其段平助殿江申達置、尚亦見廻
リ夫々御役下江申談候

立花出雲守殿御達

火事之節防頭取之面々江火之元等之為ニ候間冬春之内
風烈之節計組合之屋敷く申合、家来ニ、三人宛屋敷
之外不限昼夜相廻候様可致候、夜中者別而繁々可被相
廻候、尤あやしき者見出候者捕之、届ニ不及町奉行江
可被相渡候、勿論とらへ違候分者不苦候、以上

十月

享和元年十一月十一日

一 明和九年二月廿九日出火、大手御非番中ニ付御人数被差
出候処、御城内江御繰込御差図之御方様御名前之儀相吟
候処、一向手扣等ニ見え不申候旨御番頭被申達候間、其
段治左衛門殿江申達候

一 明和九年辰二月出火之節之儀ニ付昨日御尋有之候、御目
付様江左之通御届有之候間、承知置候様治左衛門殿被仰

聞候

明和九辰年二月廿九日目黒行人坂方出火之節、伊勢守儀大手御門番相勤罷在、非番中ニ付大手下馬江相詰候処、松平右近將監様御差図之由、御目付水野要人様御談ニ付、人数召連大手面番所脇江相詰申候処、尚亦御同人様御差図之旨要人様御談ニ付、人数計振分ケ二ノ御丸并御舞台江相掛申候、以上

十一月十日

御名家来

飯田金左衛門

同月十一日

一石原御屋敷裏御門前通新規下水不残出来致候旨、依而御届之儀御屋敷守方御並不合候処、御郡代方御小屋場方御達之上出来候事故、御届等ニ不及旨被申届候間一卜通御年寄中へ及御達、御留主居江も右之趣相咄可申事

同月十四日

一左之通御番頭・御者頭方問合ニ付相伺候処、御聞置暫過御内慮被成御伺候処、兼々勤番之面々大儀与被為思召候ニ付、此節別而寒冷之砌ニも有之候へ共、厚以尊意被仰

出候事ニ候得共、御請御執合も一卜通り相濟候事故、別段御礼等ニ不及旨申談候様被仰聞候間則申談候

是迄大手勤番之面々江御目見被仰付候節者一卜通御意有之、御番頭御受申上、御年寄衆御執合御座候而相濟候処、今日者御執合相濟候後、別段大儀之旨御意有之、

一統奉承知難有奉存候、右ニ付御礼之儀如何可仕哉

享和元年十一月十七日

一去月廿日曉飯田町辺出火、御人数御城内江御線込御差図一件、御用番様江御内慮御伺之趣大手御相番真田豊後守様江御使者ヲ以被仰合之上、此度左之通御讓書へ御書加被成候間承知置候様、并大手置附帳江も相認置候様、御番頭・御者頭江も一卜通申談候様被仰聞候

享和元辛酉年十月真田豊後守・阿部伊勢守勤番中、同月廿日曉飯田町辺出火之節、同廿一日御用番安藤対馬守殿江伊勢守方左之御内慮伺書差出候処、同廿三日御挨拶有之事

御伺書并御挨拶之趣去月廿四日之通也

享和元十一月廿一日

御届書

一大手并御防火之御番等御勤中、先槻御玄関下座薄縁左右

本所石原大川端頭取阿部伊勢守、組合辻番所惣高壹万

江御馬印・御纏共御飾附有之、寛政四年八月紅葉山火之

三千六百五十石

御番之節も同断御飾有之候処、風雨之時分吹込候二付伺

一高拾万石

頭取
阿部伊勢守

之上御纏者御式台へ飾、御馬印者鞆を取箱二入、御役人

引高壹万式千石

詰所江差置、其後も大手御勤中右之通致置候処、尚亦此

但中屋敷

度御役下申達出候者為御持被遊候御馬印・御纏共別段有

一高式万石

内藤山城守

之、御式台之方御飾附而已二候間、少々之吹込為差儀も

引高千五百石

有之間敷候間、左右江御飾附有之候者見分も宜旨申達候

但下屋敷

間、申合之上申達候処、御聞置暫過被入御聴候処、左候

一高百五拾石

小普請組
石原彦太夫

者先槻之通下座薄縁左右江飾付置候様被仰出候二付、御

但居屋敷

北本所石原外手町

普請方申合取計候様御役下江申談、御元々御広間向江申

右之通御座候、以上

談候

十二月

同年十二月七日

一石原御屋敷御組合辻番所御本高・御引高とも御届書出来

但、表通り間地之儀ハ御届ニ不及趣ニ相成候、依而

二付、御屋敷守江御渡可被成候処、御役方方差遣候様治

相認不申候事
御郡代方方御尋

左衛門殿被成御渡候間、則仙助方へ差遣候

享和元年十二月十七日

一 大手外固之節、割籠之儀迎ニ付此度各申合之上、左之通相極御元々江及懸合候処、左之附札ニ而挨拶有之、尚亦附札致遣候処存寄無之趣ニ付、治左衛門殿江も一卜通御咄申上、御番頭・御者頭江も為見置、以来書面之通被移置候様御元々江申談候

覺

一 正月元日爰許曉八時揃八半時出宅ニ付、割こ兩度分

内壹度分御番頭方下々迄割籠、御雇分下行、式度目

十人目付以上割こ、其以下并御雇之分共下行之事

御元々方附札

式度目割籠ニ及間敷事

御役方方尚亦附札

御上屋敷八時揃ニ候間、下々丸山九時頃方相揃候ニ付

其以前支度可致候間、今一応御勘弁書面之通被下度事

一同二日七時揃七半時出宅ニ付、壹度分御番頭下々迄惣

割籠、御雇之分下行之事

但、昼過ニ相成候得者十人目付以上割こ、其以下并

御雇之分共下行之事

一同三日七時揃七半時出宅ニ付、壹度分御番頭方下々迄

惣割籠、御雇之分下行之事

右、同日昼御退出後、一旦爰許江引取申候付丸山方出

組之面々上下共昼惣割こ、爰元方罷出候分上下共割こ

ニ不及候事

御元々方附札

朝出役之分、爰元江引取候者丸山方出組之面々たり共

昼割こニ及間敷候、御足輕以下丸山方相廻リ夕出役迄

被留置候者支度被下可哉之事

御役方方尚亦附札

朝御退出後外固メ引取、御非番小屋江相詰可罷在処、

万一喧嘩等御座候者御非番ニ而も御引受相成事故、幸

御屋敷程近ニ付一旦引取迄之儀ニ付、丸山方出組之

面々上下共昼支度者被成下度事

一同夕御謡初、月並御礼之節之通

但、月次御礼之節、御手人之分不殘割籠、御雇者下

行之事

一同六日寺社御礼、右同断

一玄猪之節、右同断

一三季其外惣献上之節、忝度分御番頭方下々迄惣割籠、

御雇之分ハ下行、忝度者御帳附以上割籠ニ不及、御足

輕小頭・十人目付右両役計割籠、其以下并御雇之分共

下行之事

一公家御対顔御返答之節、月次御礼之節之通

一同御懇走之節者十人目付以上忝度分割こ、其以下并御

雇之分共下行、忝度目者御番頭方下々迄惣割籠、御雇

之分下行之事

但、及暮候者十人目付以上割籠、其以下并御雇之分

下行之事

右之通御座候、已上

十二月

享和二壬戌年正月六日

一左之通大手御相番真田豊後守様御番頭与申合候旨、御番

頭被申届候間一卜通御達夫々江申談候

御交代并出火之節、御人数下座之儀往来混雜致候間、

以来御相互二都而下座致間敷旨

同月十三日

一左之通相調差出候様申来候間、左之請相認差出候間、及

御達候間承知具候様御留主居被申届候間、懸り之場ニ而

御役下江申談候

松平伊織殿御達

一明地、昼夜平常見廻之候事

一向寄江御成、御前夜見廻候事

正月十二日

御小人目付

大塩与市

右者明朝迄ニ御調書を以御城拙者共部屋迄御差出可被成

候、以上

請方左之通

一阿部伊勢守江御預一橋御門外四番明地、昼夜見廻之儀御

尋ニ付申上候

一朝六時、掛り下役之者相廻申候

一朝五時、掛リ之者相廻申候

一昼四半時、掛リ下役之者相廻申候

一夕八時、右同断

一夕七時、掛リ之者相廻申候

一夕七半時、掛リ下役之者相廻申候

一夜六時、右同断

一夜四時、右同断

一曉九半時、掛リ之者下役召連相廻申候

一曉七時、掛リ下役之者相廻申候

一明地御成并明地脇通御且御見通等之節、前夜別段見廻

等不申付候、尤右御成之節、一時早ニ出役申付御払ニ

而引取申候

右之通御座候、以上

御名家来

正月十三日

今川剛八

享和二年正月廿一日

一昨曉出火ニ付大手御当番中若殿様為御名代御詰被遊候、

御馬印式本共御先格之通御番所迄為御持被成候、然ル処

御曲輪内大火ニ者候得共御城風並茂宣ニ付、以来諸向御

防等御城内御繰込も有之候程之儀ニ候者、格別左も無之

候者先見合置候様被仰出候

同年二月三日

一左之通御留主居方達有之候間承知置、同所御屋敷守江も

以来其心得ニ而取計候様ニ可申談旨、治左衛門殿被仰聞

候間則申遣、同所御役下へも申遣候

石原御屋敷、小笠原様御相對替御抱屋敷之処、御家作

者勿論、土蔵・穴蔵・井戸・板塀・生垣・立木打取・

苗木植付・長屋庇・宮祠拜殿等都而、家作取建・取崩

シ・修復・繕等、聊之儀たり共不洩様可及御届旨、新

地御奉行長坂忠七衛様被仰渡候

同月四日

一左之通被仰出候間承知置、石原御屋敷守江申談候様被仰

聞候

石原御屋敷、天明六年九月小笠原主膳様御屋敷、此方

様江御相對替之節、同所御抱屋敷其俣御讓受ニ相成、

是迄御内々之事故右年貢地之処都而御小納戸纏取計候
処、此度御抱地公儀江御届ニも相成候事故、以来御年
貢代等御達之儀、同所御屋敷守方掛り御年寄中江直ニ
及御達候様

同月六日

一左之通御役場ニ而申合候処今日被仰出も有之、以後其通
取計候間承知呉候様御番頭被申届候

大手御番所御当番中、御同所通御・御成之節者御立寄
之程も難計候間、以来還御之節計、其以前同所面番所
迄之間屏風仕切之内不残取片付置候旨

享和二年二月十四日

一御目付松平伊織様方御呼出ニ付御城中之口迄罷出候処、
左之通被仰付候間左之御受書差出候間、夫々懸リ之者江
申談候様平助殿被仰聞候

一ツ橋御門外四番明地之内御預り場所、平日見廻方之
儀者是迄之通相心得弥等閑無之様、且又向寄御成之節、
御前夜時半ニ相廻別而入念可申旨、松平伊織様被仰渡

候段奉畏候、以上

二月十四日

御名家来
今川剛八

享和二年二月十六日

一左之通掛り之場ニ而御役下申達書付差出候処、加番等之
儀ニ付廻方之儀者御留主居江も及内談候処、存寄無之由
ニ付今日申達候ニ付、書面之通被仰付候間夫々申談候様
被仰聞候

此度御預四番明地見廻之儀、平日者是迄之通、御成御
前夜時半廻り互被仰出候間、原掛之者計ニ而者御当日
出役等も御座候間、左之通被仰付被下候様仕度奉存候、
以上

御成御前夜

一暮六時方明ケ六時迄時半廻り原掛り下役之者兩人ニ而
者難続奉存候間、御足輕方加番壺人罷出候様仕度、勿
論私共折々心付見廻り申度奉存候

但、提灯持御中間壺人ニ而者是又続兼候間、別段御
中間壺人罷出候様仕度奉存候

前条ニ付見廻リ蠟燭之儀者臨時相渡候様兼而被仰移置被
下候様仕度奉存候、此段御達申上候、以上

二月

御徒目付

享和二年二月十九日

一大手御門通御・御成之節、御番士平伏罷在候面々足袋相
用候哉与先達而御目付中様方御尋ニ付、平伏之御番士足
袋相用不申旨及御受候処、今度左之通御門御門江御達有
之候ニ付、承知置候様御番頭方被申届候

井伊兵部少輔様左之趣被仰渡候由、御目付松平伊織様
被仰渡候段御徒目付川村助左衛門殿被申渡候

一先達而御尋有之候両山并遠御成之節、平伏之番士足袋
相用候哉之旨御尋有之候処、相用不申候旨御受被申上
候、以来共弥其通相心得相用不申候様、仮令是迄家格
ニ而相用來候共、以来無用致候様相心得可申旨交代之
節も可申送旨被仰渡候

以上

享和二年二月廿七日

一左之通御番頭江申談候様治左衛門殿被仰聞候間、則御番
頭・御徒士頭江申談候

大手勤番高、御給人・御徒士是迄之通ニ而御給人拾人
詰・御徒士四人詰ニ被仰付候間、如何様ニ茂御間合七
可申候

但、出火之節、御間合兼候ニ付右之通被仰付候事
一前条ニ付勤番之者五日詰ニ候得者、十日詰切候者も有之
難儀可及候間、其所者御番頭申合申置候様御同人被仰聞
候

同年同月廿九日

一左之趣宣取計具候様御番頭頼ニ付、無抛趣申合之上、治
左衛門殿江申達候処、御聞濟之旨御番頭・御徒士頭江可
申談旨御同人被仰聞候間則申談候

大手勤番御給人拾人詰被仰付候ニ付、九人高二而六人
宛相詰五日詰ニ而者十日詰張候者も御座候ニ付、何卒
三人宛日々代合ニ被仰付被下度旨

但、御城使・御近習・御右筆者矢張五日詰之事

御徒士同断、七人高二而四人詰被仰付候ニ付、是又日々

三人宛代合被仰付被下度旨

享和二年三月十二日

一左之通被仰出候間、夫々江申談手筈致候様平助殿被仰聞候

大手御番所通御之節、御平伏場所へ是迄御提灯壺張御差出被遊候処、式張被差出候御並多ニ付、此方様ニ而も以來者、式張御差出被遊候旨

同月十三日

一左之通掛リ之場ニ而御役下申達書付差出候間治左衛門殿江差出候処、御移可被成旨被仰聞候間、則御者頭江も一卜通及通用候

覚

今度御預明地御成并通御・御目通之節以来、御前夜時半廻リ致候様被仰渡候ニ付、下役場江御足輕方加番壺人罷出候ニ付、右之節壺人分夜扶持被成下候様兼而被仰移置被下候様仕度奉存候、此段御達申上候、以上

三月十三日

御徒目付

享和二年三月十七日

一左之通勤番之御者頭江申談候様治左衛門殿被仰聞候

大手御当番之節、從御当番御目付様、御番頭御呼出有之砌、御者頭詰合壺人ニ付罷出候得者跡明キ候間、御者頭兩人之内申合罷越候様

同年四月十五日

一去三日御移有之候御屋敷坪数之儀為相吟候処、安永二年公辺御書出有之、其後天明八年五月同断御書出有之、右両様書面書拔候而御留主居江掛合、今日左之通書出候処御受取置、御留主居江御移可被成旨

覚

一御上屋敷

七千八百三拾四坪

一永御預地

百貳拾貳坪壺勺

右者御上屋敷南之方、御囲之内ニ御座候

一石原御屋敷

貳千五百八拾坪

右者本所十間川御屋敷、切坪御相对替代地共

中川飛驒守様御代官所

一 御抱屋敷 五百三十拾坪

右者石原御屋敷東之方、御围込ニ御座候

一 丸山御屋敷 五万九千七百五拾坪

一 十間川御屋敷 壹万四百式拾坪

右之通御座候、以上

四月 大御目付共

但、田畑村三浦源太屋敷之儀ハ先年御書出ニ相成候得共、寛政元年六月六日同村百姓文蔵与申者江讓渡之儀、御屋敷改筒井文右衛門様江御届相济候ニ付此度方ハ御書出無之事

享和二年四月十九日

一 左之通承知置、以来取計候様平助殿被仰聞候間御役下へ心得申談候

御門前通御・御成之節、御普請・御修復等有之節者其

日一日為相休、職人等家根へ揚候儀者縦令御成・還御、

御扨前少々之内ニ而も無用尔致候様

但、差急無抛御普請等者、不目立所ニ候者其節御役方ニ而勘弁之上、御扨前少々之内ニ候者取計も可有之旨被仰聞候

同月廿四日

一 御成其外表御医師出役之儀、本道・外科・針治之無差別打込先槻差出来候処、去月廿八日大手御番所へ御薬頂戴被仰付、表御医師当番之者江調合被仰付候節、糸井順庵儀ハ針治之事故右調合不被仰付候段被仰渡候、右ニ付而者以後御成出役之儀、外科・針治ニ而本科不兼者者差出申間敷哉之旨相伺候処、是迄打込罷出候事故差出不苦旨被仰聞候、左候者大手御番士江御薬頂戴被仰付候節、当番表御医師江調合被仰付候処、糸井順庵儀ハ針治之事故調合未被仰付候、此儀如何之儀与申上候処、順庵儀ハ針治被仰付置候得者上方調合被仰付候筋無之、乍併銘々本科行懸ケ可有之事ニ候得者、出役先若病人等有之候者其節者致調合、いか様御間不欠様可致勿論之事ニ候、既ニ仕来ニ而是迄迎も差出候事ニ候間、前々之通取計候様被

仰聞候

同年同月廿九日

一石原御屋敷方日本橋迄道法出来之由にて御元 \times 方左之通被差出候間、掛御目候上御留主居へ差遣候

覚

石原御屋敷方横山町三町目取附近

\times 間數六百四拾三間式尺

此町拾町四拾三間式尺

\times 足數式千百六拾五足

外二橋六間、此間數七百式拾壹間四尺

石原御屋敷方兩國橋通、横山町三町目曲り角迄拾町与

四拾三間式尺

惣 \times 式拾式町与五拾壹間

右之通御座候、以上

四月

享和二年五月十日

一大手御勤中外固 \times 被差出候節、御足輕以下者下行渡候処、

終日之節者一統難儀之趣、尤下馬ニ少々宛給物売有之候得共、御場所柄不行作之儀も有之旁に付、昨年十二月御元 \times 中以来割こ被下候事ニ相成候、尤三度弁当老度下行之積り然候処、先槻下行渡之儀を此度飯ニ而被下候事故、紙包ニ而差出候旨御元 \times 中被申聞候得共、是迄迎も其時ニ方右之通之節、箱ニ而出候儀も見受候処、今更紙包ニ相成候而者御中間同様ニ而も如何敷、何分勘弁被致候様及対談候得共、兎角箱ニ而差出候先格無之由ニ而断、先槻者免も角も何れ箱ニ而被下候様御役方取計具候様御者頭方も只官頼候ニ付、尚亦御元 \times 江再応及対談候処、右御役場限難取計、新槻之儀故御移有之候様致度趣ニ付、此間委細之訳合申達候処御聞置、今日至極尤ニ付以来箱ニ而差出候様御元 \times 申合取計候様被仰聞候ニ付、右之趣御元 \times 江申談為承知、御者頭江も申談置候

但、御雇之分ハ何度出候共是迄之通下行渡、并終日之

節下行割こ与交差出候儀ハ昨年十二月之処ニ委シ

一前条月次五節句も割こニ而差出候積り、昨年十二月御元

〆申合候処、右之節者以前之通矢張下行渡ニ而宜旨、御者頭中被申聞候間其段も御元〆江申談候
同年十月廿一日

一 左之通御番頭江申談候様平助殿被仰聞候間則申談、且御徒士頭勤番之御役下江も心得申談候

大手勤番之御徒士一統江、大手勤番所御提灯等被差出候者御掃除番之者以来御破損等無油断心附見廻り候様

享和二年十二月十日

一 昨日御留主居御城之口江御呼出ニ付罷出候処、御目付仙石治兵衛様左之御書付之趣被仰渡候趣、七郎右衛門殿被仰聞御書付写為御見被成候間、掛り之場ニて御役下へ申談候

明地御成御前日見廻之儀以来、原内之儀ハ可成丈往来之方方見通シ、并堀内改候儀も御鳥寄セ出来候間、右御鳥寄セ方見受候御鳥江障り不申候様仕、御前夜方御当日迄見廻之節も提灯数少々仕、尤御前日方原内掃除等仕候儀ハ及不申候、枯枝・芥等御座候而も不苦、乍

併自然御目障りニも可相成程之儀ニ候者、縦令少々御鳥地江相障り候共、其節者原内堀際迄も入候而取片付候様可致候、依之申達候事

同年同月十五日

一 左之通同具候様御番頭被申届候間、治左衛門殿へ相伺候処、松平左京太夫様通り相心得、半下座可仕旨御同人被仰聞候間則申談候

此度松浦壱岐守様御両役被仰合相濟候ニ付、大手御番所ニ而下座之儀、如何相心得可申哉伺

享和二年十二月廿二日

一 左之通致度旨御者頭中方兼々頼ニ付各申合候処、無抛趣ニ付今日相伺候処、差支ニも不相成候者其通り致候様被仰聞候間則御者頭江申談、御番頭江も為承知申談、且亦片口之者壱人御上屋敷仕組故、不残御者頭分ハ丸山仕組ニ被致候様御元〆江申談、勤番之御役下へも心得申談候、尤最初御番頭方も左之懸合有之候事
大手外固之節、惣体御上屋敷へ揃、夫方大手江罷越候

処、御足輕御雇も有之候ニ付不残大手へ直ニ為揃候間、
小頭者差遣置候得共寄親罷越居候者格別所ニも可相成
候間、御者頭計者外固之節計直ニ丸山方大手江罷越申
度旨

享和二年十二月十六日

一御預原御成并同所脇通御・御成之節、六時御供揃ニ候得
者前夕計見廻リ、当朝者未明之事故掃除等其外不行届ニ
付、享和元年十二月二日御留主居申合当朝見廻相止候処、
当二月十四日原見廻り方之儀ニ付、御目付松平伊織様方
被仰渡候儀有之候ニ付、猶亦此度御留主居申合左之通相
極、今日七郎右衛門殿江申達、庄兵衛江も其段申談候
原御成何時之御供揃ニ而も前夕・当朝両度見廻可申候
事
同所脇通御・御成之節、何時御供揃ニ而も当朝計見廻
可申事

但、還御前ニも見廻可申事

享和三癸亥年正月十四日

一左之通石原御屋敷守并同所御役下角蔵方申達候間各申合
候処、町御奉行所江申達御差図有之、且亦五郎右衛門江
も委細及掛合候間不苦旨及挨拶可然、依而御留主居江も
掛合之上今日七郎右衛門殿江相同候処、其通挨拶為致候
様被仰聞候間、則同所御役下江申遣候

石原御屋敷御長屋脇外手町境之処御成之節、葭簀ニ而
メ切候得共往古之竹矢来有之中絶候処、此度同所町人
共申合木戸附置候積、名主方町御奉行所江御届申上候
処、同所方御郡代方江御掛合之上、別段新規ニ取建候
ニも無之、竹を木ニ直シ候計之事故願書ニ不及、早々
取建候様御差図有之候ニ付取掛リ申度候へ共、此方様
ニ而者御故障之儀も無之哉町人共方申出候間、角蔵方
町廻り御出入五郎右衛門江掛合候処、御障リニも不相
成候者其通被成御挨拶候而も何之御氣遣成儀無之旨、
右御郡代附五郎右衛門申聞候旨

一前条其通り申渡趣者、御持場之事故木戸之事ニ付一切御
苦勞ニ懸ケ申間敷旨、町人共方一札取置候様角蔵江申遣

候様御役下江申談、御留主居江も相咄置候

享和三年閏正月十二日

一左之通及御達候間承知呉候様御留主居江も相咄置候

御普請方御役所江御呼出ニ付罷出候処、小川町加藤勘

助様脇石橋、幅狭候間継石致候様被仰渡候、然ル処同

所下水縁石等者近来道繕御組合場所ニ候得共、右石橋

之儀者宝曆十一年水野和泉守様方一作切御拵被成候儀

ニ而屋敷持場并組合場所ニ無之候、尚亦取調之上可申

上旨及御答候

但、石橋一件天明三年九月日記ニ有之

同月廿三日

一去十二日御尋有之ニ付、同十四日御普請方御役所へ左之

通差出候旨御留主居被申届候

口上之覚

此間被仰渡候小川町神保小路・広小路組合道脇場所之

内、加藤勘助様御屋敷脇横下水ニ懸り有之候石橋仕足

之儀、石垣等者組合之心得ニ罷在候得共、石橋者加藤

勘助様御持与心得罷在候、右石橋ニ継足有之候石橋之

儀者、是迄損シ候節者佐山左門様ニ而御修復御座候由、

依之石橋之儀者組合ニ而者無之心得ニ罷在候、此段申

上候、以上

閏正月十四日

同年二月九日

一左之通及御達候間承知呉候様御留主居被申届、七郎右衛

門殿方御移も有之候間、御役下江心得申談候

御普請方御役所方御呼出ニ付罷出候処、小川町一ツ橋

通、加藤勘助様・佐山左門様御屋敷角横切下水石橋之

儀、先達而御尋ニ付御組合御持場ニ無之旨申上候処、

下水・石垣普請等之節者、石橋等取除不申候而者難相

成儀、其上勘助様・左門様御屋敷御組合内之儀ニも有

之候間御組合中申談、以来御持場等相心得候様御普請

方増田源三郎殿被申渡旨

御名家来

今川剛八

享和元年 諸達諸届

口上之覚

私悴大八、実父土井大炊頭様御家来下総国古河ニ罷在候
小林与兵衛与申者病氣ニ付、為対面今申刻出立仕候、此
段宜被仰達可被下候、以上

二月二日

高橋源四郎

口上之覚

御広敷番之頭佐支配伊賀衆覚野与市与申者、内縁茂御座
候ニ付私末女同人妻縁談申合度奉存候、此段奉伺候、以
上

二月九日

関喜右衛門

但、白保半切認、上包半紙折掛ケ、上二名計

口上之覚

私悴大八儀、先達而奉願、実父土井大炊頭様御家来下総
国古河ニ罷在候小林与兵衛与申者病氣ニ付罷越候処、用
事相济今日帰着仕候、此段宜被仰達可被下候、以上

二月十九日

高橋源四郎

口上之覚

右之者兄兵橘儀、御意書ヲ以遠慮被仰付、御機嫌之程奉
恐入差扣奉伺候段申達候間、此段御達申上候、以上

二月廿二日

若殿様

御小性頭共

口上之覚

磯野治兵衛
右之者、先達而奉願上候妻今日引取、婚姻相整申候段申
達候間、此段御達申上候、以上

二月廿六日

斎藤貞兵衛

口上之覚

私三男峯之助儀、御持筒頭安部信濃守様御組同心山本与
左衛門与申者、内縁茂御座候ニ付養子差遣申者奉存候、
此段奉伺候、以上

二月十一日

斎藤要助

但、白保半切認、上包半紙折懸ケ、上二名計

口上之覚

清水捨藏

右之者、親為右衛門大病ニ付看病引仕度之旨申達候、此
段御達申上候、以上

二月十六日

若殿様

御小性頭

口上之覚

私召仕之女今辰刻出産女子出生仕候、依之御定式之通血
忌引仕候、此段宜御申達可被下候、以上

三月八日

高束喜内

口上之覚

小津見左兵衛

右之者、実父清水庄左衛門於御在所病氣ニ付、為対面罷
越申度段願之通被仰付候ニ付、箱根御関所御留主居通手
形之儀相願候間、此段被仰移可被下候、以上

三月九日

斎藤貞兵衛

口上之覚

海塩七歳

右之者二女病氣之処、養生不相叶今卯中刻病死仕候、七
歳未滿ニ付三日之遠慮引仕候旨申達候間、此段御達申上
候、以上

三月九日

若殿様

御小性頭

口上之覚

右之者、実父清水庄左衛門儀於御在所病氣ニ付、為対面
罷越申度旨願之通被仰付候ニ付、今未刻福山表江出立仕
候段申達候間、此段御達申上候、以上

三月九日

斎藤貞兵衛

口上之覚

小西周兵衛

右之者妻今暁子刻出産女子出生仕候、依之御定式之通血
忌引仕候段申達候間、此段御達申上候、以上

三月十日

百々順助

口上之覚

清水捨蔵

右之者親為右衛門病氣之処、養生不相叶今卯刻病死仕候、依之御定式之通忌服受候旨申達候、此段御達申上候、以上

三月十一日

若殿様

御小性頭

口上之覚

私儀、惠教院様御新葬騎馬御供被仰付候処、此節痔疾不出来ニ付乗馬難仕奉存候、依之奉恐入候得共駕籠御供御免被仰付被下置候様奉願候、此段宜被仰達可被下候、以上

三月廿六日

服部九十郎

但、本文痛所ニ付步行ニ而御供仕、馬者為牽候而も苦ケ間敷哉之旨問合之処、御役場切ニ難及挨拶候ニ付御内々伺候処、步行御供之儀難相成候旨被仰聞候間、外ニ同役等も無之、忝人勤頼合候者無之、旁如何様ニも

仕御供致候様被仰聞候間其段及挨拶候処、無扨本文之

趣相願呉候様頼ニ付取計相濟申候事

口上之覚

長沼七郎

右之者甥倉品市郎助悴市次郎儀、於御在所去十二日病死仕候段告来候処、日数相立候ニ付御定式之通今一日之遠慮引仕候旨申達候間、此段御達申上候、以上

三月晦日

百々順助

口上之覚

私居家家根大破ニ相成候ニ付此度葺替申候、先達而瓦葺之儀被仰出茂御座候得共、暫之内茅葺ニ仕度奉存候、以上

四月二日

森戸全蔵

口上之覚

清水捨蔵

右之者母方之祖父、三田豊岡町ニ罷在候浪人荒川与四郎与申者今卯上刻病死仕候、依之御定式之通忌引仕候旨申

達候間、此段御達申上候、以上

四月十日

若殿様

御小性頭共

口上之覚

私悴専之丞儀、昨年拾五歳ニ罷成候ニ付袖留差遣可申処、故障之儀御座候ニ付延置申候、此節袖留差遣申度奉存候、此段宜被仰達可被下候、以上

四月十六日

山中左男路

但、粘入半切ニ認、上紙半紙折懸ケ、上ニ名計

口上之覚

私儀此度拝領屋敷江家作仕候、先達而瓦葺之儀被仰出も御座候得共、暫之内茅葺ニ仕度奉存候、以上

四月廿四日

服部半助

口上之覚

十間川通川浚御普請取掛候ニ付、来廿七、八日頃迄之内右川内ニ切船留致し、凡日数四十日余も差留候段、亀戸天神橋御普請小屋場若林礒八郎様方御達御座候、此段御上候、以上

四月廿四日

萩原仙助

口上之覚

私儀、此度内願之通岩崎東内跡屋敷地面拝領被仰付難有仕合奉存候、右ニ付仮形ニ家作仕候処内外難渋仕候、依之御時節柄奉恐入候得共、何卒相応之拝借金被仰付被下置候様奉願候、此段宜被仰達可被下候、以上

四月廿五日

服部半助

一前条是迄ケ様之先格も無之候得共、寛政六年十一月被仰出も有之、^(更)旁血地之儀故苦ケ間敷各申合伺候処、不苦為相願候様被仰聞候

口上之覚

私儀、明廿八日御用之儀御座候間可罷出候処、腰痛ニ而難罷出候間、名代平野安次郎相頼差出申候、此段御届申上候、以上

四月廿七日

頭役

高館久太平

口上之覚

私儀、明廿八日御用之儀御座候間可罷出候処、持病之痔

疾二而難罷出候間、名代海塩又蔵相頼差出申候、此段御達申上候、以上

四月廿七日

長坂儀兵衛

口上之覚

小林十蔵

右之者、明廿八日御用之儀御座候間可罷出之所、病氣二付難罷出為名代古川市郎罷出申候段申達候間、此段御届申候、以上

四月廿七日

御番頭共

口上之覚

私儀男子無御座候二付、養子仕奉報上御厚恩度奉存候得共、御家中二相応之者無御座候二付、岩木内膳正様御家来中嶋中方二罷在候厄介之甥小林演右衛門与申者養子仕度奉存候、及内談候而も苦間敷哉、此段奉伺候、以上

五月二日

萩原佐左衛門

但、粘入半切認、上包半紙折懸ケ、上二名計

覚

去十月駒込新道御組合辻番所御持場之内ニ捨有之候女子、同十一月築地南飯田町家主文四郎店傘屋十五郎江被遣候処、当四月十三日瘡瘡相煩、昨朔日四時病死仕候旨申達出候間、此段御達申上候、以上

五月二日

手嶋忠兵衛

口上之覚

小西周兵衛

右之者、父方之伯父松平下総守様御家来御在所ニ罷在候寺嶋善右衛門与申者、去月廿五日病死仕候段告来候処、(他名相続二付御定式之通半減残日数忌引仕候段、昨夜申達候処及深更候間今朝御達申上候、以上

五月四日

三富甚左衛門

口上之覚

小津見左兵衛

右之者去月十五日夜福表乘船仕候処、雨天二付出帆無御座候間其俣乗組罷在候処、同廿日出帆、同廿二日暮時過大坂御蔵屋敷江着船、即刻出立可仕候処、同夜伏見江之

出船無御座候ニ付、翌廿三日七時過出船仕、道中無滞昨夜亥中齋歸着仕候段、申達候処及深更候ニ付今朝御達申上候、以上

五月五日

六浦団次

但、去月十二日ニ而御暇之日数及廿日、翌十三日出立可仕候之処、便船無之ニ付其段及御達候、御聞濟之上同十五日福山表出船之趣同役中方之添状ニ申来、口上ニ而一卜通申達候

口上之覚

私養子大八儀、先達而御目見被仰付難有仕合奉存候、然ル処不熟ニ付奉恐入候得共離縁仕、里方本多中務太輔様御家来佐藤左十郎与申者方江今日差戻申候、此段宜被仰達可被下候、以上

五月六日

高橋源四郎

但、源四郎養子離縁度々之儀、其上御目見濟未問も無之候ニ付、例文江其訳を認込可然各申合之上、右之通認入為差出候事

覚

駒込新道御組合辻御番所御持場之内、去十月捨子御座候節之御割合御出銀不残相集リ候間、今日御勘定所江辻番掛り藤田忠助方相納申候、此段御達申上候、以上

五月九日

手嶋忠兵衛

医術申合会頭、岡西養亭隱居仕候後中絶仕候処、此度山田玄瑞会頭ニ仕相始候ニ付、此段御届申上候、以上

五月九日

御医師共

口上之覚

亡父玄碩拝領仕候御紋附類、私着用仕度奉願上候、以上
五月十一日
吉村養碩

口上之覚

本所石原御組合辻御番所廻リ場梅堀通川浚中、右場所之内江三ヶ所水杭為御打候ニ付、番人共心附見廻リ万一右杭拔取候者も有之候者召捕置其段御届可申旨、御郡代方

鈴木正八与申仁被申置候二付、番人共尚亦心附見廻候様申渡、右之趣御組合御年番内藤山城守様衆江及通達候、此段御達申上候、以上

五月十一日

岩崎東内

口上之覚

私悴忠三郎儀出生之砌虚弱御座候処、追々丈夫ニ罷成候二付、其段先達而御達申上御聴届被成下難有仕合奉存候、此上嫡子ニ奉願候而も苦間敷哉、此段奉伺候、以上

五月十三日

加茂清左衛門

但、粘入半切認、上包半紙折懸、上二名計

口上之覚

清水捨藏

右之者、先達而奉願上候母并弟老人・妹忒人今日引取候旨申達候、此段御達申上候、以上

五月十五日

若殿様

御小性頭

口上之覚

先達而奉願候私養子演右衛門儀、今日引取三女与婚姻相

整申候、此段宜被仰達可被下候、以上

五月十六日

萩原佐左衛門

口上之覚

大御番頭菅沼伊賀守様御支配大久保彦太夫様、来十九日鎗術御見分御座候処、私儀御同門ニ付為御打太刀罷出候様、山本嘉兵衛様被成御頼候間罷出候而も苦ケ間敷哉奉伺候、以上

五月十七日

海塩又藏

但、今日御日柄ニ候得共縁談等之伺書与違、去丑年四月之例も有之、并明日者御祝日差向之事故伺之上今日差出遣候事

口上之覚

松平伊予守様御屋敷内ニ而中間体之者縊死有之候処、御家来之者ニ無御座候ニ付公儀御届被成、御檢使相濟申候、然ル処御組合辻御番所脇ニ而三日晒候様御差凶ニ付、此方様御年番ニ御座候間差出候節立会具候様、伊予守様御屋敷守山崎兵助与申者方申越候ニ付、則其節立会罷出申

候、此段御達申上候、以上

五月廿一日

萩原仙助

一前条之節、御役下七右衛門ニも立会候旨

口上之覚

先達而奉願厄介ニ仕置候私実方之叔母病氣之処、今辰中刻病死仕候、依之御定式之通忌引仕候、此段宜被仰達可被下候、以上

五月廿三日

飯田金左衛門

口上之覚

去廿一日松平伊予守様御屋敷ニ而致縊死候中間体之者、御組合辻番所脇ニ而三日晒候様御差図御座候処、昨日迄ニ付今日安藤対馬守様江御伺被成候処、取捨候様被仰渡取片附相濟候旨伊予守様御屋敷守方申越候間、此段御達申上候、以上

五月廿四日

萩原仙助

口上之覚

養父養亭拝領仕候御紋附類、私着用仕度奉願上候、以上

五月廿八日

岡西栄玄

但、粘入半切認、上包半紙折懸ケ、上三名計

口上之覚

右之者女房今辰中刻出産女子出生仕候処、虚弱ニ付即刻病死仕候、依之御定式之通血忌引仕候旨申達候、此段御達申上候、以上

六月五日

茂上有助

但、遠慮引之儀も一卜通及御達候事

口上之覚

石原御屋敷裏通此度道繕御座候ニ付、同所御長屋下通新規下水堀候旨、右ニ付下水しからミ往来江附候方、御郡代方御取繕御座候ニ付、御屋敷江附候方、此方様ニ而仕候様御郡代方鈴木正八被申聞候ニ付、此段御達申上候、以上

六月十一日

岩崎東内

但、七月十四日二十間川方も達出候

口上之覚

松平伊豆守様御家来岩上九助妻病氣之処、養生不相叶今
曉丑刻病死仕候段申来候、右者私養方妹之続ニ付御定式
之通忌服受申候、此段宜御申達可被下候、以上

六月廿二日

渡辺三太平

口上之覚

私悴齋左衛門儀病氣之処、養生不相叶今朝卯上齋病死仕
候、依之御定式之通忌引仕候、此段宜被仰達可被下候、
以上

六月廿六日

中川宗左衛門

口上之覚

私儀養子仕度奉存候処、御家中内相応之者無御座候ニ付、
松平備前守様御家来佐久間勘兵衛四男宣次郎与申者養子
ニ仕度奉存候、及内談候而も苦ケ間敷哉、此段奉伺候、
以上

七月三日

福田清蔵

但、給人以上養子願文ニ実子或者男子無御座候与認申

候事ニ有之候、清蔵儀無足之事故、願文ニ准シ伺書等

茂一卜通ニ而可然哉伺濟

覚

葭屋与兵衛

右者十間川御屋敷前通今度川浚御普請ニ付、此方様樋口
出張候処切縮并関板取払被仰付候処、宜出来仕候ニ付相
応之御酒代被成下候様仕度奉願候、此段御達申上候、以
上

七月三日

高橋七右衛門

覚

一品々書略ス

右者一昨朔日夜八半時頃与風目覚候処、盗賊入込候様子
ニ付召捕可申与奉存候処、何方江歟逃去候ニ付被盜取候
品も可有之哉与相吟候処、右拾四品程被盜取候、尤其節
書付等入置候小箆筒壺ソ不相見候ニ付相吟候処、同所路
次口ニ其俣有之候ニ付取入置申候、尤家根伝ニ伝入り居
宅中庭江下り、囲戸錠切置候而入込候趣ニ御座候、此段

町役人共方町御達行所江申上候旨申聞候間、此段御達申上候、以上

七月三日

笹山道伯

口上之覚

私悴彦太郎儀、病氣二付先達而奉願、里方大久保山城守様御家来江尻縫貞与申者方江為養生差遣置候処、此節全快仕候二付今日引取申候、此段宜被仰達可被下候、以上

七月七日

木村吉右衛門

口上之覚

山本喜惣次

右之者病氣之処、養生不相叶今曉丑上刻病死仕候、此段御達申上候、以上

七月八日

服部九十郎

口上之覚

私妻病氣之処、養生不相叶今己刻病死仕候、依之御定式之通忌引仕候、此段宜被仰達可被下候、以上

七月八日

木村吉右衛門

口上之覚

一線香

一台

右者来十二日酉閣院様御靈前江献備仕度奉伺候、以上

七月十日

山村仁左衛門

口上之覚

榎村歛吾養母之叔母、大久保山城守様御家来大塚新六与申者妻病氣之処、今辰齋病死仕候、依之御定式之通忌引仕候段申達候間、此段御達申上候、以上

七月十一日

御供番頭共

口上之覚

林安兵衛

右之者母方伯母、大嶋多四郎妻於御在所去月十六日病死仕候段告来候二付、御定式之通忌引可仕候処、日数相立候二付今日遠慮引仕候段申達候、此段御達申上候、以上

七月廿一日

三富甚左衛門

口上之覚

於御在所私母方之従弟、津之下村光円寺隱居界碓院与申

者去月二日病死仕候旨告來候処、日數相立候ニ付今一日之遠慮引仕候、此段宜被仰達可被下候、以上

七月廿二日

荒木忠太平

口上之覺

私儀今日御談御用可罷出候処、差掛病氣ニ付難罷出候間為名代楯岡斧藏差出申候、此段御届申候、以上

七月廿五日

岩崎東内

口上之覺

私悴演右衛門儀御目見相濟候ニ付、以來五節句出仕為仕且非常之節者御寄場江差出申候、此段宜被仰達可被下候、以上

八月五日

萩原佐左衛門

但、粘入半切ニ認、上包半紙折懸、上二名計

口上之覺

私養父退仰儀大病ニ付、難見放奉存候間看病引仕度奉存候、此段宜被仰達可被下候、以上

八月五日

渡辺三太平

口上之覺

田中新左衛門

右之者女房不熟ニ付離縁仕、里方浅草山谷町越後屋半兵衛与申者方江今日差戻申候旨申達候、此段御達申上候、以上

八月五日

若殿様

御小性頭共

口上之覺

私儀、去月中旬方暑邪ニ而引込罷在候処、此節持病之痔疾差起、成田玄良薬服用仕候得共兎角同篇ニ而難儀仕候、大手勤番御人少之勤場永々引込罷在奉恐入候、何卒以御憐愍右勤番御免被成下候様奉内願候、以上

八月九日

前原亀吉

但、粘入半切認、上包半紙折懸ケ、上二名計

口上之覺

明十五日御用之儀御座候間悴召連可罷出候、痛所御座ニ付名代横山喜一郎相頼差出申候、此段御届申候、以上

八月十四日

萩原佐左衛門

口上之覚

御広敷番之頭御支配伊賀衆覚野与市与申者、内縁茂御座候二付右同人姉悴鉄五郎妻再縁談申合度奉存候間、此段奉伺候、以上

八月十六日

関喜右衛門

覚

駒込片町阿部伊勢守頭取辻番所御組合之内江、高六拾石木崎政八郎殿此度新規御組入被成候旨被仰渡奉畏候、尤政八郎殿御家来不罷出候二付、頭取方相達可申旨被仰渡候段、於辻番所山本丈右衛門殿辻番掛藤田忠助江被申渡候間、此段御達申上候、以上

八月十八日

手嶋忠兵衛

口上之覚

中嶋要助

右之者、先達而奉願上候養子延五郎今日引取、二女与婚姻為相整候段申達候、此段御達申上候、以上

八月廿一日

服部九十郎

口上之覚

悴周山儀医術為修行奉願上、私在番中召連罷出、町医師鈴木良智与申者方江差遣置追々伝法等相濟、誠以御威光執行為仕難有仕合奉存候、何卒此上御目見被仰付被下置候者重疊難有仕合奉存候、併年頃ニも罷成候二付於御在所出仕等為仕候ハ、改而相願候者奉恐入候得共、此段不苦思召候者内達宜被仰達可被下候、以上

八月廿二日

馬屋原玄益

口上之覚

去春中奉願候私孫金次郎久々病氣罷在候処、今以相勝不申候二付、里方井上壺岐守様御家来安田源太夫与申者方江緩々養生為仕度候間、離縁仕呉候様申聞候二付任其意離縁仕、同人方江今日差戻申候、此段宜被仰達可被下候、以上

八月廿三日

中川宗左衛門

口上之覚

私儀、丸山御屋敷拝借御長屋江今日引越申候、此段宜被仰達可被下候、以上

八月廿三日

岩崎東内

覚

御門下番

藤八

右者去廿日風雨之節、御屋敷内江相流込候ニ付水掃等出情仕相働申候、依之少分之御酒代被成下候様仕度奉存候、此段御達申上候、以上

八月廿四日

十間川

御徒目付

口上之覚

私拝領屋敷裏之方空地、御用ニ茂無御座候者別紙絵図面朱引之通拝借仕度奉願候、以上

八月廿八日

高束喜内

但、再三拝借地願有之、伺之趣別帳ニ有之

口上之覚

私儀段々結構被召仕冥加至極難有仕合奉存候、然ル処及老年、近年病身ニ罷成勤仕無覚束候ニ付、勤奉願悴齋左

衛門儀如何様ニ茂被召仕為奉報御厚恩度御内伺申上候内、

齋左衛門儀病死仕、齋左衛門存生之内奉願候養子金次郎儀是又病氣ニ付無拋離縁仕、当時二才ニ罷成候孫老人之外、家内勿論親類も無御座、私儀追々老衰仕、孫成長迄御用立候様取立も難届候、前文ニ申上候通外ニ世話人も無御座候ニ付、齋左衛門後家私養女ニ仕右娘江養子仕、孫久藏儀直ニ順養子奉願、御用立候様取立為奉報御重恩度奉願度候、此上以御憐愍御聞濟も可被下哉、右之段内伺仕候、以上

九月三日

中川宗左衛門

但、粘入半切認、上包半紙折掛ケ、上二名計

口上之覚

私悴彦太郎儀御目見相濟候ニ付、以来月次五節句出仕為仕、且非常之節者御寄場へ差出申候、此段宜被仰達可被下候、以上

九月六日

木村吉右衛門

但、粘入半切、上包半紙折懸ケ、上二名計

一吉右衛門定居勤、依而月次与申儀入候事也

口上之覚

私悴宣治郎儀、何卒以御憐愍御徒士江被召仕被下置候様
奉内願候、以上

九月六日

福田清藏

但、粘入半切認、上包半紙折掛ケ、上二名計

覚

御屋敷前通り関板御修復之節、足土并御屋敷内所々不陸
之場所も御座候ニ付、道繕之儀被仰付被下度、幸此度本
所辺川々浚土御入用ニ御座候者、橋本屋平左衛門手合ニ
而御世話可仕旨申出候、此段御達申上候、以上

九月六日

石原
御徒目付

口上之覚

私儀家内多ニ付屋敷地面拝領仕、家作仕度奉存候内願宜
被仰達可被下候、以上

九月十六日

松田良右衛門

但、粘入半切認、上包半紙折懸、上二名計

一此願方ニ付伺有之、別帳ニ委し

口上之覚

私儀、先達而奉願候葉湯三廻り今日切候処未睨与不仕候
間、此上二廻り罷越申度奉存候再願宜御申達可被下候、
以上

以上

九月十六日

青木勘之丞

但、籠半切、上包なし

口上之覚

右之者、先達而奉願候葉湯三廻り今日切ニ御座候処未睨
与不仕候間、此上二廻り罷越申度段申達候ニ付、此段御
達申上候、以上

九月十七日

若殿様
御小性頭

覚

本所辺川々浚土御入用ニ御座候者、橋本や平右衛門手合
ニ而御世話可仕旨先達而及御達候処、此節右土無御座候
段先方御役人中被申聞候旨、平右衛門申達候間、此段御

達申上候、以上

九月十八日

口上之覚

先達而奉願候悴彦太郎妻今日引取婚姻相整申候、此段宜被仰達可被下候、以上

九月十八日

木村玄右衛門

但、鼠半切、上包なり

口上之覚

吉沢源藏

右之者、先達而奉願上置候葉湯日数中ニ者候得共、快方ニ付明日当番方出勤仕度段申達候、此段御達申上候、以上

上

九月廿一日

若殿様
御小性頭共

覚

一品書略ス

何品

右之通、去十四日夜私下男六介与申者取逃仕候、此段御

届申上候、以上

九月廿一日

口上之覚

中西庄藏母方之叔母、牧野越中守様御家来中村松太郎与申者叔母病氣之処、今午中齋病死仕候、依之御定式之通忌引仕候段申達候ニ付、此段御達申上候、以上

九月廿三日

御供番頭共

覚

私拝借御長屋横手拝借地之内江二間半二三尺之庇、手前家作仕度奉存候、依之御見分之儀奉願上候、以上

九月廿四日

鈴木作藏

覚

大岡主膳正様御家来

相原条左衛門方方

侍壺人

中間壺人

右者近火之節差越候間御門御改置可被下候、以上

十月六日

上下格

木村吉右衛門

覚

三橋重兵衛

来十日徳輪様三十三回御忌二付、御霊前江右之者献備物
仕度奉伺候、以上

十月七日

御小性頭共

但、粘入半切、上包半紙折懸、上二御役名計

口上之覚

私儀、以御憐愍養子仕度段内伺仕候処、御聞届被成下冥
加至極難有仕合奉存候、然ル所御屋敷内相応之者無御座
候二付、京極能登守様御家来小川勝太郎与申者内縁も御
座候間、同人弟寛八郎養子仕度奉存候、及内願候而も苦
ケ間敷哉、此段奉伺候、以上

十月十一日

中川宗左衛門

但、粘入半切認、上包半紙折懸、上二名計

覚

元飯田町

家主 吉兵衛店

伊三郎

右之者出火之節欠付罷越候間、不限昼夜御門御通被下候
様被仰移置可被下候、以上

十月十二日

御医師給人
神谷栄俊

口上之覚

一ツ橋様御家来村田長運与申者内縁も御座候二付、私姉
右同人悴清哲ニ縁談申合度奉伺候、此段奉伺候、以上

十月十九日

小林金次郎

口上之覚

祖父以来拝領仕候御紋附類、私着用仕度奉願上候、以上

十月十九日

堀江吉重郎

但、何れも粘入半切、上包半紙折懸、上二名計

覚

石原御屋敷裏御門前通、水掃不宜候二付新規下水出来仕
候様御郡代方小屋場方御達御座候間、此段御達申上候、
以上

十月廿七日

萩原仙助

口上之覚

先達而奉願置候浅井瀬兵衛、昨夜私方江引取申候、此段宜被仰達可被下候、以上

十月廿九日

高橋常七

口上之覚

一昨二日昼八時過母儀者親類方江罷越、私儀者御屋敷内江罷出七時過帰宅仕候処、ノリ御座候水懸口明有之候処、怪敷体ニ相見申候ニ付相吟候処、左之通紛失仕候但、表木戸入口戸二ヶ所共錠前其俣ニ而御座候

一品書爰ニ略ス

右之通ニ御座候、以上

十一月五日

御元ノ支配
木村新吉

覚

石原御屋敷新規下水取払候ニ付、代合内証之儀町廻り五郎右衛門相願候間、相渡候様被仰移可被下候、以上

十一月九日

萩原仙助

口上之覚

最上監物様御屋敷表御長屋前通下水水掃之儀、此方様埋樋江落シ候様被成度、且右ニ付以来埋樋御修復之節者、御出銀等御差出可被成旨彼方様御役人中ノ申来候間、此段御達申上候、以上

十一月七日

萩原仙助

口上之覚

私悴金次郎儀、当年拾五歳罷成候ニ付袖留遣申度奉存候、此段宜被仰達可被下候、以上

十一月十一日

高木和十郎

但、病氣引込中ニ候得者、去七日御役方限同濟之事故為差出候事

口上之覚

私次男助市儀、水野出羽守様御家来井沢安次郎与申者内縁茂御座候ニ付、同人方江厄介ニ差遣申度奉存候、此段奉伺候、以上

十一月十一日

早川伴右衛門

但、右兩様粘入半切、上包半紙折懸、上二名計

口上之覚

私儀病氣引込中二者御座候得共、先達而奉願候養子醇二儀為看病今日引込申候、此段宜被仰達可被下候、以上

十一月十一日

松田良右衛門

但、去九月内々問合、勝手次第与申談一卜通申達置候

事

口上之覚

駒込新道辻番所御組合之内、柴田勝次郎様方申来候者、
弥門様御存生之内兼而御願被置候通、此度御跡式無御相違御嫡子勝次郎様江被下置候旨為御知申来候間、此段御達申上候、以上

十一月十一日

手嶋忠兵衛

覚

石原御屋敷新規下水受負代金拝借之儀先達而及御達候処、最早出来仕候ニ付本金相渡候様被仰移可被下候、以上

十一月十五日

萩原仙助

覚

小石川築地辻番所御組合之内沼津源助様、当四月二条御番御登被成候様、御病氣ニ而御養生御叶不被成、去ル七日卯上齋御病死被成候旨、御嫡子政之助様御家来方為御知申来候間、此段御達申上候、以上

十一月十六日

手嶋忠兵衛

口上之覚

本所浜屋敷ニ罷在候御郡代附町廻り五郎右衛門与申者、是迄御持場之儀ニ付懸合等仕候、此度本所辺一円道御普請迄而者御組合ニ成候趣御沙汰も御座候ニ付而者、右御用向掛合等御便利之儀も可有御座候間、何卒御出入ニ被仰付被下候様御達申上候、以上

十一月廿一日

萩原仙助

但、御出入ニ被仰付候節者御目錄被成下候儀有之、同

十二月御出入被仰付候処、御目錄之儀者御留主居出組ニ而遣候事

口上之覚

先達而奉願候私未女、今日長坂東助方江差遣婚姻相整申候、此段宜被仰達可被下候、以上

十一月廿五日

柴山彈之進

口上之覚

今曉出火二付、大手御人数并三町御人数被差出候二付而者兼而申合置、早速驅着可罷出処心得違仕、御用番大御目付衆方催促ヲ受罷出及遅刻候段、蒙御尋奉恐入候、以上

十一月廿五日

池田安平

森戸源八

磯部喜兵衛

今村力蔵

口上之覚

私悴力蔵儀伺之通差扣被仰付、於私茂御機嫌之程奉恐入候、依之奉差扣伺候、此段宜被仰達可被下候、以上

十一月廿七日

今村多助

口上之覚

松田良右衛門病氣之処養生不相叶、今曉寅齋病死仕候段悴醇二方申届候、尤右同人御定式之通忌引仕候段申達候二付、此段御達申上候、以上

十二月二日

齋藤貞兵衛

口上之覚

昨夜四時前怪敷匂ひ仕候二付罷出所々相吟候処、隣家佐久間順齋家根二火氣相見候二付、早速順齋江茂為相知打消申候、然ル処私下男仙次郎与申者暮時方罷出五時過帰宅仕候二付、何方江罷越候哉与相尋候処、申口相分兼候二付御中間小頭相頼番人附申候、何卒右之者御吟味被成下候様奉願上候、以上

十二月七日

久保田伴右衛門

十二月八日

一左之通御取次中方被申届書付被差出候処、無抛儀二付申合之上御元々江も及内談、平助殿江差出候処御移可被成旨被仰聞候

口上之覚

一手燭

壹本

但笠共

右者仮御広間之節非常為御入用受取置申候処、何卒以來共受取置申度奉存候、此段被仰移可被下候、以上

十二月

御取次共

但、一体者天明年中ニ相渡居候処、何之頃歟紛失致候趣ニ付是又御元々江及内談候処、左候者当勤之衆方捨リ証文差出候様被申聞、其段御取次江申談、一卜通平助殿江御咄申上候

口上之覚

早川伴右衛門

右之者先達而奉願上候次男助市儀、水野出羽守様御家来井沢安次郎与申者方江今日厄介ニ差遣候段申達候間、此段御達申上候、以上

十二月十一日

藤田与一兵衛

口上之覚

今日悴寛八郎儀、初而御目見被仰付候間私召連可罷出処、

此間中方寒熱仕難罷出候間、名代猶村半平相頼差出申候、以上

十二月十五日

中川宗左衛門

口上之覚

私妹、御鳥見磯田弥三郎与申者内縁茂御座候ニ付、右同人方江養女ニ差遣申度奉存候、此段奉伺候、以上

十二月廿一日

森戸兵橘

但、粘入半切認、上包半紙折懸、上二名計

口上之覚

親勝右衛門拝領仕候御紋附・御小袖・御袷・御帷子・麻上下、悴惣吉江着用為仕度奉願候、以上

十二月廿五日

小室久次郎

但、粘入半切、上包半紙折懸、上二名計

口上之覚

松田醇二儀未忌引罷在跡式不被仰付候得共、当暮甚難涉仕候ニ付、何卒相応之拝借金被仰付被下置候様相願候間、此段御達申上候、以上

十二月廿五日

三富甚左衛門

覚

小石川築地辻番所御組合之内深津政之助様、一昨廿七日御亡父源助様御跡目被仰付候旨申来候間、此段御達申上候、以上

十二月廿九日

手嶋忠兵衛

享和二壬戌年

覚

私儀来六日勢州為御代参罷越候処、御貸人不残手前雇二仕度奉存候、此段宜被仰達可被下候、以上

正月三日

山本忠蔵

口上之覚

高橋源四郎病氣之処養生不相叶、今午中齋病死仕候段縁者平野文之進申達候間、此段御達申上候、以上

正月十五日

三富甚左衛門

口上之覚

高橋源四郎奉願置候養子郷左衛門儀、今日養家へ引移申

候旨縁者平野文之進方申達候間、此段御達申上候、以上

正月十七日

齋藤貞兵衛

口上之覚

私妻之伯母、西尾隱岐守様御家来神藤新平与申者祖母、此間中方逗留二罷越居候処急症二而今辰中刻病死仕候、尤同間二居合不申候間遠慮引不仕候、此段宜御申達可被下候、以上

二月三日

海塩庄兵衛

覚

小石川築地辻番所御組合之内田村千三郎様、御改名御願之通金左衛門様与被仰付、一昨四日被為召西丸御納戸御番被仰付候間申来候間、此段御達申上候、以上

二月六日

手嶋忠兵衛

口上之覚

先年奉願厄介仕候牧嶋門蔵儀、其後奉願具服町二罷在候浪人吉沢茂右衛門与申者方江養子差遣候処、此度不熟二付離縁仕候間今日引取、又候厄介二仕置申候、此段宜被

仰達可被下候、以上

二月七日

加茂清左衛門

口上之覚

私儀思召被成御座御役御免、御広間詰被仰付御機嫌之程奉恐入候、依之奉伺差扣候、此段宜被仰達可被下候、以上

二月十三日

三富甚左衛門

覚

一駕籠人足

式人

但宿駕籠共

一分持人足

忝人

右者来十七日爰元出立仕候二付、東海道伏見先触之儀奉願上候、以上

二月十四日

加藤庄蔵

覚

御寄合本多玄蕃様、私御同門二付御稽古之節為御相手罷出候様被仰下、依之罷出候者御目見可被仰付儀二奉存候、

不苦儀二御座候者罷出申度奉存候、此段奉伺候、以上

二月廿二日

今村力蔵

口上之覚

右之者妹、松平阿波守様御家来堀北金之丞与申者妻二縁談申合度、先達而奉願上候処其後病氣二付今以睨与不仕候、急尔全快可仕体無御座候二付、双方熟談之上離縁仕候旨申達候、此段御達申上候、以上

二月廿四日

若殿様
御小性頭

口上之覚

相州大山不動尊江靱負様御内々為御代参近々被差遣候二付、此段被仰達可被下候、以上

三月七日

加茂清左衛門

口上之覚

私拝借御長屋裏地面江九尺式間、瓦葺塗家・物置別紙絵図面朱引之通取繕申度奉存候、尤年貢地御座候得共、御用之節者早速取払差上可申候間、被仰付被下候様奉願上

候、以上

三月九日

小泉周八

口上之覚

靱負様為御代参相州大山不動尊江今曉寅刻出立仕候、此段宜被仰達可被下候、以上

三月十一日

加茂清左衛門

口上之覚

靱負様御代参相勤相州大山方今未刻帰着仕候、此段宜被仰達可被下候、以上

三月十四日

加茂清左衛門

口上之覚

御門番御長柄格
八十八

右之者伯父、信州水内郡上野村ニ罷在候吉右衛門与申者、去ル六日病死仕候段告来候間申達候間、三日遠慮引為仕候、此段御達申上候、以上

若殿様

三月十四日

御小性頭

但、御長柄之者産穢并忌引者死失輕重無差別、三日遠

慮引先格也

口上之覚

私儀段々結構被召仕冥加至極難有仕合奉存候、然ル処一
体病身ニ而平日持病之積氣度々差発(癩)、其上腰痛ニ而此節
別而不出來ニ而氣分差塞引込罷在、岡西栄玄薬服用仕
種々療治仕候得共兎角相勝不申、急ニ全快可仕体ニ無御
座候旨栄玄申聞候、如何様奉勤上度候へ共、御用多御役
場之儀手間取候程も難計奉存候、依之御機嫌之程奉恐入
候得共、何卒此上之以御憐愍御役御免被成下候様奉内願
候、此段宜被仰達可被下候、以上

三月十九日

青木勘之丞

但、粘入半切、上包半紙折懸ケ、上二名計

口上之覚

金子唯右衛門

右之者先妻之母、水戸中納言様御家来田中半左衛門与申
者養母、此間中逗留罷越居候処急症ニ而今曉寅刻病死仕
候、同間ニ罷在候ニ付今一日之遠慮引仕候旨相達申候、

此段御達申上候、以上

三月廿五日

茂上有助

口上之覚

藏石專助

右之者親宇右衛門大病ニ付、難見放奉存候間看病引仕度旨申達候間、此段御達申上候、以上

三月廿五日

齋藤貞兵衛

口上之覚

私儀此度当御役被仰付候処、御長屋手狭ニ付御用之御差支ニも可相成難儀仕候ニ付、何卒屋敷地面拝領仕家作仕度奉内願候、此段宜御申達可被下候、以上

四月三日

藤田 蔀

但、粘入半切、上包半紙折懸ケ、上二名計

覚

岩岡新八

右之者宗旨之儀、浄土真宗ニ而浅草本願寺地中専勝寺旦那御座候処、此度同宗ニ而駒込鱧繩手西善寺旦那改

寺仕候旨申達候、此段御達申上候、以上

四月十四日

御元々共

口上之覚

私妻之甥牧野門藏儀先年奉願厄介ニ仕置候処、此度大久保安芸守様御家来牧嶋兵弥儀、差戻具候様申聞候間任意差戻申候、此段宜被仰達可被下候、以上

四月十九日

加茂清左衛門

口上之覚

私儀此度拝領屋敷江家作仕候処、先達而瓦葺之儀被仰出茂御座候得共、暫之内茅葺ニ仕度奉存候、以上

四月廿五日

藤田 蔀

口上之覚

私親義兵衛儀持病之痔疾ニ而難儀仕候ニ付、相州箱根温泉江入湯為仕度旨先達而奉願上候処、其砌方流行之風邪引続此節疝積差^種難儀仕候、依之少も快氣仕追而出立為仕度奉存候、此段御届申上候、以上

四月廿八日

長坂東助

口上之覚

私悴部儀此度内願之通屋敷地面拜領被仰付難有仕合奉存候、右二付仮形ニ屋作為仕度奉存候処内外難渋仕候、依之御時節柄奉恐入候得共、何卒相応之拝借金被仰付被下置候様奉願候、此段宜被仰達可被下候、以上

五月九日

藤田与一兵衛

覚

御年番鈴木主計様御家来中^方申来候者、駒込新道辻番所御修復近々出来ニ付、御割合御出銀金貳両四匁八厘三毛御座候由、右御出銀之儀辻番掛リ藤田忠助江相渡候様被仰移可被下候、以上

五月十六日

手嶋忠兵衛

口上之覚

蔵石專助

右之者親宇右衛門儀病死仕候処、久々病氣ニ而取片付等甚難渋仕候、依之何卒三拾両壹分之御金拝借仕度段相願候間、此段御達申上候、以上

五月廿日

六浦団次

口上之覚

此度本所道作被仰付候ニ付、以来不陸之場所并砂利踏敷候所迄も、屋敷持場^ノニ而取繕致手入等置候様、尤辻御番所御組合中江も右之趣申通候様、御郡代方手附内田泰助与申仕^方被申聞候間、此段御達申上候、以上

五月廿一日

萩原仙助

口上之覚

私儀結構被召仕冥加至極難有仕合奉存候、然ル処段々老年罷成記憶薄相成候所、兼役多相勤候儀甚無覚束奉存候、依之此上之以御憐愍御奥家老勤之場御免被成下候様奉願候、此段宜被仰達可被下候、以上

五月廿九日

中川宗左衛門

但、粘入半切、上包半紙折懸ケ、上二名計

口上之覚

私儀結構被召仕冥加至極難有仕合奉存候、然ル所及老中^(年)其上近年多病ニ罷成、勤仕無覚束為差儀も勤上^(年)不仕、

重々奉恐入候得共御宛介奉差上度奉存候、何卒此上之以御憐愍是迄之通御家来ニ而被差置被下候様奉内願候、此段不苦儀ニ候者宜被仰達可被下候、以上

六月五日

藤坂道恕

口上之覚

靱負様、唯乘院様御新葬御法事御勤番被為蒙仰候ニ付、明八日上野御宿坊江罷越御法事中詰切申候、此段宜被仰達可被下候、以上

六月七日

高嶋郡八

口上之覚

新井左平太儀、靱負様、唯乘院様御新葬御法事御勤番被為蒙仰候ニ付、明八日上野御宿坊江罷越御法事中詰切之旨申達候間、此段御達申上候、以上

六月七日

藤田 蔀

口上之覚

右之者先達而願之通被仰付候厄介八木橋勘十郎妹、三橋

渡辺弥之助

但馬守様御家来鈴木善右衛門与申者方江今日差遣、婚姻相整候旨申達候間、此段御達申上候、以上

六月九日

若殿様

御小性頭

口上之覚

唯乘院様御法事相濟候ニ付御宿坊引取申候、此段宜被仰達可被下候、以上

六月十日

高嶋郡八

口上之覚

新井左平太儀、唯乘院様御法事相濟候ニ付御宿坊引取候旨申達候間、此段御達申上候、以上

六月十日

六浦団次

口上之覚

親如硯御手伝御用掛り相勤候節公儀方拝領仕候時服、私着用仕度奉存候、此段奉伺候、以上

七月二日

阿部登弥太

覚

一損所 略

右之通去月廿九日風雨ニ而飯田千藏・小原惣次裏通崖崩落損候処、小身之衆ニ御座候間御修復不被成下候者相成間敷与奉存候、此段御達申上候、以上

七月四日

丸山

御徒目付

覚

飯田金左衛門・小原惣次裏通、御家人衆門前、崖崩落候ニ付土取片付として御手木・御中間共罷出、休足之節佐藤源七方方吞湯等差出彼是世話ニ罷成候ニ付、相応之御挨拶被成下候様仕度奉存候、此段御達申上候、以上

七月四日

丸山

御徒目付

覚

御屋敷下不明御門外御家人衆小嶋忠左衛門前通、先日之大雨ニ而御屋敷方水押流し道崩込往来成兼候ニ付、何卒御取繕被成下候様被頼越候間、一作切御修復被仰付被成下候様仕度奉存候、此段御達申上候、以上

八月十二日

榎村半平

口上之覚

先達而奉願候私悴林平養子十次郎儀、去月廿三日福山表乗船仕、当月三日大坂表江着仕候処、風雨ニ而相見合同五日八時過ニ出立仕、同七日横田川満水仕候ニ付石部駅ニ一日逗留仕候、同九日庄野駅方石薬師宿之間満水ニ付所々往還損通路相成不申、同日朝方翌十日八時過迄逗留仕候、同十四日見附駅ニ而人馬差支、四時方八時迄之内隙取申候、同十六日江尻駅庵原川満水ニ付橋落通行相成不申候、昼時方居逗留仕候、同十九日雨天ニ付酒匂川馬越相成不申候ニ付九時迄逗留仕候、右ニ付去十七日着可仕候処相延、今夕未刻到着仕候間直ニ引取申候、此段宜被仰達可被下候、以上

八月廿一日

荒木忠太平

口上之覚

私共鎗術之儀ニ付奉願上出府仕候処、山本嘉兵衛様方御伝授相済申候ニ付明後廿八日出立可仕之処、道中不案内之儀ニ茂御座候間、何卒来廿九日御医師并御勘定組頭、在番交代之者与一緒ニ出立仕度奉存候、此段奉伺候、以

上

八月廿六日

山岡久之進

本間勝藏

口上之覚

私母儀未年若ニ御座候ニ付、母方之叔父土岐宗意与申者、水野長左衛門様御組同心遠山常五郎与申者妻ニ再縁談申合度旨、一類共申聞候ニ付任其意度奉存候、私儀是迄奉願上右宗意方ニ同居仕罷在候処、未幼年ニ御座候間右常五郎方へ罷越、成長迄同居仕世話相頼申度奉存候、此段奉伺候、以上

八月廿六日

中村新太郎

右式通共粘入半切、上包半紙

口上之覚

私儀去月廿三日福山表乗船仕、去十七日迄ニ着可仕候日積ニ御座候処、大坂江着仕、風雨ニ付相見合一日半逗留仕、五日八時ニ伏見江乗船仕、同六日伏見方石部迄罷越候処、横田川満水ニ付石部ニ一日逗留仕候、同八日石部

方関迄罷越、九日関方亀山迄罷越候処、庄野宿方石葉師之間所々往還損シ通路相成不申候、翌十日八時迄亀山ニ逗留仕候、同十四日見附ニ而人馬差支、四時方八時迄隙取申候、同十六日江尻迄罷越候処、庵原川満水ニ付橋落通路相成不申昼時方居逗留仕候、同十九日雨天ニ而酒匂川馬越相成不申候ニ付昼時迄小田原ニ居逗留仕、去廿二日未下刻着仕候、右ニ付増旅籠相渡候様奉願上候、此段宜御申達可被下候、以上

八月廿八日

齋木文礼

覚

私家来与助与申者、去月晦日御扶持方代銀受取ニ差遣候^(先)処、使遣方御扶持方通ひ右代金三分式朱卜錢五百拾文取逃、受人利兵衛与申者方へ早々申遣候処近在江罷越留主之由ニ付、大屋和助与申者江申遣候、利兵衛罷帰候者早々相届候様ニ申遣置候、其後受人并大屋江も度々催促申遣候処、未罷帰不申候段申聞候、余リ延引仕候間御扶持方通ひ取逃仕候段を先御届申上候、以上

九月十二日

塩田 糾

口上之覚

岩永富治

右之者先達而奉願上候薬湯中二者候得共、快方ニ付明日
方出勤仕候旨申達候、此段御達申上候、以上

九月廿日

若殿様

御小性頭共

口上之覚

本郷六町目横町

家主和助店

奉公人入口

利兵衛

私家来清八与申者、浅草新寺町妙蓮寺門前家主宇平次店、
仏師友吉与申者受人ニ而召抱候処、母病氣ニ付暇相願去
月廿三日暇差遣、為人代右利兵衛受人ニ而与助与申者差
越召仕候、然ル処去月晦日御買上米代銀受取差遣候処、
使先方右御扶持方通并代銀取逃仕候ニ付、受人利兵衛方
江早々申遣候処近在江罷越候而留主之由ニ付、家主和助

与申者方江申遣利兵衛罷帰候者早速相届候様ニ申遣置、

其後受人并右和助江も度々催促申遣候処、受人利兵衛帰
之程も不相知候趣申聞一向取合不申候、依之何卒返納仕
候様被仰渡御座候様公儀御届之儀奉願候、此段宜被仰達
可被下候、以上

九月廿二日

塩田 糾

覚

一御扶持方通式通、張紙状箱ニ入

内俵毛、通壺通

一金三分与五百拾文

右之通家来与助取逃仕候、以上

九月廿二日

塩田 糾

口上之覚

先達而御達申上候家来取逃金返納之儀公儀御届之儀、親
糾方相願候通於私も奉願候、此段宜被仰達可被下候、以
上

九月廿二日

塩田 毛

覚

一御扶持方通壹通、親糾通与紙張状箱ニ一緒ニ入
一金壹分式朱式百五拾壹文

右之通親糾家来与助取逃仕候、以上

九月廿二日

塩田 毛

但、粘入半切、上包半紙折懸ケ、上ニ名計

口上之覚

私儀持病ニ痔疾御座候処去冬中方兎角不相勝、当冬ニ至
別而不出来時々漏血仕、此節ニ相成又候不相勝、当月四
日方引込罷在、吉村養碩薬服用仕療用仕候得共快無御座、
養碩申聞候者、多年之持病此上快気ニ趣候得共、折ニ触
漏血仕候儀者迎も平愈者仕間敷哉与申聞候、大手御番所
御場所柄之儀ニも御座候間、何卒以御憐愍勤番御免被成
下候様奉内願候、此段宜被仰達可被下候、以上

九月廿三日

山口平馬

口上之覚

一昨廿一日夜五時頃迄、木戸并入口戸引寄置在宿罷在、

其後メリ附相休候、然ル処昨朝兩所メ怪敷儀も無御座候
得共、入口内江差置候米壹俵紛失仕候、此段御届申上候、
以上

九月廿三日

新井左平太

口上之覚

佐久間鍵太郎儀未幼年罷在、并同人厄介異父兄船越幸次
郎儀是又幼年ニ付火之元等無心元奉存候間、叔父滝孫十
郎方江引取成長仕候迄世話仕度旨申聞候ニ付、任其意御
長屋差上右幸次郎一緒ニ同人方江罷越同居仕度旨奉願上
度処、当時忌中、右於御役方奉願候、此段御達申上候、
以上

九月廿九日

大御目付共

但、粘入半切、上包半紙折懸ケ、御役名

口上之覚

私拝領屋敷裏年々崖崩損シ候処、当秋大雨之節別而相損
シ候ニ付、なそへニ仕候者大崩ニも相成申間敷奉存候、
依而御修復之儀奉願度候得共、御時節柄之儀ニ候間右之

通手前ニ而取繕可仕候、然ル処追々拝領地減候ニ付何卒相成候者、南隣御茶園之内御用ニも無御座候者、間口式間通り奥行廿間拝借仕度奉願候、御用之節者早速差上可申候、此段宜被仰達可被下候、以上

十月二日

太田八郎

口上之覚

私家来与助与申者取逃仕候ニ付、公儀御届之儀先達而奉願置候処、右与助受人利兵衛家主和助并浅草新寺町連明寺門前安五郎店友吉与申者兩人、公儀町御奉行所江御呼出之上店請人等対談仕候得者、何レ共可相濟儀与被仰渡候ニ付、対談仕取逃金之儀可相弁候間、内濟之儀右利兵衛引受人を以相願候ニ付、上江懸御苦勞奉恐入候得共任其意差遣度奉存候、此段宜被仰達可被下候、以上

十月二日

塩田 糾

口上之覚

先達而家来取逃仕候ニ付公儀御届之儀奉願置候処、此度内濟之儀願出候ニ付親糾方御達申達候通、上江懸御苦勞

奉恐入候得共、私ニおゐても同様仕度奉存候、此段宜被仰達可被下候、以上

十月二日

塩田 毛

但、式通粘入半切、上包半紙、上ニ名計

口上之覚

私悴彦太郎先達而病死仕候ニ付、同人妻双方熟談之上、里方大岡主膳正様御家来相原丈左衛門与申者方江今日差戻申候、此段宜被仰達可被下候、以上

十月六日

木村吉右衛門

覚

下谷長者町ニ罷在候

馬医福田弥助弟子

和助

受人

権吉

右者当時丸山御厩小頭無御座候ニ付、上下御屋敷御口之者相吟候処小頭ニ可被仰付者無御座候、依之右之者丸山

厩小頭二御抱入被仰付被下度奉存候、此段御達申上候、
以上

十月廿一日

木村吉右衛門

口上之覚

徳輪院様方私亡父拜領仕候名、牧太与悴勝蔵へ改名為仕
度奉存候、此段奉伺候、以上

十月廿二日

浜口多宮

粘入半切、上包半紙折懸、上三名計

左之書付并金谷駅本陣河村八郎左衛門方之一札添被差出
候間、平助殿江差出候処御移可被成旨

覚

私儀当月二日大坂表出立仕候処、大井川満水ニ付同九日
方十二日迄四日之内金谷駅江滞留仕候、依之十人目付上
下五人分増旅籠相渡候様被仰移可被下候、以上

十月廿七日

中山斧介

口上之覚

私儀從酉閣院様拜領仕候織・御熨斗目、悴蒞江着用為仕

度奉願候、以上

十一月二日

藤田与一兵衛

粘入半切、上包半紙、上三名計

覚

御預り原明地御成并通御・御見通之節、以来御前夜時半
廻致候様被仰渡候ニ付、面御門出入繁々ニ付同所御番人
不寝仕候間、老人分夜扶持被成下候様兼而被仰移置被下
候様仕度奉存候、此段御達申上候、以上

十一月六日

御徒目付

口上之覚

加藤三折儀以御慈悲拾五才迄私共世話仕遣候様被仰付、
当人者勿論一統冥加至極難有仕合奉存候、則当年拾五才
ニ罷成申候、依之奉恐入候得共此上尚亦御憐愍之儀一統
奉内願候、此段不苦候者宜被仰達可被下候、以上

十一月九日

奥表御医師共

覚

御小書院二之御間・三之御間并御廊下付鴨居下、是迄赤

砂壁ニ御座候処、損シ度々御座候ニ付御張附ニ可被仰付

哉、此段奉伺候、以上

十一月十一日

御普請奉行共

享和三癸亥年

口上之覚

山中左男路旧獵^(獵)廿九日家内召連他行仕、悴専之丞儀茂其

以前他行仕候処、以今罷帰不申候間所々相尋候処行多相

知不申、出奔仕候旨右同人親類共方申達両隣家方も申届

候間、此段御達申上候、以上

正月三日

斎藤貞兵衛

覚

一品書爰ニ略ス

右者御中間六兵衛与申者、御用ニ而日々私方江罷越候、

庭ニ御座候物置江所持之品之由ニ而差置候処、昨夜紛失

仕候旨申聞候間、此段御届申上候、以上

正月廿日

岡野甚八郎

覚

一品書同断

右者信州抱御中間水目村六兵衛与申者所持之所ニ御座候、

岡野甚八郎殿江御用ニ而日々罷越候ニ付、同所庭ニ御座

候物置江差置候処、昨夜紛失仕候旨申達候間、此段御届

申上候、以上

正月廿日

石崎定八

口上之覚

私儀是迄親郡八方ニ同居仕罷在候処、家内多手狭ニ而難

儀仕候ニ付、何卒御長屋拝借仕度奉内願候、以上

正月廿一日

高嶋郡助

粘入半切、上包半紙折懸、上ニ名計

覚

信州抱御中間

黒川村

豊作

二十五才

同 針之木村

伝右衛門

二十五才

上総抱御中間

石神村

新八

三十八才

右之者共昨日石原御屋敷江草取ニ罷越候処、御屋敷裏通
往来埋樋之内ニ別紙之品々入有之由ニ而、右豊作見付出
し吟味役共江差出候間申達候間、此段御届申上候、以上

正月廿三日

御元々共

口上之覚

長生院様方私祖父拝領仕候名、吉重郎与改名仕度奉存候、
此段奉伺候、以上

閏正月六日

堀江岩五郎

但粘入半切、上包半紙折懸、上三名計

口上之覚

先達而奉願娘儀石川主殿頭様御奥江御側奉公ニ差出置候

処、病氣ニ付此度御暇頂戴仕下宿仕候、此段宜被仰達可

被下候、以上

閏正月七日

藤田甚次郎

覚

私儀当亥拾七才ニ罷成申候、此段御達申上候、以上

閏正月十二日

高木金次郎

口上之覚

私次男郡助儀御上屋敷拝借御長屋江今日引越申候、此段
宜被仰達可被下候、以上

二月七日

高嶋郡八

覚

服部半助組山本久五郎・井上八左衛門組三村多藏、三道
具稽古昨八日先方江罷越致入門候、右ニ付為謝礼輕肴差
遣申度旨願出申候、此段宜御取計可被下候、以上

二月九日

御者頭共

口上之覚

私儀今日被仰談候御用御座候ニ付、四時御座敷江可罷出

候処昨夜方積氣差^(瘧)発難罷出、依之為名代阿部小助相頼差
出申候、此段宜被仰達可被下候、以上

二月十六日

小林東市

御供一件

享和元年正月廿七日被仰出候

一 御奥様御半供ニ而御出之節、御徒目付・御徒士壱人御減
御徒士三人被召連、内壱人者部屋目付方罷出、御徒目付
之場相心得候様去年二月被仰出候処、以来前々之通御
徒目付被召連候間、御徒士三人共平之者方差出候様

同年四月十八日

一 兩殿様御供婦リ御迎ニ罷越候節、行列正敷猥ニ無之様御
供頭前後心配、并御徒目付同様心懸候様可被談候

但、寄々談之ヶ条之内ニ有之候得共、伺之上其向江計

申談候

享和元年六月廿七日

一 若殿様御共建之内、天明八年八月御駕籠脇御先ニ而三人
御減被成候処、以来御駕籠脇者御供番式人増、御先格之
通都合八人高二被召連、依而下乗迄是又御先格之通御駕
籠脇六人被召連候事

享和元年六月廿八日

一 左之通大目付井上美濃守様方去御尋ニ付、御同人様江左
之書付之通今日及御届候

阿部伊勢守、下乗迄召連候供

侍 六人 中之口迄召連候供

押足輕壱人 侍 三人

草り取壱人 押足輕壱人

挾箱持壱人 草り取壱人

陸尺 四人 供草り持壱人

供草り持式人 雨天之節者

雨天之節者 傘持 壱人

傘持 壱人 雨具持壱人

雨具持壱人 御謡初・玄猪之節

御謡初・玄猪之節

提灯持壺人

供草り持壺人

雨天之節者

提灯持壺人

雨天之節者

傘持 壺人

右之通ニ御座候、以上

傘持 壺人

雨具持壺人

六月廿八日

雨具持壺人

御謡初・玄猪之節

伊勢守狩衣ニ而登城仕候節者、左之通供之外下乗内召連申

御謡初・玄猪之節

提灯持壺人

候

提灯持壺人

烏帽子持足輕壺人

右之通ニ御座候、以上

介添徒士 壺人

六月廿八日

添人中間 壺人

主計頭大紋ニ而登城并供奉相勤候節者、左之通供之外下乗

右之通ニ御座候、以上

内召連申候

六月廿八日

烏帽子箱持足輕壺人

阿部主計頭、下乗迄召連候供

介添徒士 壺人

侍 六人

添人中間 壺人

中之口迄召連候供

押足輕壺人

侍 貳人

供奉之節

草り取壺人

押足輕壺人

太刀箱持足輕 壺人

挟箱持壺人

草り取壺人

右之通ニ御座候、以上

陸尺 四人

供草り持壺人

六月廿八日

享和元年八月廿三日

一左之通御供頭泰藏被申届候間、是迄御供加番不罷出候儀
一昨年御役方申達置候事故、明日一卜通御年寄中江可
及御達候事

同年九月十日

一明十一日御新造様松平左京太夫様江被為入候ニ付、御供
両頭之内壺人可罷出候処、彼是病人多兩人ニ而当番立切
ニ而難罷出断、依而御附御近習之内ニ而御供頭之場心得、
御供番壺人増平士ニ而御供頭之場心得候ニ付、鑓上下着
用ニ不及旨被仰出候事、御用人方紙面を以被申越候

同年十月廿三日

一左之通御供頭方問合、各申合候処白昼御直鎗之方者持帰
候様被仰出、且夜分御帰座之節御提灯等矢張御定紋附御
用被遊、大忍与違ひ他向江御包ミ被成候事ニも無之、乍
去夜分ニ而も御時宜合等之儀者其節伺被仰出次第、何れ
へ成共御はつし被遊候哉、御供帰之節御道具伏候ものニ
者決而有之間敷、被相尋候者其訊申答可然事ニ申合、此

間相伺候処御聞置、今日被仰聞候者、御役方申合候通御
三家様・御三卿様江も御道具ヲ建、其外御役人様方・御
両敬之御方様江も下座仕、相尋候者其訊答候様可致旨及
挨拶候様被仰聞候間、右之趣及挨拶御役下へも心得申談
候

若殿様御上屋敷江被為入御略供被仰候節、御直鎗之方
持帰、於途中御三家様・御三卿様者勿論其外御役人
様方・御両敬之御方様御通行之節、可成丈横小路江は
つし候心得ニ候得共、万一其間無之節者御三家様・御
三卿様方江者御道具を伏セ罷在可申哉、又者矢張御道
具を建下座可仕哉、其外御役人様方并御両敬之御方様
江者一向下座不仕通候而苦ケ間敷哉

享和元年十月廿七日

一若殿様御略供被仰出、御供帰之節途中下座心得之儀去廿
三日伺相濟候処、猶亦左之通心得候様御供頭江可及挨拶
旨被仰聞候間則申談、御役下江も心得申談候
御略供被仰出、御道具片々持帰候節、於途中下座有

之相尋候者茂有之候者、上屋敷^ら供婦いたし候ニ付持
鑓片々ハ同所ニ差置罷歸候趣ニ相答候

同年十二月廿九日

一左之通御改被遊候間、為承知御供頭江申談候様被仰聞候
間、御供頭御役下江申談候

若殿様御引馬御鞍覆去未年七月被仰出候、溜塗・滑草
之処黒塗ニ御改、其外者は迄之通与被仰出候旨

享和二閏戊年五月六日

一左之通御供頭^ら問合、矢張其形ニ而御供御近習^ら御供頭
立場代罷出候事故、惣体江触出可然旨及挨拶候

若殿様御出触之儀是迄御供頭之場ニ而物体^惣へ触出候得
共、此度御供頭三人差扣被仰付候ニ付、爰元^ら触出候
而者甚手遠ニ付、如何取計可申哉問合

同年十月七日

一左之通御供頭与一郎問合、兩殿様御忍之節御途中下座仕
間敷旨兼而被仰出、上方様御忍之節被仰出者無之候得共、
可成丈横小路江はづし若シ火急之節者片寄慎罷通候心得

ニ罷在、勿論運之助様・滝五郎様・熊五郎様へハ下座仕
候、是ハ自己之事、御供婦之節者別而御道具茂有之候間

下座仕間敷哉、各申合此間御年寄中江相伺候処御聞置、
今日被仰聞候者、御奥様・御新造様・御姫様方江御供婦
之節下座ニ不及、御忍ニ而も運之助様江者下座仕候様被
仰聞候ニ付、其趣ヲ以御供頭藤吾江及挨拶候

但、御供婦之節滝五郎様・熊五郎様江者下座ニ不及、

自己之節者は迄之通下座仕候様被仰聞候、上方様御忍
供之節兩殿様御供婦之もの御途中ニ而下座可然哉

同年十一月十四日

一左之通被仰出候間承知置候様被仰聞候

若殿様爰御元江大忍ニ而被為入候儀茂可有御座候段被
仰出候

一前条御忍之節是迄爰御元ニ而者御開門不致候処、以来御
開門致候様被仰聞候

一兩殿様御忍之節御家中之面々御時宜不及段寛政元年五月
被仰出、其砌諸向江申談置候間此度者不申談候旨治左衛

門殿江申達候処、其通与被仰聞候

享和二年十一月廿日

一御嫡子様御城内江被召連候御供連、昨年六月大御目付井上美濃守様江御届相濟候処、尚亦此度御留主居御呼出、古来方之御嫡子様方御供連之儀、御城御中之口御目付様御尋ニ付、御供頭心得委細書付差出候様御移ヲ以申談候様、去ル十五日平助殿被仰聞候間申談候処、今日左之書付被差出候間御同人江差出候

覚

一御供番頭	壹人	一御徒士頭	壹人
一御刀番	壹人	一御簾番	壹人
一御近習	貳人	一御供番	貳人
一御徒士組頭	壹人	一御徒士	六人
一押之者	四人		

右者元文三年二月十七日、若殿様御乗出被遊候ニ付御供連右之通被仰出、御陸尺御手廻リ惣御同勢者殿様之通御改被遊候旨被仰出候、御城内江召連候御供連之処者手

留等無御座相分不申候、以上

十一月廿日

御供頭共

一前条御供連之儀御役方ニ而茂相吟候処、一体之御連連計日記ニ相見御城内之儀相分不申候、此等之儀者平助殿へ御咄申上候、且亦御吟之上此度之御届も相濟候ハ、其趣御役方江も御移被下候様御同人江申上候処御承知之事
同年同月廿三日

一左之趣大目付井上美濃守様方御尋ニ付、去酉年六月廿八日御同人様江被及御届候処、此度御下札ヲ以御差図有之候間此旨承知置、御供頭泰蔵江申談御役下江も心得申談候

阿部伊勢守、下乗迄召連候供	
一侍	六人
一草り取壹人	一挟箱持 壹人
一陸尺 壹人	一供草り持壹人
雨天之節	
一傘持 壹人	一雨具持 壹人

下ケ札 此兩具持供ニ被召連候儀者無用ニ致、跡方罷越用向

相弁候者早速下馬迄退候様可致候

御謡初・玄猪之節者

一提灯持 忝人

中之口迄召連候供

一侍 三人

下ケ札(四品以前二人召連申候、其外相替儀無御座候

一押足輕 忝人

下ケ札 書面之趣ニ而者押足輕兩人被召連候趣ニ相聞候へ共、
以来中之口迄忝人被召連候様可致候

一草り取 忝人 一供草り持忝人

下ケ札 書面之趣ニ而者供草り持三人被召連候趣ニ相聞候へ
共、以来中之口迄忝人被召連候様可致候

雨天之節者

一傘持 忝人 一雨具持 忝人

下札 此兩具持供被召連候儀無用ニ候、跡方罷越用向相弁

候ハ早速下馬迄退候様可致候

御謡初・玄猪之節者

一提灯持 忝人

右之通ニ御座候、以上

六月廿八日

御名家来
今川剛八

御徒目付組頭諸田忠五郎申達候者、先達而被差出候別紙
書付江下ケ札致候間相心得可申旨、若下札之通ニ而差支
之儀も有之候者其段書付差出可申旨、且別段両山御参詣
之節二天門方内供連之儀者、御城下乗方内之通相心得可
申旨申達

享和二年十一月廿九日

一御城内御供連御附札之趣、御移ヲ以去廿三日御供頭江申
談置候処、御差聞無之旨被申達候間、治左衛門殿へ申達
御役下江も尚亦心得申談候

但、供草り持三人之様ニ相見候由御附札ニ有之候得共、

下乗迄兩人連内忝人を御中ノ口迄召連候事ニ候、然ル

処一体下乗江草り持与申儀不相成、以来忝人御中ノ口

江召連候事ニ致候様御留主居庄兵衛被申聞候間、御供

頭江其旨申談、治左衛門殿江申達置候

同年同月晦日

一若殿様御忍御供建左之通被仰出候間、承知置候様平助殿
江被申聞候

一御近習 四人 一御陸尺御中間六人

一御草り取 同壹人 一御挾箱持 同壹人

一押御中間部屋頭壹人 一合羽駕籠持 壹人

一御近習草り取 壹人 一御提灯持 四人

一前条両御役下御先扨、丸山者夜分御用捨被仰付候旨御附

御小性頭被申聞候間、丸山御役下江申談候

一左之通承知具候様御小納戸纏方被申届候間、両御役下江

心得申談被為入候節、御案内有之候者御奥御張紙江触込

候様中間へ申渡置候様、御役下八藏江申談候

明朔日方以来滝五郎様爰御元江被為入候節御中之口方

被為入候、依之御小性頭・御近習御出迎申上候様被仰

出候旨

但、御門方御中之口迄之所鞞負様通与被仰出候

(和服方)
享三癸亥年閏正月廿二日

一昨年十一月古来方之御嫡子様御城内御供連之儀御目付様

方御尋有之、同十二月三日左之通及御届候処、御徒目付

組頭諸田忠五郎殿被受取、追而御達有之迄者是迄之通心

得候様被申聞候間則及御達申候、其節届落候旨御留主居

剛八被申届候、御移も可有之候処是又落候事

覚

古代方嫡子之分、御城内供連左之通

故伊勢守嫡子

阿部富之助

後 伊勢守

右、元文三戊午年二月廿八日初而御目見之節方

下馬方下乗迄

一侍 六人

下乗方内

一侍 式人

但、幼年之内者外二附之者壹人差添

一押以下之儀者相分不申候

伊勢守嫡子

阿部主計

当伊勢守

右、明和四丁亥年閏九月朔日初而御目見之節方

下馬方下乗迄

一侍 六人

一草り取忝人

一陸尺 四人

雨天之節者

一傘持 忝人

下乗方

一侍 忝人

一草り取忝人

雨天之節者

一傘持 忝人

一押足輕 忝人

一挟箱持 忝人

一供草り持忝人

一雨具持 忝人

一押足輕 忝人

一供草り持忝人

一雨具持 忝人

伊勢守嫡子

阿部運之助

当主計頭

右、天明七丁未年十月朔日、初而御目見之節方供連前二同し

但、幼年之内其外ニ附之者忝人差添

右之通御座候、尤元文以前之儀相調候得とも旧記等ニ相

分不申候、以上

十二月三日

享和三年閏正月廿五日

一左之通寄々申談候様平助殿被仰聞候

当时若殿様御上屋敷江御忍ニ而御出被遊候ニ付、於御途

中御時宜不仕候様先年も被仰出候通、御時宜不仕不敬之

儀も無之様謹ミ可被罷通候

享和三年二月五日

一左之通御者頭方問合ニ付、御足輕迎も矢張謹ミ罷通可然

旨及挨拶候

若殿様御忍供御出之節、於御途中御家中之面々者御時

宜不仕謹ミ罷通候事ニ候処、御足輕共之儀者同様為心

御名家来

今川剛八

得可申哉之旨

東京阿部家資料 文書編(4)

発行日 二〇一四年(平成二十六年)三月二十五日

編集発行

福山市教育委員会文化課 歴史資料室

福山市霞町一丁目一〇番一号

〒七二〇・〇八一二

TEL〇八四・九三二・七二六四

発行

福山市教育委員会

印刷・製本

かもめいと有限公司